

* 0 0 3 3 3 6 7 0 0 0 *

0033367-000

3 6 1 - S i 4 7 1 g

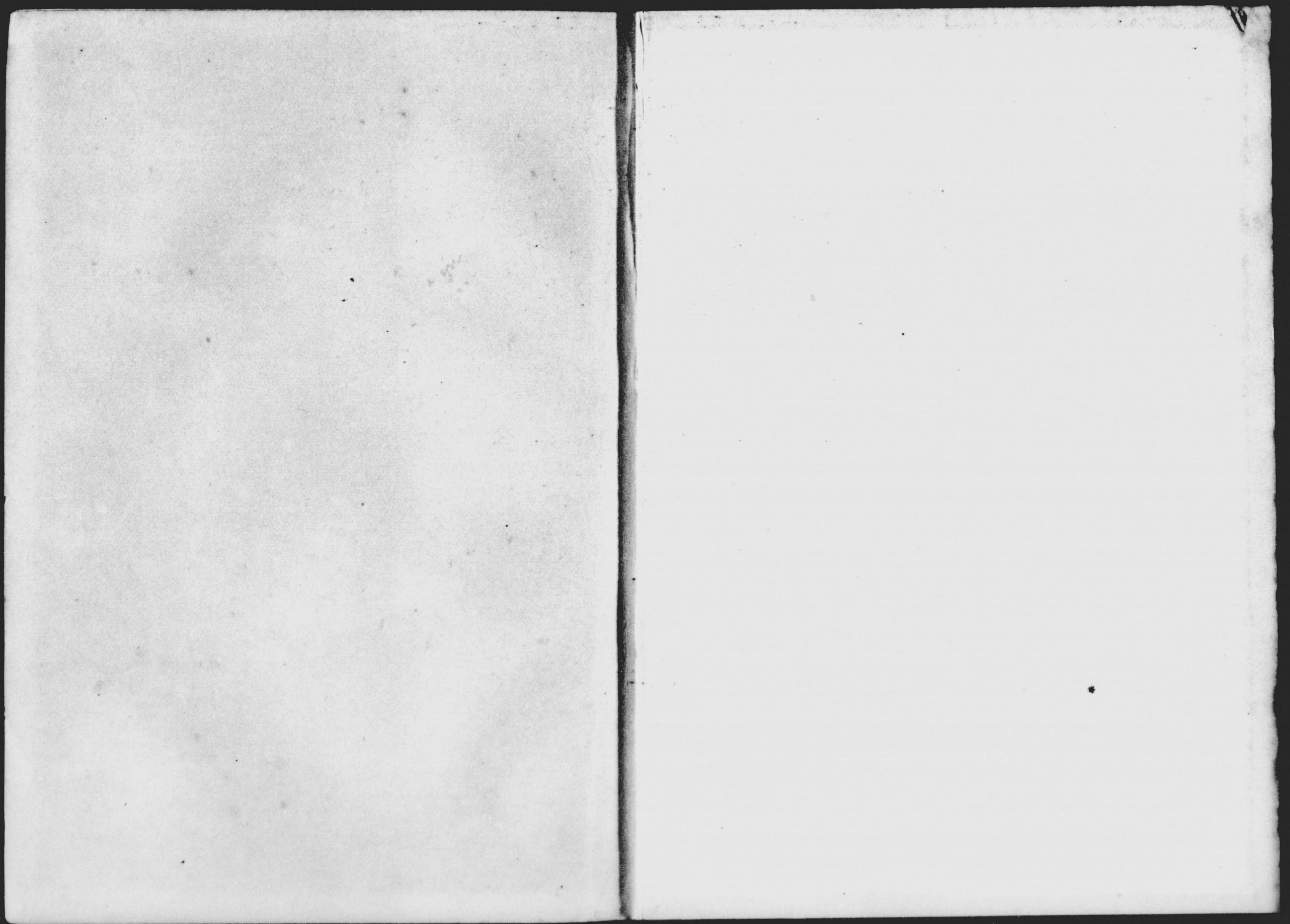
群集社会学

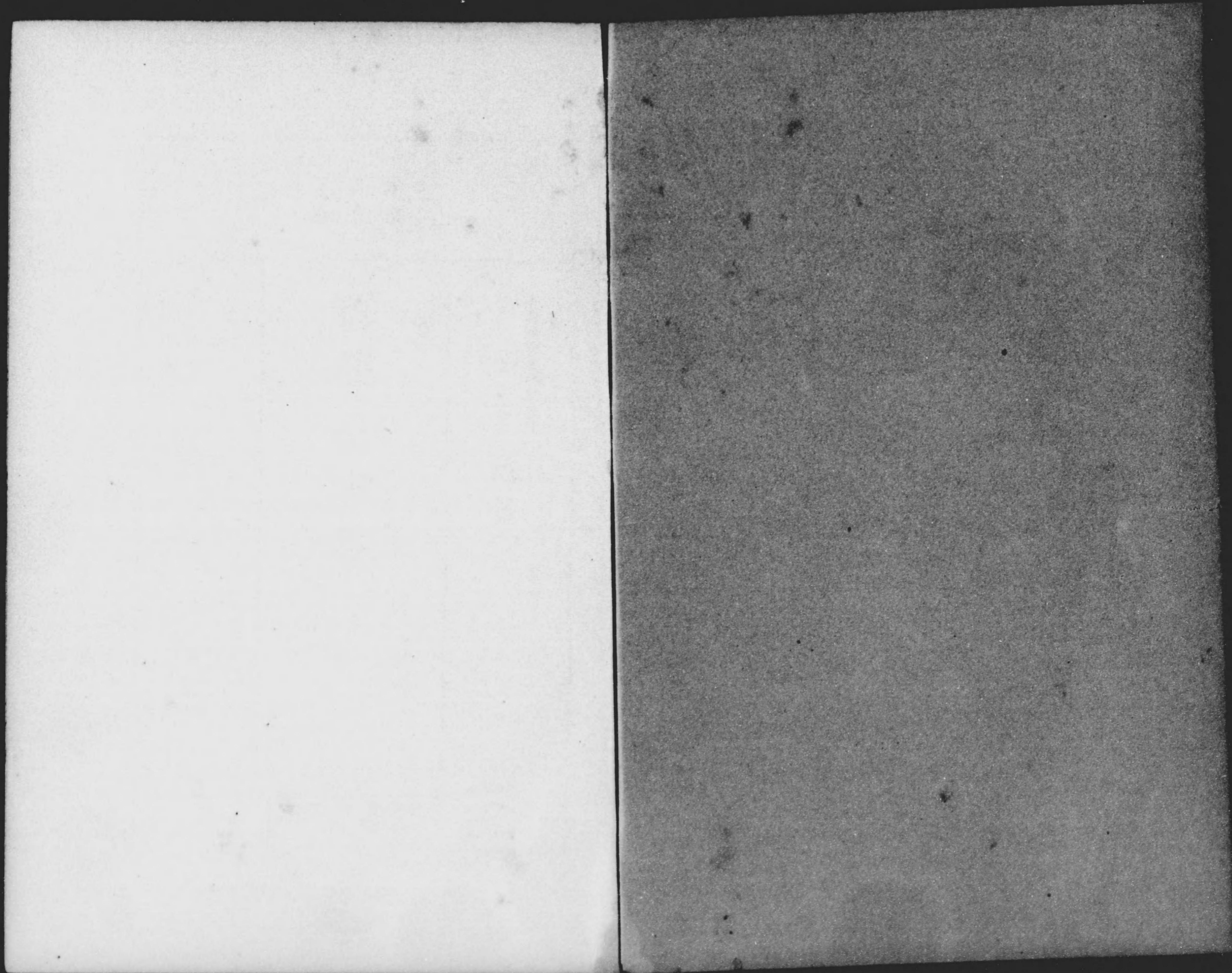
新明正道・著

ロゴス書院

1 9 2 9

AGA





書叢スゴロ
編三第

東北帝國大學助教授
新明正道著

群集社會學

ゴ
ス
書
院

版年四和昭

361. S1471g

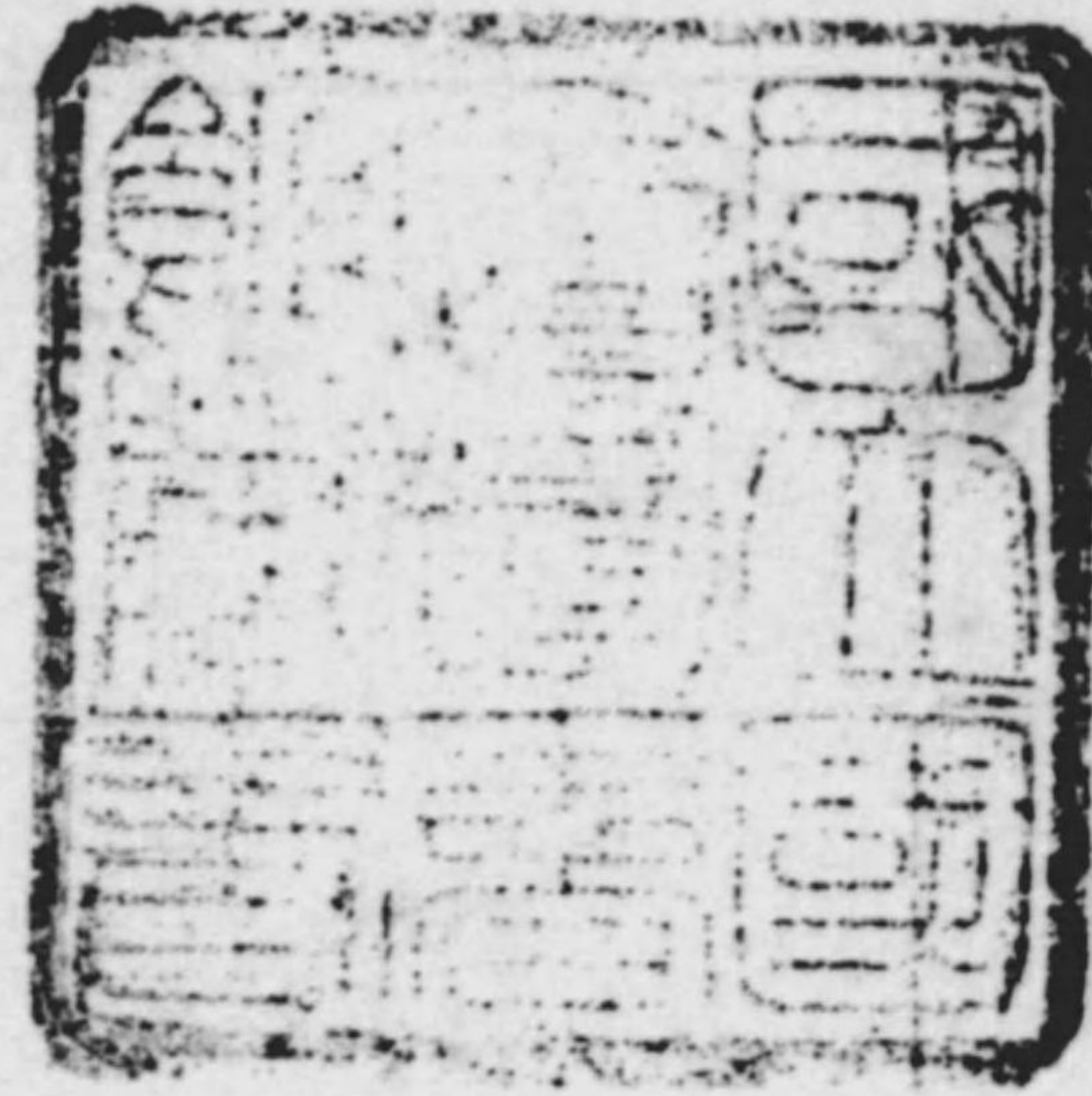
跋文に代へて

六日、午前十時、妻は日本橋へ買物に、僕は麻布のボーランド領事館へ旅券の査證を受け、同時に家を出た。査證は十分位で済んだ。それから牛込の新潮社へ行つて、約束の新居格君を待つたが、晝になつてもまだ来ない。平常なら時間の觀念のない僕だが、愈々今晚東京出發と來てゐるので、三十分程待つてから、名刺を置いて出て來た。お茶の水から圓タクで芝の病院に病弟を訪ねる。ラヂオを買つて呉れといふ。承知した。それから改造社へ廻り、用談を了へてから、帝大法學部研究室に寄り、借用してゐた机の整理をして歸宅した。親戚の家で夕食を喫し、東京驛に向ふ。驛頭見送りの知友のなかで、五年振りの青木君の顔を見たのは、意外であつた。妻の母、玄彦も同車した。

七日、玄彦がもう米原を過ぎたと言つて來たので窓を透して見ると、雨に濡れた田舎道が続いてゐる。大津あたりで日が射して來たが、そのまゝ京都に行つて、五條の辨慶樓ホ

跋文に代へて

一



250274

テルに入る。初めの間見えてゐた東山の姿が瞬く中に雨雲に包まれて行く。今日は家族と琵琶湖を巡るつもりだったのだが、これでは到底駄目だとも思つたが、兎に角傘を借りて、京津電鐵に乗つて大津へ向つた。幸ひ、湖畔に着く時分には比叡の山腹が明るく照り上つて来た。京阪丸に搭乗。十時出帆。僕は船中で『群集社會學』のおしまひの校正をする考であつたが、肝腎の校正刷を忘れてきたので、すつかり参つて了ひ、茫然と湖面を眺めてゐるのみだった。正午、竹生島に着いた。此處の景色だけは流石に整つてゐる。拜殿後の巖頭で寫眞を撮り、お竹人形を買つた。船はなほ長命寺にも着いたが、八百段もある階段を登る元氣はないので、村の砂路を數十分散歩しただけである。夕方、あまり疲れも感じないで、歸宿した。晩、妻と玄彦と新京極まで散歩。出鱈目に松竹座に入つて『メトロポリス』を見る。宣傳ほど良い映畫でない。結末も、結局協調主義の低調なもの。こんなものなら、別に獨逸映畫として驚くに當らないと思つた。しかし、群集の使ひ方は上手である。『群集社會學』の校正を手傳つて呉れた玄彦曰く、『何處か参考に出来ないものか。』と。僕は、『もう校正刷が出てゐるから駄目だよ。』と答へた。

八日、朝のうちに、金澤から見送りのため、義兄と従弟季夫がやつて来た。一緒に、圓山公園に遊んだ。祇園櫻は盛りである。知恩院に廻り、皆が石段を登つて見物して来る間眠つてゐる洋子（次女）を抱いて待つてゐた。春風がそよそよと吹いてゆく無心の童顔よ。一時廿分京都驛から神戸へ向ひ、紅葉屋旅館に投宿。夕刻、美夜子（長女）を伴れて原田の方へ舊友訪問。元と僕の關係してゐた關西學院は今も他へ移轉して、ひつそりした庭園には、櫻の花が咲いてゐるだけである。美夜子が花を折つて呉れと強請んだ。『美夜子はこの邊で生れたのだよ』と言つてきかしたが、意味が分らないらしかつた。これも彼女との散歩の暫時の訣別であらう。夜、生子、大藤、小杉三君と『時雨茶屋』で卓を共にする。家族との最後の一夜だ。

九日、午前中ロシア領事館へ行つて旅券の査證をして貰ふ。随分用紙に記載しなければならなかつた。約一時間、待つてゐる間、窓外の櫻の花の餘念なく散つてゆくのを眺めてゐる。俣で宿に引き返し、直ぐに埠頭に向ひ、アメリカ丸に乗る。河上丈太郎氏夫妻、松澤君、其他の舊知の見送りを受けた。正午銅鑼が鳴つて皆下船した。妻が泣き相な顔をし

て笑つてゐる。段々船が離れて行く。遠くなつても茶色の着物をきた妻の黒いシナールを振つてゐる姿が、はつきりと見えた。船の黒煙がさつと埠頭を掠める。煙が消えて了つた時、もう誰も見えなくなつて了つた。家族や舊知の健康を祈つて船室に下りる。晝食後、甲板に出てみたら、もう神戸は見えない。白砂青松の間を白鷗が群翔してゐる。僕は一心に、『群集社會學』の校正にかかり出した。

十日、『群集社會學』は、久しく筐底にとどめておいた原稿である。之を書いたのは、四年前の夏であつた。校正しながら、ところどころ自分で不満を感じるのは止むを得ぬ。『群集の淵源』及び『群集と政治』の二つは重要な章でありながら、この感が深い。民主政治と多数主義、更に此等と群集の関係については、もつとつきつめた分析が必要とされる。しかし、渡歐前の多忙は、終に自分に思ふまゝの訂正を加へる餘裕を與へなかつた。だが、この不満にも拘らず、群集の社會學的な取扱について、本書は多少の啓示を含んでゐるであらう。群集心理學とは異なつた新しい視角が讀者によつて認知されたなら、それだけで本書の消極的な存在理由が存するかも知れない。——かう考へながら、僕は、校

正の筆を擱いた。船は門司に碇泊中であつて、僕の前には福岡から會ひに来て呉れた大道君がゐる。校正刷は同君に託して送つて貰ふことにした。

十一日、霧が出たが、浪は穏かである。今、船は、多島海の沖を進航してゐる。明朝大連に着く。それからシベリアを経て一路ドイツ、ベルリンに向ふのだ。大連から「群集社會學」の跋文を送る約束である。僕は跋文の代りに今までの慌しい、日記を書いて責を塞ぐことにした。讀者には御迷惑かも知れないが、自分としては、これが本書を自分に記念する最良の方法であると考へたからである。

今、本書に最後の一刷を加へるに當つて、中條、南雲、設樂の三君に並ならぬ御世話をかけたことを感謝しておきたい。

甲板で鐘が鳴る。まだ霧が消えないと見える。

一九二九年四月 アメリカ丸にて

著 者

目次

跋文に代へて

序 論……………三

群集の分析……………三

第一章 群集の概念……………二五

第二章 群集の特徴……………四八

第三章 群集の組織……………六四

第四章 群集の過程……………九九

群集の問題……………一四二

第五章 群集の淵源……………一四三

第六章 群集の對策……………一八四

第七章 群集と政治……………三三九

群集の理論……………三六九

序

論

序の明瞭

第一章 序の題意

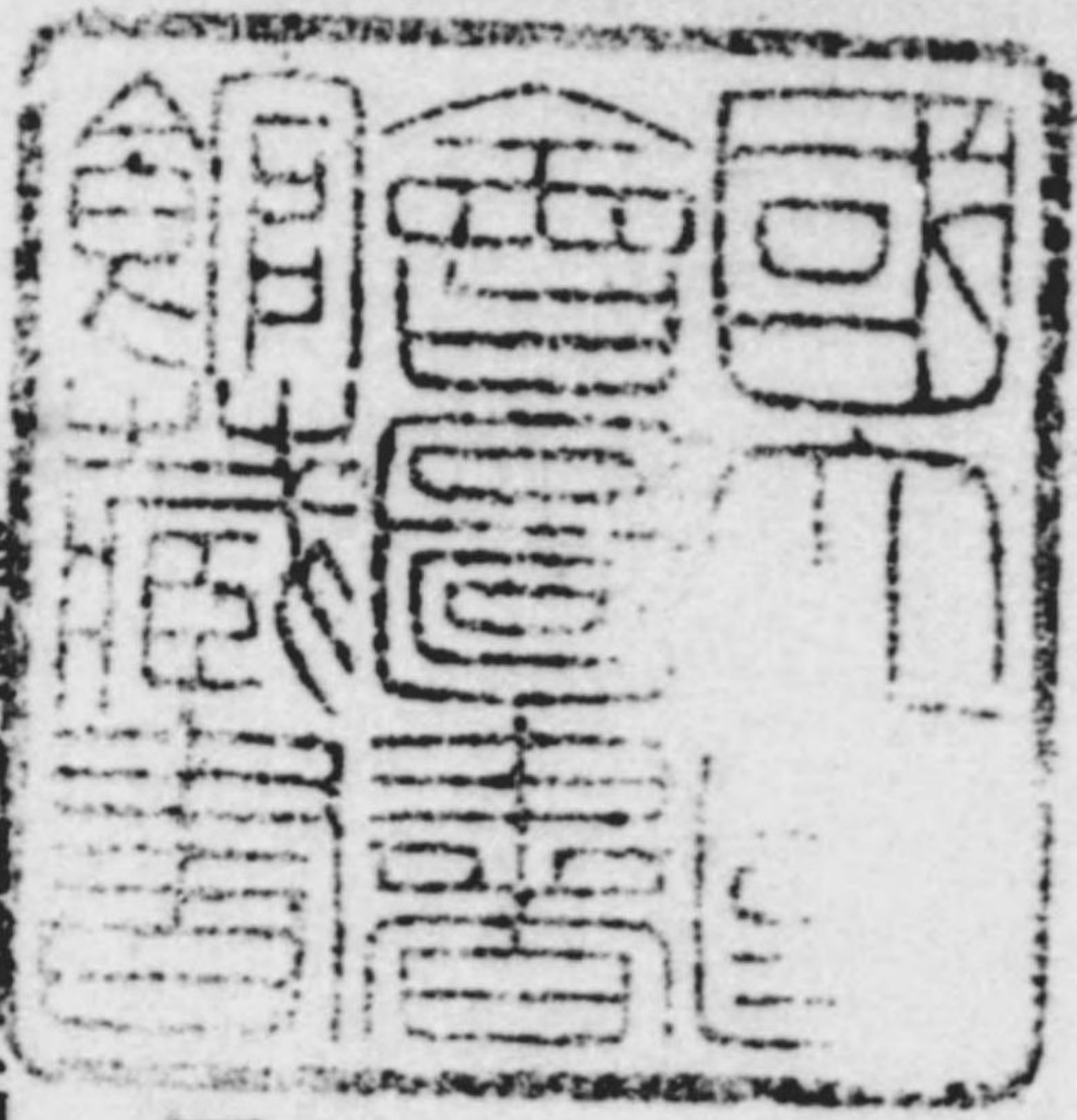
第二章 序の構成

第三章 序の展開

序の展開

第四章 序の結論

第五章 序のまとめ



群集の幽霊は到るところに出没してゐる。共産主義や反動主義のそれと相交錯するかのやうに。群集の幽霊は往々共産主義や反動主義のそれに従属するものであるが、しかし、それらよりも一層有力なるものであともいへよう。兎に角、それは一個の獨立的な考察を要求する。それは恰も我等が纔かにその出現を豫知するや、忽ちにして地平線上を吹きまくる疾風の如きものである。地上の全線を變へんとして吹き募り、險悪になるや、その時まで静謐であつた樹木や一切のものは、不安と混亂とに陥る。そして、その態様が不確かであればあるほど、それは一層恐怖せられ、神祕なものとなる。それは文字通り落雷のやうに、社會のうちに、怪奇な理念、行動、希望を現出する。それは風に依つて直ちに築き

上げられる砂丘に譬ひ得られる。駱駝に乗つた旅びとは、全く思ひがけない山が彼等の行手を遮ぎるのに直面して困惑する。かつては、たゞ廣漠な滑かな砂原があつたばかりである。然るに、今や無氣味な恐ろしい白い山々が彼等の眼前に現はれて来る。それらは何處から來たのであるか。何の力によつて創られたものであるか。このやうな疑問は、かくの如き境遇におかれた凡ての人々に、必ず迫つて來るであらう。これと同一の混惑と疑念は、社會の中心にあつて、かくの如き把捉し得られないものに出逢ふ時、我等にも生ずるものである。——我等をして疑ひを抱かしめるこの不可解のもの、我等を不安に突き落すこの不測の現象、これこそ、今我等が主題とする群集なのである。これは如何にして起つたか、また如何なる性質を持つものであるか。これに就いての検討は、危険と不安を一掃し、我等の心を平靜になすがためには必要である。未知の幽靈の彷徨は我等を不快ならしめる。それに對する用意は常に必要である。我等は社會的紐帶と關係の複合のなかに横はつてゐる灰色の不吉な姿を控へてゐる。我等はその様相を明らかにしなければならぬ。

二

實際、群集は驚異的な存在である。それは最近益々驚異的になつてゆく。現代ではその不可思議な性質が完全に認知されてゐるやうである。或るもの、又は權威者さへ、群集の發生が近代的のものであると考へる。彼等はそれが最近突然生起したものであると主張する。それは新しい文化の新産物であると考へられてゐる。群集が全く若い新しい現象であるといふのは、眞實であらうか。かくの如き主張は根據のないものではない。が、その結論は誤謬である。群集は現在の幽靈であるばかりではなく、過去の幽靈でもある。寧ろそれは人類の年老いた同伴者なのである。その歴史は人類の歴史の如くに長い。ある著者はその出現を、パレオリシツク人が來るべき人類の前驅として生存してゐた有史以前の遙遠なる昔に求める。パレオリシツク人は、獵人であり採取者であつた。彼等においては、恐らく各家族は各自の必需品や生活品を自給してゐたであらう。併し、家族は群集ではなく、群集の性質や特徴の何物をも有してゐない。遙か過去に於ける何等記録なき事件に就いて

の主張は徒勞である。

我等は、ネオリシツク人に至つて明らかに群衆に突き當る。彼等は社會に生活し、農業を發見し、家畜を馴養した。パレオリシツク人の家族は、ネオリシツク人の部族に依つて、代替された。パレオリシツク人が最初に社會を構成したものであるならば、當然彼等は最初の群衆構成者である。この主張は、その表面的に思惟されるほど獨斷的なものでない。群衆は社會に先行するものでないからである。群衆はその發展し得る前に、その動搖的な存在の固着すべき、ある基礎を持たなければならぬ。パレオリシツク人が生活してゐた狹隘な密集的な群衆は、素朴な搖籃地から流浪するべくなほ若かつた人類にとつては、寧ろ氣持のよい平和な家庭であつた。我等が忘れてならないことは、彼等が全く生活に満足してゐたこと、更に、彼等が、群衆感情の狂熱に突入する叫喚的な機會を有しなかつたことである。社會の錯雜性は、當然その行程に、幸福なまたは不幸な幾多の事件を齎らす。社會それ自身の擴大につれて、社會的罪過もまた擴大してゆく。我等は、狩獵期の最後において、最高潮に達した集團感情のある餘蘊の爆發が、森林に獲物を追ふ獵人の顔を輝か

すのを見る。この極點に達した感情は、群衆のそれに極めて似通つてゐたものである。併し、群衆への傾向は、かくの如き高尚な例の結果ではない。その眞の起原は、全く異つた事情に求めらるべきである。

群衆は社會と同一ではない。云はば、群衆は、社會に反對するものである。少くともその妨害である。その存在は、社會の組織や調整が完全であることを前提とする。群衆は社會の進行の通常な状態に對する社會民の感情の裏切りに過ぎない。ある意味で、我等は古代社會が、群衆そのものであつたことを認める。併し、それは假形である。正確に云へば、我等は、社會が後日堅固に營まれるやうになつて後、群衆に遭遇するのである。社會の調整は、常に凡ての不規則な反社會的行動を反面に伴ふものである。多くの人は社會と群衆を混同するが、それは實際に於て別の範疇に屬するものである。

ネオリシツク人の社會においては、人々は、首領や、結社、政治的統制の方法を、知つてゐた。そして、それらをめぐつて、殊には移動や戰爭において、群衆の現象が現はれた。所謂、文化の曙光以前の長年月は、人々が想像するが如き平和なものではなかつた。古代

人は、夢想だにせなかつた全く異なる生活へ突進しようとしてゐた。そうだ、彼等は新生活に直面してゐたのだ。彼等は、外界と戦つたのみならず、彼等自ら——彼等の内部に潜む靈魂——と闘争せなければならなかつた、堅實な、不動な社會意識を建設せんがために。我等は惨めな痛ましい感情を以て、その推移の状態を追索する。彼等の白紙の如き、心の鏡には、幾多の新しい、不思議なものが、その姿を映す。流れる川、落雷、幻像、その他いろいろのものが、彼等の心を威嚇し出した。彼等はそれらの神祕を了解することが出来ない。彼等はその意味を解釋しようと試みた。彼等は動物や樹木にさへ、畏れを抱いた。これらの敵に對する闘争の必要は、彼等をして、社會をより一層強固ならしめた。放任主義は全く見捨てられた。自然的と社會的との二つの意味を有する禁制は造られた。奇妙な政治形式や、宗教制度が現出した。かくして野生生活が禁壓され、その社會建設の仕事が着手された。社會と群衆は剗然と區別される！近代世界に彷徨して、社會に反馳する群衆の始源的な姿は、この時に生れたのだ。我等が茲で取扱はうとする群衆は、かかる意味におけるものと了解さるべきである。

勿論、最初に於いては、社會は群衆と區別することが至難である。何故ならば、社會それ自身が、しばしば社會の成員に、群衆的な様相を要求したからである。多くの營み、殊に宗教的儀式は、群衆感情とでも呼ぶより他ない氣分のうちになされたのである。替罪羊、犠牲等はこれである。見よ！神の祭壇には、悲愴な姿が立つてゐる。彼こそ人々の前に犠牲として、焚かれるその人なのである。多くの人は喜びとはしやぎの叫びをあげてゐる。そして、その殆ど凡てが、この惨めな人間の運命に對して冷淡なのである。喧騒そのもののやうな彼等の祭り、日光の下に白き濛氣となつて、劇的なシーンを凡て蔽ひかくさんとする燻れる煙によつて、今にもすぐ見ることが出来なくなる人の青ざめた顔。この恐ろしき場景に嘻嘻としてゐる觀望者の感情は、群衆の本體そのものではないか。しかし、やがて社會と群衆との對立は明らかにされる。社會組織の拘束があるにも拘らず、群衆は、犠牲をもつともせず現はれ、そして無意味な方法で、怪奇的な現實を描き出すのである。社會の強固性が進んでゆくのは事實である。併し、それは原始的な群衆心を根絶することが出来ないのである。殆ど八割の社會的活動は、確實堅固な社會のために、用ひられるであ

らう。併し、殘餘のものは、危険な爆發的存在として取り残されてゐる。そして、後者は、好い機會の生じ次第、爆發する。有史時代に入つてから、この分離は確定されたと謂つていゝのである。

三

我等は、古代に訣別して、次の時代を考察しようではないか。埃及の文化は、來り而して過ぎ去つた。希臘の都市は、現出しそして隠れた。羅馬帝國は出現しまた滅び去つた。社會と統治は益々強固になつた。優秀なる個性が生れ出た。文化は花の如く、咲き誇つた。人類の智力は、何物にも比較し得られないほど向上し、傳統は二重に三重に人類を拘束した。しかし、一方、群衆なるものは存続する。それは、文化と非常に意味ある對照をなすものである。群衆は進歩の輝かしい様相に付き纏ふ影である。我等は希臘において、幾多の秀れた政治家や、立派な藝術家を見る。しかし、悲しい哉、彼等の眞の功績は、群衆によつて認められてゐないばかりではなく、蹂躪されてさへるた。これは民主政治が行

はれてゐるところにおいて、殊にさうである。オストラシズムの制度のもとにおいて、勝利は群衆の上に與へられてゐる。我等は聞いてゐる。アリスチデスとテミстокレスが海軍の政策に關して衝突した時に、その論争は、オストラシズムの決定の前に齎されたといふことを。投票の行はれてゐる間、アリスチデスは人民の集つてゐるなかを歩いてゐた。と、彼は文盲の一農夫に止められた。農夫は彼に彼自身の名前を書くやうに頼まれた。何故その名前を書くのかと尋ねた時、農夫は、自分は、凡ての人がアリスチデスが正しいと謂つてゐるのが氣に食はないからであると答へた。これを聞いて、彼は農夫の代りにその上に自分の名前を書いた。この挿話は、希臘の民主政治の眞の性質が如何なるものであつたかを暗示するであらう。希臘の哲學者達は眞に偉大であつた。しかし、希臘の群衆はその合理的指導に反對するほど、また有力であつたのである。羅馬も亦この例に洩れない。變遷興亡の歴史を通じて、羅馬は、群衆が勝利者であつた國家の最たるものであつた。羅馬の群衆は希臘のそれよりも惡質であつた。彼等は何ら政治的訓練を有してゐなかつたからである。彼等の心は典型的に薄弱であり、不安定であつた。シーザーの死をめぐる事件

はその確證である。ある著者は、彼等が人類の歴史を知らなかつたし、また經濟法則や社會の可能性に就ての知識に缺如してゐたと、謂つてゐる。彼等は彼等自身の利害が如何なるものであるかを、全く知らずにさへ生存してゐたのであつた。あの廣大な帝國が、かかる無知の上に建設されてゐた。彼等が次第に頽廢し、終には野蠻人に征服されるに至つたことは、不思議ではない。我等がこれらの事實を省みるならば、必ずや群集なる存在が、その背後にその長き歴史を有せることに、想到するであらう。群集は、社會の生活的な同伴者であつた。もしそれが悪であるならば、その悪が、我等に對して全く離るべからざるものであつたことを、思ひ出すべきである。

要するに、群集は、ピラミッド以前に、ピラミッドの時代に、それからそれ以後にも存在したものであつた。我等は殆んど凡ての時代を通じて、群集の存在してゐたことに氣附くのである。基督教も、それを廢止し得なかつた。それどころか、それは新しい群集運動の源泉となつた。我等は基督の光の下に、深淵を發見することが出来る。青白き馬に跨れる基督教徒の騎士達は、數世紀の間地上を彷徨した。中世の深い暗黒のうちにあつて、太

陽は時として輝き出し、感激や熱情の潑刺たる場景を生ぜしめた。十字軍は、基督の名において、異教徒を東方に追放するために、エルサレムへと道を進めた。しかし、かくの如き榮えある緊張の支配してゐたにも拘らず、外征は群集心に始終した。多くの派遣隊は、その目的地に達し得なかつた。彼等は途中において、掠奪者に變化した。ある史家は、彼等を非難して、彼等こそ西洋に悪き風習と病弊を持ち來した最初の間人であると謂つた。この擾亂の後に、事態は更に悪くなつた。新教と舊教の風潮は互ひに相打ち、そこに幾多の群集の挿話が發生した。殺戮と暴行は敘述するまでもない。夥しき、勇敢な優れた指導者達が、ただ保守的な法王黨の煽動に従ふ他何ものも知らない盲目的群集によつて、或ひは迫害され、或ひは焚死せしめられた。一つの群集の馬鹿らしさは、又他の馬鹿らしさを伴ふものである。中世に於ける群集が、他の時代の如何なる群集よりも、一層殘酷であり、血に渴してゐたことは、注目すべきである。明らかに、中世は群集研究の富める倉庫である。

四

上述せるところによつて、我等は、群集が社會の宿命的な隨伴者であると結論しなければならぬ。群集は歴史的存在である。だから、群集を以て、近代的現象と見るのは、不合理である。この理由から、我等は、ル・ボンが、群集の發生に就いて謂つてゐることに、直ちに賛成することが出来ないのである。彼は曰ふ。「これまで疑はれなかつたが、今日既に衰へ、又衰へつつある、幾多の觀念や、廢類のうちにあつて、また打ち續く改革が破壊した幾多の權威の根源の廢墟において、之に代つて興つたこの力が、間もなく此等を吞噬することは確かである。我等の凡ての古い信仰が、瓦壞してゐる間に、社會の古き柱が次と、崩落してゐる間に、群集の力は威嚇的な唯一の力と成り、その權威は益々擡頭しつつある。我等が將に入らんとする時代は、實際に群集の時代であらう。」と。彼がこれによつて、群集が近代の新しい産物であることを意味するものならば、それは誇張に失してゐる。群集は決して新しくない。しかし、若し、彼が、これによつて、群集は新しきもので

はないが、しかも、それは、近代に入つて始めて有力なものとなり、威嚇的な力となつたといふことを意味するならば、我等は彼が暗示したところを認めることが出来る。群集は過去からの存在である。併しそれは近代になつて初めて非常な力を得、恐怖と豫想の焦點となつたのである。これまで、それは未發達の時代にあつた。その翼と筋肉はまだ整へられてゐなかつた。それは長くその屈起の機會を待ち、十八世紀の初頃において初めて出現したものである。先には群集は、ゲリラ的な存在を餘儀なくされた。彼等は公的生活の中心に、出場するのを許されなかつた。彼等は、いはば、別働隊であつた。今や、それは山岳に隠れる必要がない。彼等は白晝大道を濶歩することが出来る。彼等の活動は全く自由となつた。渺くとも、群集はそれ自身夢想だにせなかつたほど高昇したと云へるであらう。兎に角、今までは常に、運動の結果を刈るものは偶像であつた。併し、今は偶像の崇拜者が益々自己を知覺して、位置が顛倒されようとする傾向にある。群集の活躍せる時代は確かに群集の時代である。

ここに問題がある。何故、近代に至つて群集は暴君的な力を揮ふに至つたか。歴史的見

地から原因を探索するのは、興味のないことではない。植物ですら、その成長にとつて、土が必要である。瘠土にあつて、その開花は不可能である。あらゆる文化、制度、運動もまたかくの如くである。世界史の流れを探究する凡ての人々は、群衆運動の場裡においても、これを證する事實を見るであらう。群衆の出現にはある有利な條件があつたに違ひない。それなしでは、群衆の發展は有力なるを得なかつたであらう。群衆には先づ、之に好都合な條件が準備さるべきである。群衆に對して、よりよき條件を與へたものは何であるか。何によつて、群衆はかくも優勢な力を社會に振ふに至れるか。私は群衆の歴史において一線を劃する最も重要な事件は、佛蘭西革命であると考へる。群衆は此の革命の前後に姿を變へた。我等はこの事件とともにその位置が全く變つたことを知らなければならぬ。我等は、群衆が突然有力と成つたのには、ある深い原因が、佛蘭西革命以後の新文化のうち、發見されなければならぬといふ結論に導かれる。多くの事物は變化した。——革命以來の新形象の凡てを列記することは至難である。しかし、何よりも注目すべきことは、物質的手段の驚くべき發達である。それは最も重要でありそして基礎的である事實である。

資本階級が發生した。それは新生産方法の基礎の上に榮えた。革命は彼等の優勢の必然的結果である。革命の標語のうちで、最も熱血的感激を起させたものは、平等の標語である。法律の前には萬人は平等である。各人の價値は、平等に評價さるべきである。各人はあらゆる集會に、あらゆる職業に、あらゆる政治に参加する権利を持つ。かくの如き主義が、各人の心に、あらゆる機會において、行動せんとする欲求を喚起せしめたことは確かである。新しい首領は、彼等の利益に反馳しないやうに、この趨勢を挫き、制御せんと、熱心に力めたけれども、彼等は不可避免的にその收穫を刈らなければならなかつた。群衆として行動せんとする欲念は煽り立てられた。物質的條件も亦、群衆の構成に全く好都合のものであつた。新らしき發明は利用された。その最たるものは新聞であり、汽車であり、電信であつた。これらの機關は、人間を總合する有力な力を有つてゐる。従つて、それは、群衆によつて利用され得た。これらの機關、如何に群衆の勃興を容易ならしめたか。それを理解することは困難ではない。これらのものは、彼等に彼等が渴望してゐた正しくそのものを與へた。相互の交通が便利になると、群衆は、その結合を容易に結ぶことができる。

不安定な群集の性質は、彼等の接觸の容易なることを欲する。さもなくば、群集を形成する以前に、彼等は解體するであらう。併し新しい機械は他の効果をも有つてゐる。その精神的方面は、物質的方面と同様に重要なものである。機械はその普及につれて新見解を生じ、これを傳播した。ある賢明なる著者は、これを倍量の哲學と呼んだ。我等の機械の世紀においては、最も價值あるものは、量であり、數である。この性質は、生活のあらゆる方面に、具現されてゐる。二を有する者は、ただ一を有するものよりも多く尊敬される。シカゴは、より人口多きが故に巴里よりも偉大である。亞米利加は、より多くの人民を有するが故に和蘭よりも大である。ロスチャイルドの如き量的人物は、ハーデイの如き人物よりもより高く評價される。何故、かかる見解が、人民の頭に入りこんだのであるか。これは機械の發展の然らしむるところであり、生産の厖大な量を崇拜する結果である。量の崇拜が、彼等をしてかくの如き哲學を抱かしむるに至つたことは、當然である。一度數と量が崇拜せられるや、數にのみその重要性を有する群集が、この哲學を彼等の巧妙な武器として採用するのは疑ひない。實際、群集は數と量の動物である。我等は、近代哲學の基調

がただこれに過ぎないと見る時、如何に機械が物質的精神的兩方面において恐るべき變更を惹起したかを認めるであらう。その基調をなせる哲學それ自身が群集の勃興を助成してゐる。かかる燥急な、騒がしい近代世界の環境にあつて、群集はその恰好の温床を發見する。この精神的な底流は、見逃してはならないものである。この觀念的な上層建築は、その門口に銘を有してゐる。數に信頼せよ。問題となるものは、數に對しての最も強き信念のみであると。多數は、その存在を主張するを要せない力である。その存在そのものが直ちにそれへの權利を付與してゐる。私はここで、この哲學の建設者が誰であるかといふ問題に立ち入らない。兎に角、それは群集に對して與へられ、用意されたものである。かくして、春風に翻る蝶々のやうに、それは、そのなかで、その特殊の地位に正しく生存してゐるといふ輝かしい意識によつて、進行する。機械と資本制度は、全く群集の母胎であつた。この雰囲気において、前述の平等主義の運動が行はれる。鬭争そのものの形式も、この空氣によつて支配されてゐる。それが量に依據するのは、群集の形態と一致するものである。

平等の支配とともに、下層階級は、政治生活に参加した。それは彼等の支配階級への漸次的轉化を意味しない。が、彼等が恐るべき力となつたといふことは、明らかである。

現代は、人類が嘗て経験しなかつたほどの、活潑な政治的活動を示した。普通選挙は採用された。議論の時代は來た。この狀勢のうちに、新しい結合が實現された。人民は結合を形造る。そして、その前に、権力は、次々と降伏する。彼等は彼等の目的を獲得するために、結合することの重要性を認めた。一體となつて結合することは流行となつた。結合の傾向は次第に緊急となつて來る。そして、これは大いに群衆を刺戟することに成つた。俱樂部、組織、組合は互ひに絶えず、人々の参加を要求してゐる。公衆の集會や機關は、幾多の目的のために、構成された。少くとも外面的には、政治の中心は、私やかな室から公會に移つた。政治は眞に運動となつた。しかも、運動とは群衆の賛成以外に何であらうか。それは全く、コンウェイの謂つてゐる如くである。今やこれらの事情が結合して、群衆の成長に最適の土壤が準備された。それは、火が枯れ果てた野に擴がる如く、大地に擴がるものである。眞に、今、それはその力の絶頂にある。大衆の神聖な権利が、英雄の神

聖な権利に代替しようとしてゐる現代を、群衆の時代と呼ぶのは不適當でない。民衆の聲は神の聲である。これらの事實は、近代社會が群衆への傾向を有してゐることを示すものである。それは政治家自身を恐れしめるばかりでなく、學者をして、より系統的にそれを研究するの必要を感じしめる。學者の研究の起るためには、先づ事實が多量に與へられねばならぬ。探究の材料に満ちた世界において初めてこの研究が始まつたことは、不思議ではないのである。この意味においては群衆も近代的現象である。我等は群衆を近代的產物とのみ見る見解を斥けるが、その歴史的意義が特に現代において高まつたことは認めるに躊躇しないものである。では、群衆の考察を始めようではないか。

群集の分析

第一章 群集の概念

—

群集論は極めて盛に行はれてゐる。しかし、それは多く心理學の見地からなされたものであつて、社會學的な試みは多くないといつていいのである。我等は此處で社會學的立場を採用する。社會なるものを前面において、そのなかにおける群集の定義を考へる。そして、群集そのものを一つの社會的形象と考へるのである。政治的又は心理的な解明にわたることはあるにしても、見地はあくまでここに存するのである。

群集は先づ一の社會概念である。それは如何なるものであるか。これを以て直ちに社會そのものの一般的概念であるとする者があつて、英國には特にその風が多いのであるが、それは誤謬である。テエラアやトロツタアの著書は、そのために、いろいろと有益な暗示

に富みながらも、つひに我等にとつてはやや廣義に失し、群衆といふ特殊な現象を説明するものとしては不満足に陥つてゐるのである。群衆は一つの社會であるが、社會そのものの總稱と同一であると考へてはならぬ。然らば群衆の定義は如何であるか。

社會は種々の多くの部分社會に分たれる。そして、これは種々の方面からの分析に基づくのである。組織の有無の方面、關係の緊密であるか又は緩粗であるかの區別、其の他標準次第で色々の分類が可能である。今、群衆を分析してみると、種々の方面において特異な點を發見できるのであるが、この際定義として述べるには、その最も特長の著しかるべき區別に依らなければならぬ。群衆なるものと他の社會との區別は何處にあるか。群衆のいろいろの特色のなかで社會との劃線をかたづくるものは何であるか。——それは社會といひつつも、一般のそれとは異なるものがある。その形式において如何にも社會的でありながら、反對に極めて低級である。低級であるのみならず、その發生のプロセスは決して社會の安定を促進しこれと平行するが如きものでない。それはその發生において異常なプロセスを取るのである。一般社會の範疇において、それは僅かにその縁邊を成してゐるに

すぎぬ。廣義の概念において、我等は社會を以て各人の意欲した意味的な結合と見る。群衆においては、この形式が兎に角發現するのは事實であるが、それは決して眞實の持続性をもたないのである。群衆のなかに入つたものは、この時自己の結合の價値を知りこれを意欲したものとごくである。しかし、彼自らも、一定時を経ると、その感覺を失ひ、自分の群衆に入つた理由を疑ふやうになる。形式は社會的でありながら、その内實において、群衆は社會と反馳する場合が多く、この意味でそれが病的なものであるとされてゐるのは當然である。

二

群衆は社會の内部に發生する。そして、多くの場合において群衆は社會の條理との反馳である。群衆は社會のエンタルツクである。群衆が如何にして社會のエンタルツクとして發現するかといふことは、以下に説くことである。群衆のエンタルツクであること、——ここに社會との關聯があり、また差異がある。ここに一言したいのは、群衆

は社會のエントアルツクとして、種々の社會において表現されることである。凡ての社會が群衆化し得るといふことは銘記する要がある。國家でも、教會でも、組合でも、社會關係でも、凡ては、それが社會であるところからして群衆化し得るのである。個人が疾病にかかることがあるやうに、社會が墮落したならば、それは皆群衆と成るのである。マルチンが述べてゐるところは、私の意向と合致する。

「群衆の行動は、シユウド・ソシアルである、——もし社會組織が實現さるべき善へのアチーヴメントの手段であるとすれば。此等の群衆心理とよぶ現象は、直接社會的から發生したものでなくて、凡ゆる心的生活が社會的意義をもつといふ意味だけにおいて、社會的である。それはむしろ、群衆成員の個人的なそして無意識的な心意にかくされた力が、單にある種の社會的結合によつて、解放された力の結果である。」

マルチンは群衆を以て一つの心理状態と見てゐる。これは一般の學者の態度である。それは兎に角、彼が群衆を以て社會的なるが如くにしてさうではないことを明らかにしてゐるのは、正當である。實際、群衆は、形式的には社會的である。その社會的といへるのは、

これだけである。マルチンは私よりもなほ群衆の社會的である意義を制限してゐる。彼はそれが社會に對して及ぼす影響を以て社會的であるといつてゐるのである。彼の言は極端であるやうであるが、必ずしもさうでない。よくその細部を考察すれば、彼の言の反つて當つてゐることが思ひ知られるであらう。

群衆の病的である事實は、その起因や過程において表はれる。そして、この點はあらゆる學者のひとしく認めてゐるところである。そして、それは單に群衆が非常な感情性を具へてゐるからではない。感情のつよさは社會の健全性をあらはし得る。その病的なのは、その結合が社會そのものの正常な活動を亂し、その根柢が社會的な意圖から發生してゐないところにある。熱情が害をなすのは其れ自身のせるではなく、それが非正常的な活動の結果として伴生するからである。我等の社會生活が現代において驚くべく發達した事は世人の齊しく認むる所、然もそれとともに群衆の禍も亦いよいよ甚だしくからうとする勢がある。勿論兩者は相伴ふべき運命にあるものでない。不幸にしてそれが相平行するのである。社會の反面には群衆が潜んでゐる。そして、偶然思ひがけない時に、これを攪亂するので

ある。群衆と社會とは全く近くしてしかも反對して立つものである。そしてこの病的なることを知るが故に、一層我等はその様相の解剖の必要を感じる。

群衆が社會全體にわたつて發現するところからして、群衆を以て社會であると考へる見解があると先に述べたが、今述べたところによつて、両者が決してシノニムでなく、全く相對立するものであることが明らかになるであらう。群衆は社會現象ではあるが、社會そのものとは大いに異つてゐる。人民は群衆たらずとも——例へば家庭はその例である——社會的たることを得る。また群衆は、——モブの如きをみるに、——もしこれに倫理的意義をつけてみると、明らかに反社會的である。個人も社會も、群衆行動によつて困却する。今日、文明の價値、即ち個性の成就と自己の眞の知識の獲得に對し、群衆行動の習慣ほど威嚇的なものはない。

群衆は恐るべきかくれた力である。そのかくれたるが故に、一層その害は甚だしい。我等の社會は自己を社會として完成するためには如何してもこの現象と闘はねばならぬ。故に、社會において群衆討伐はいつも掲げられてゐる題目である。政治においては群衆の力

が殊に支配力を有する。故に、この問題は一層痛切に論ぜられる。そして、個人の群衆化を抑壓すべく色々の工夫が凝らされる。現に我等が常識として群衆を病的にみてるのは、一つは社會の教育の感化である。社會立法家は群衆を決して好意的に取扱はない。彼等は文明人と群衆人とを正反對に考へてゐる。群衆であることは自己を卑しめることである。かくの如き信念を人々が抱くに至つてゐるのは、そのことを切りはなしてみれば、決して非議すべき點を有つてゐないのである。我等は寧ろこのなかに人間の群衆への警戒とそれに対する適當なる知識の生じたことを看取すべきである。

三

しかし、かうした群衆に對する優越的誇りともいふべきものは、凡ての誇りがさうであるのを免れぬやうに、群衆なるものに對して不當なる解釋を下すの極端に趨るのである。それは、群衆なるものを卑める結果として、自づからそれを全社會の缺陷としないで、一定社會のみに獨特のものであると看做して了ふのである。即ち、それは社會において劣弱

ならしめられてゐる階級のみで發現する現象であると考へる。

我等は時として大衆なる語を使用する。それは極めて漠然たる語であるが、これはある對稱語を豫定してゐるものである。大衆に對して、少數者、エリテがある。この對立の上に立ち、群集とは大衆であるとする見解がある。この立場をとるものは、曰ふ。『群集とはマツスである。彼は文明を知らず、秩序を知らず、徒らに吼え猛つてその基礎を動かさうとしてゐる。』と。此の見解は極めて多くの參與者をもつ。そして、それは群集論にその發生の時から既につよい偏見を植ゑこんできたのである。

少數と多數とを對照する見解は、古い起源を有つてゐる。この二つの對立において孰れを支持するかによつて人々は二つの側に分れる。一方においては、多數に與するもの、一方には少數に與するもの。然るに、在來の群集論は多く貴族的であつた。多くの著者は、自らをエリテとしての貴族の地位において、群集を以て大衆と同一視するに至つたのである。カアライルの英雄崇拜論における超越的な態度は、群集論者の手引をなした。彼等は、自己の少數を知つてゐる。その代辨階級の地位を知つてゐる。そして、また自己の身邊に

大衆の足音のひびきの迫つて來るのをきいた。彼等は自己の地位を守るために、大衆を以て群集であると考へるにいたるのである。だが、彼等は自己も亦、群集たり得ることを知つてゐなかつたのだ。支配階級の心理の作用は明らかである。彼等は凡ての惡名を反對側に歸する。群集論においても同一の現象が實現する。大衆は群集である。自己は群集の上に、日月とともに！この論理の根柢は極めて明白である。此の論理的策略によつて、大衆は群集の貯藏所となつた。彼等は群集の母である。従つて、群集の惡は彼等に歸せられる。群集は勞働者である。兩者は一體である。この論理は、絶対に成立しないことはない。しかし、かうした見方は楯の半面しか見てゐないのである。群集は如何なる社會においても發生する。それは社會につきまといふ。特定の社會のみがこれを免れるといふことは出來ぬ。

此の態度は、既に、ル・ボンに現はれてゐる。彼においては、特に貴族的矜持が顯著である。彼の群集論は、群集としての大衆を扱つてゐる。彼が群集を右の意味に解してゐることは、その卷頭において既に示されてゐる。彼にあつては群集とは君侯に對照さるべき

ものであつて、その見解の狭少なることは、次の文章によつて知るべきである。

「漸く一世紀以前には、ヨーロッパの傳統政策と君主の競争が事件をかたづくる最も主要な要素であつた。群衆の意見は殆ど問題にならなかつた。そして全く問題にならなかつたといつてもいいからである。今日、それは政治において主要な傳統である。そして君主の個人的傾向及び競争は問題にならぬ。反對に、大衆の聲が有力になつてきた。この聲が今やその行爲によつて國王を指揮する。國王は唯だその發言に注意するだけである。國民の運命は現在大衆の胸において鑄れる。それはもはや君侯の朝廷においてではない。」

所謂大衆において、特に群衆化の傾向が多分に存することは可能である。群衆なる現象は社會の正常現象ではないが、それでも社會の機能における何等かの缺陷と大いに關聯するものである。そして、大衆においては、社會的條件が極めて不利であることは是認されるを得ない。自ら不利な條件をもつ下層者において、群衆化の機會は多分にある。群衆發生の原因を審らかにすると自らこれは明らかになると思ふ。殊に、今日彼等の群衆性は自發的であるといふよりは、他動的に挑撥せらるる場合が尠くないことも、群衆過程の研

究者には明らかにされてゐる。大衆は群衆化する比率が多いが、かうした事實によつて兩者を同一視するのは不十分である。かくの如き同視は、保守者流の偏見である。權威者、又は支配者が自己のみを獨特の地位において、他を批判するにいたる獨斷がここにもある。我等社會人は一樣に群衆を自分の問題と考へねばならぬ。如何なるものも、自己の問題として群衆を眺めなければならぬ。

群衆は社會の病化である。その墮落である。従つて、群衆における人間が平常のそれにくらべて、異つた心狀をもつのは勿論である。この心狀の變化は諸學者によつて認められてゐる。ル・ボンも、この故に、群衆は心のある状態であると述べ、そして、その特異なる性質を指摘したのである。但し、彼は依然として群衆を一般社會又は大衆と同一視してゐるが故に、その定義は完全なるを得ない。彼は、群衆が單なる集合でなくて、種々の特徴を有することを説く。——彼の説明は、それが概念の不明瞭であるため、その本質的特徴を示すにはなほ困難がある。彼はいふ。群衆論の第一に、

「通常の意味で、群衆は、國民、職業、性又は機會の如何を問はず、個人の集合を意味

してゐる。心理的見地から見ると、「群衆」は全く別の意義を帯びる。ある事情のもとで、その境遇のもとでのみ、人間の集合はこれを形成する個人のそれとは異つた特徴を表示する。集團における人々凡ての感情と思想は、同一の方向をとり、その個性は消滅する。集合人はかたづけられる。しかも、極めて明確な特徴を以て。かくして、集團は所謂組織的な群衆（他にいい言葉がないが）となる。それは心理的群衆となる。それは単一人を構成し、群衆の心意の統一の法則に従ふにいたるのである。』

『偶然個人が多数一緒にゐるとしても、彼らが組織的群衆になるものとはいへない。偶々数千の個人がある公會堂に集合したからといつて、もし彼等に一定の目的がなかつたらば、心理的見地からみて群衆は成立しない。かうした群衆の特性の生ずるためには、ある原因から力が作用しなければならぬ。』

彼は群衆の心意にある變化の生ずべきことを察してゐる。しかし、右の記述は群衆が個人の常態とは異なることを述べ乍ら、その變化の異常性を十分認めてゐるものとはいへぬ。群衆の特異の點を述べたものとしては、マルチンの記述が遙かに信頼すべきである。彼

は、ル・ボンが混淆してゐる社會と群衆とを峻別してゐるところにおいて、先づ正確さを有つてゐる。私は彼の見解を是認したい。彼は如何に考へてゐるか。

『人民の集合が群衆化するためには、特殊な心理的變化が必要である。そして、此の變化は、單に感情の解放ではない。またそれは、模倣と暗示による集團心の創造でもない。私の命題では、群衆心は、夢、幻像、其の他いろいろの自動的な行動と同視されるべき現象である。』

ル・ボンは群衆を以てある特異の心性であると示證したが、それではなほ群衆のエントアルツクである所以は不明瞭である。彼は、群衆において起り得る病的と見える現象を論じてはゐる。しかし、マルチンの言は一層明快である。群衆は夢の如き現象に似通つてゐると。夢の如き現象、自動的現象が、我等の意識的行動の支配のそとに出るものであることを考へると、之に類する群衆の社會的作用の本質も想像せらるるではないか。彼は更にいふ。

『群衆は、我等が協力して狂氣となる氣儘の計畫であり、方法である。』

茲に至つて群衆の性質は一層明らかである。群衆とは、社會的形式を借りた反社會的行動と同一である。マルチンの語は過激なるが如くにしてさうではない。かく考へる時、群衆を以て社會のなかに入れるのは如何かとさへ思はれる。群衆は意識下の運動に基づいてゐる。それは之を十分意識しないのである。しかも結局それは計畫又は方法である。群衆は多く自然に起る。しかも何故無意識にして、かくの如き自働的な狂奔的な計畫や方法が發現するか。ここに群衆のかくれたる性質があり、又その研究者を困惑せしめた謎がある。兎に角、群衆とは社會的秩序を破り、これの許さざる方法に訴へて反社會的行動を行ふ現象である。群衆は、社會の地殻の堅い組織のなかに、突然と弱き罅隙を探してそこから爆發する火山の如きものである。社會は豫め群衆の顔を見とめることが出来ぬ。群衆は魔性を帯びてゐる。

四

群衆の形相は之で明らかとなつたが更に群衆の主要な種類について考察するの要がある。

群衆は多く地位的に相接觸せる集團であると考へられてゐるが、これは群衆現象の誤解に基づいてゐる。群衆を以て右の如き直接的接觸の上に立つものと考へるものは、これに「公衆」なる現象を別に對照してゐる。これは群衆が直接的接觸の上に立つのに對して間接的接觸の上に立つてゐる。この區別は、タルドによつて大いに明らかにされたものである。今、一般に説かるる對照を區別せんか、群衆とは、(一)、本來直接的接觸を必要とするが故に、單に心理的でなく、物理的であるといつてもいいのである。(二)、時間的にみて、群衆は公衆よりも短命である。(三)、群衆は空間的に制限を受ける。これに反して、公衆は空間的には制限を有たない。結局、群衆とは直接的結合であつて、公衆とは間接的結合であるとして兩者の間に劃線をひくのである。これに基づくと、群衆とは狭く考へれば、あくまでも空間的にも時間的にも制限を課せられた多少物理的な接觸のある集團に限られることになり、その範圍は大いに狭くされるのである。此見方は極めて當然なるものとされてゐるが、私はこれに疑を抱くのである。ル・ボンにせよ、マルチンにせよ、孰れもこの方針を採つてゐるが、私は、群衆を飽くまで「一つの心の状態」として、これが實

現されてゐる場合には、それが直接的な場合であれ又は間接的な場合であれ、皆な群衆であると思念したのである。

群衆が肉體的な直接の接觸を條件としても、單に肉體的な接觸が存すればとて、群衆は成立しないのである。ある場所に人々の集合の機會があつたとせよ、これを以て我等の意味における群衆であると論じうべきか。それは未だしである。群衆たるためには、かくの如きものの上にある作用が加はらねばならぬ。その集合のうちに、反社會的な群衆の特徴が現はれねばならぬ。其の時までは群衆が存在しないのである。これと同一のことは、いはゆる公衆についても目撃される。公衆は單に空間をはなれた結合であるだけである。學者はこれを常に公衆の態様と考へ、それ以外に態様なきものの如くに考へてゐる。かくの如き結合自身は何等問題を生ぜしめない。公衆なるものの心理的紐帶を説明して、それは遙かに群衆よりも進歩してゐるといふのは、當然である。それは新聞紙を通じて形成される組織であつて、本來間接的に成員が相互を意識してゐるだけその高尚さが認められるとも謂へよう。——しかし、かうした意味の公衆を以て即ち公衆となし、従つて之は空間的

紐帶を結び得ないとなし、恰も公衆的な空間的結合が、群衆的と成り得ざるが如くに考へるのは虚妄である。私は眞の公衆なるものを存しないと見るのではないが、兎に角所謂公衆なるものが群衆の兆候を識し群衆化し得ることを注意したいと思ふのである。

我等は、公衆を以て新聞等に依つて互ひに連絡感をもつてゐる人間の結合と考へるであらう。しかし、この公衆、靜かなる公衆も群衆化し得ることは否まれぬ。彼等は如何にして群衆と成るか。此の點において我等を首肯せしめるのは、ロツスである。彼は、公衆なるものの群衆化を知り、これを闡明した學者である。彼は公衆において表現された群衆をモブ・マインドとなしてゐる。彼の次の記述は、此の立場を詳しく證明する。

「群衆の暗示にとつて存在は重要ではない。心的接觸はもはや身體的な接近と結びついてゐない。支配的感情の表現と印しをあつめて傳達する電信があり、待つてゐる人々にまだぬれてゐる報道を送るために急ぎゆく新聞とがあるので、遠方の人民は、いはば相互に接觸するにいたる。此の機關によつて興奮した公衆が、個人を、恰も彼が莫大な群衆の前に立つやうにする生々とした暗示の多くを以て苦しめることは確かであらう。」

「以前、一日を以てしてなほ打撃は僅か百哩以内にか普及しなつた。處で、次の日それはその向うの方にまで波及するだらうが、この時には第一の人民はもう冷靜になり理性の聲に従つてゐるかも知れぬ。そして、興奮の波が段々と國中に及びゆく間に、全人民が同時にいきり立つといふことはないのである。しかし、今や、我等の空間を征服する手段は、同時にショックを引起すことを可能ならしめる。廣大な公衆は、同一の怒、同一の驚き、同一の熱心又は恐怖を味はふ。そして、群衆の各部分が他のもの全部の感情を知悉すると共に、その感情は一般化せられ、つよめられる。つひに、公衆は一般人の個性を呑みこむにいたる。恰も、群衆が成員の個性を呑みこむと同様に。」

五

所謂公衆における群衆は、單なる群衆とはやや別の形相をなすものであるが、しかし、その本質においては相違はないのである。

公衆を以て單に「現實感」の上に立つた一つの結合であるとするのは、公衆の本態でな

い。新聞紙によつて我等の感ずる社會觀、そして融一感はこれである。だが、これはなほ群衆ではない。群衆はその變化である。右の如きものならば、それは社會の常の態様であつて、特に群衆とみるべき理由はない。公衆における群衆は、かくの如き一致の形式をとつてゐることは同様なのであるが、それが眞の社會性の所産でなくて、全く反社會的な意圖をもつ場合に出現する。此の際、群衆の成立するプロセスは、狹義の群衆におけるよりも複雑であるが、それは同一の原理に基づいてゐる。各人が平常の心を失ひ、錯覺化した行動をなすにいたるのは、同じである。その媒體が異なるだけのことである。

ここに我等の注意せねばならぬことは、兩者が一定の關聯をもつことである。群衆は、兩者の間に關聯的に發生する。一方に群衆化が存すると、他方また群衆化が起つて來る。一方は他方のその發展であるといつた場合が多いのである。これは兩群衆の構成者そのものが同一人であり得ることから考へてみれば、何の不思議はない。茲において、群衆は公衆の興奮の頂點であるといふ見解が立てられるのである。感情の興奮は孰れの場合にも見られるが、それは狹義の群衆において特別に著しいのは當然である。それは公衆的群衆

のそれよりは猛烈である。

要するに、感情の集團的興奮は我等に快感を與へるから、我等は自ら之を欲求し又益々これを高めんとする。然るに、感情の興奮は、間接的に或ひは身體的接近において心と心との關係が行はると場合、つまり群衆において行はるる場合に、その最高度に達するのである。だから、公衆に於いて感情が興奮してくると、各個人は益々其興奮の度を高めようとする。そして、新聞の調子が段々激しくなる。しかも、公衆に於いては、感情の興奮は到底最高度に達するを得ない。そこで公衆から、自ら演説會、大會、示威運動等の諸形態において群衆的運動が起つてくるものである。即ち公衆の感情興奮は、その頂點として自ら群衆を生み出すのである。そして、一般に、輿論は單に公衆の意見、或ひは感情、或ひは欲望たるに留まる以上は、十分にその効果をあげる事が出來ず、群衆的運動となつて初めて其の社會的勢力を十分發揮するのである。だから、今日の如く新聞が大いに發達し、公衆の勢力が大いに強まつてゐる時代に於いても、重大なる問題に關する輿論は、一般に群衆運動となつて初めて十分に實現されてゐるのである。

群衆が公衆感情の極點を標示するものであることは事實である。勿論、群衆が悉くこの關係の上に立つとはいへぬだらう。即ち、空間的に群衆の發生するのは悉く公衆的群衆を基礎とする。既にそれにおいてある感情が興奮せられて群衆的と成る。それが堪へられぬ沸騰點に達して生ずるのが直接的な群衆である。兩者はつねに相前後してゐる。——と見るのは、勿論極端である。群衆が殆ど何等公衆と關係なきに、突如として擡頭することがあるとともに、公衆の感情がそのまま消滅して、群衆的に實現を求めない場合も存するであらう。しかし、典型的な場合には兩者の因果をさぐる事ができる。そして、公衆が群衆を誘發しないで反對に群衆が公衆を誘發することもあるが、兩者の關聯する場合の多いといふことは認めて差支ない。大正八年の米騒動の事件を見よ。それは、公衆と群衆とが極めて微妙に結合して行つたところの群衆運動だったのである。あの際、群衆は各地に蜂起したが、しかも彼等は相互に連絡をもつてゐた。公衆的な連絡を。彼等が新聞紙によつて知悉した他地方の擾亂は、彼等に直接的接觸を越えたある接觸感を與へた。そして、この超空間的な群衆精神がなかつたなら、あれほどまで廣く騒動の蔓延することはなかつた

らうし、又その強度の如きもあれほど甚しくはならなかつたことであらう。

歴史的に見ると、直接的群衆は間接的群衆よりも古くから存してゐる。そして、間接的群衆の勢力の増大したのは、同じく近代のことである。タルドは現代は公衆の時代であるといつた。然らば、群衆はもはやその重大性を失つたものであらうか。否さうでない。公衆は益々旺んになり行くとしても、それは更に群衆に至つて開花するものである。それは反つて群衆を有力ならしめる作用さへもつのである。ある意味において、公衆的群衆を生ずるに至つた今日において、初めて群衆の全幅が開展せられその特長が一層鮮明に表出されるやうになつた考ふべき理由がある。公衆的群衆は群衆の一つの要素である。現代の群衆の世界はこの要素を閉却しては完全には説明されない。我等は群衆を論ずるに當つて、公衆、即ち間接的群衆を含めて考へて行くのである。記述の強調は、單純なる群衆のみに偏向することになるのは止むを得ないが、注意はここにおかれねばならぬ。この群衆を除外しての群衆論はつひに一方的に陥らざるを得ない。

群衆の定義は複雑であるが、以上の諸點を明らかにした後において、我等はその最も適

當にして遺憾なきものを設定することが出来るであらう。私は、群衆を以て、ある發生的特長を有する一種の社會であつて、それは直接的な接觸を條件とする直接的群衆と然らざる群衆との二つを含むものであると考へたい。直接的及び間接的の二つは、群衆の二つの類型である。前者は一般人の認めるところである。後者については之を公衆として區別するものが多い。しかし、私は之を廣く群衆として考へる。此の群衆の二つの種類は、更に空間的及び時間的の二つと觀念することが出来る。そして、此の基準の相對性は直ちに我等に看破されるところである。群衆が決して一時的且つ地方的ではなくて、時として彼等がその反響を長く持續することは能くみらるる現象である。雄辯なる説教者に依つて與へられた感銘は、なほ永く群衆的興奮の状態に保存せられる。強き群衆はなほ空間的から時間的に變化して持續性を帯びてゆくではないか。かくの如き様相を眺める時、我等は群衆と公衆との相對化の可能なる所以を十分確知することが出来る。

第二章 群衆の特徴

群衆が社會の一つの種類でありながらこれとは大いに異なるものある所以は、實に群衆成立の基礎に依據するといはねばならぬ。しかし、それは内面的なことである。我等はその内面につき進む前に、外觀からみて、群衆にとつて特に著しく現はれる特長のあることに氣附く。此等の特長は一般の社會にも發見できないものとはいへないが、その程度はかくの如く甚だしくはない。群衆は一見して直ちに識別さるる特長を有つてゐるのである。

群衆の特徴は種々の學者によつて注目せられて全く完膚なきまでに検討が進められてゐる。ル・ボンには、「群衆の特徴には、——常に、女子、野蠻人、子供などにおいてみることのできるやうなものが多數存在する。」と述べて、その主なるものを四つあげてゐる。

- (一)、群衆の衝動性、動搖性及び焦燥性。
 - (二)、群衆は妄信的であり、暗示にかかり易いこと。
 - (三)、群衆の感情の誇張性と公開性。
 - (四)、群衆の残忍性、獨裁性及び保守性。
- 群衆の特徴は右の四つに大約つくされてゐることであらう。今、左に主として彼の論點を辿つて、群衆の特性を明らかにしてみたい。勿論、ル・ボンの意見をそのままに紹介するのではないが。

一

(一)、群衆の衝動性、動搖性及び焦燥性。

群衆は、無意識的である。それは頭腦の力よりは脊髄の力によつてより多く動かされてゐる。此の點において彼等は原始人に類似する。彼等の行爲はある場合極めて完全であることもあるが、それは理性の指導を受けてゐるからではない。彼等は内部から來る刺戟の

ままに動くのである。これ、その衝動的なるに基づいてゐる。彼等は衝動の奴隷である。群衆人は反射的に行動する。自づから彼等は走馬燈の如く目まぐるしい廻轉をつづける。コンウェイ曰く、「群衆は情熱を通じての他、活動することができぬ。それは情熱の高潮した時でなければ行動しようとはしない。」彼等は、極めて衝動的であるが故に、外部的な原因はそれが如何なるものであつても、これを吟味することなしにうけいれて了ふ。この故に、彼等は聖人の如き行動をとるかと思ふと、忽ち兇漢の如き態度を採る。彼等には恒心がないのである。ル・ボンが、「群衆は時として血に渴したやうに成ると共に、また極端に寛大で且つ英雄的と成るものである。群衆は容易に執行官の役を演ずるし、また犠牲者の役割を演ずる。あらゆる信仰の勝利に必要な血を供給したものは實に彼等である。彼等が如何にかくの如き行爲をなしうるかといふことは、英雄的な時代に溯つて考へるまでもない。」と言つてゐる。衝動性が結局恒常的なものでなくて、群衆の意向を常に變化せしむることは、右の言によつて明白である。安定的な思慮の缺けた場合において、彼等の行動の動搖し易いことはいなまれぬ。彼等には思慮がない。彼等は頭を缺いてゐる。ル・

ボンがこれを風の吹くままに飛ばされる木の葉に喩へたのは、至當である。彼等は自己の衝動を満足せしむればよいのである。此の故に、彼等は迷園に路をさぐる者の如く、あらゆる方向に、足の向くがままに赴き、その力の疲るるまでは已まないのである。彼等にモブなる名稱の與へられたのも領づかれる。その構成員が盗人であらうが悪漢であらうが、賢人であらうが、卑小な職人であらうが、群衆は共通の特徴を呈示する。それは不安定である。モブの言葉が現はしてゐるやうに。その英雄は、次の瞬間ではその犠牲者であるかも知れぬ。それは、突如として、勇敢から怯懦に變ずる。その目的は小さな事物によつても變化される。チエヌは誤認された獨占者が町の群衆によつて將に絞殺されようとした事を書いてゐる。偶然、彼に有利な言葉が發せられたために、彼は抱擁せられ、一緒に飲食し、自由の塔の附近を狂的に亂舞する仲間に入ることを許された。「パリ・コムミュンの末期に、ある共産主義婦人の倨傲な風采に憤慨した群衆は「彼女を殺せ」と咆哮した。一人の老紳士が其時叫んだ「酷いことをするな。女ぢやないか。」間もなく群衆の怒りは彼に向けられた。「彼が共産主義者だ。戦闘者だ」と。この時一人のいたづら子が「ほつてお

け。あの女はあの娘なんだ」といつた。そこで皆は此老紳士を笑つた。そして、彼は教はれたのである。」實に、群衆の豹變の甚だしいことは、驚くべきである。だが、此ロツスの記述は、一場の挿話ではなくて、あらゆる群衆において頻繁に目睹されることである。しかも、この變轉極まりなき原因はただその衝動性においてのみ發見する事ができる。

三

(二)、群衆の暗示性及び妄信性、

群衆は極めて暗示を受け易い特徴をもつてゐる。群衆において暗示の作用が強く存するが故に、それは益々大いなる結合に擴がり、群衆の威力を示すことにもなる。彼等が忽然として無から生じて一大隊形をなすにいたるも、一つにはこの力の作用に基づくものとみなければならぬ。彼等は衝動的ではあるが、不斷にある物事に期待してゐる。彼等は、群衆のなかにおいて自己の感受性を極めて鋭敏にする。彼等における此の状態は、群衆への過程の始まる時に既に著しく現はれるものである。群衆は自己を忘れてゐる。個としての自

己を忘れてゐる。彼等は自己の抑制をすてて、大いなる波の如くに行動してゆく。自己なき彼等は極めて容易に他の刺戟に感ずるものと成る。彼等は外から迫つて來る思想や觀念の内容について考へることはない。直ちに彼等はこれに飛びかかる。此の傾向は即ち彼等に妄信性や盲従性を與へる。彼等は、彼等の無意識的結合において、容易に種々の傳説を受け容れ、これを信するのである。彼等は事實を仔細に検査する餘裕も能力もない。彼等には、ロツスのいつたやうに、「我等の疑ふ力が眠つてゐる。」我等は日常においても暗示の力に作用されないと断言ができないが、群衆においてはそれが特に著しく現はれるのである。蓋し彼において『心の留守』が最も強く露はれるからである。群衆人の状態は、ロツスの述べた富んだ農夫又は學者の如きものである。

「雇人が留守だつたので、ある夜ある農夫が自ら彼の所有の十六の牛の乳をしほつた。夜半になつて仕事は終つたが、やがて彼は哲學的な問題の思索にすつかり熱中して了つた。彼は八つの乳槽をとつて、これを一つ一つ酒樽の内へつぎこんでゐた。彼がこれを覺つたのは、最後の乳を注ぎこんだ後のことであつた。一杯の乳槽の觸覺は、彼に酒樽を思ひ起

させた。彼の日々の仕事は、乳の表皮をとることだつたからである。一人の放心した教授が、妻から食事に二階へいつて客を迎へるために更衣すべきことを要求された。訪問者が歸つた後に、人當を見にいつたところ、彼女は彼が寢床で寝てゐるのを發見した。更衣は寢床を考へさせた。そして、寢床は睡眠を考へさせたのである。』

心がここになれば、そこに如何なる刺激でも侵入できる。かうした心理にある人々がその興奮の頂點において受容した思想に對して如何に柔順に服従するかといふことは改めて説くまでもない。彼等は、たとひ誤りであるとしても、一つの觀念を受け容れて了ふとこれに對して絶對的な歸依をささける。彼等は全く信徒の如くである。歴史上群衆が誤つた觀念を攝取し、これに執着した例は頗る多いが、これは特に凶變の際屢々見らるる現象である。地震、火災の東京において、我等は限りなく群衆行動の實驗を見るのであるが、かの鮮人蜂起の虚傳が如何に輕率に人々に信ぜられ暗示せられたかといふことは、人々のなほ記憶に新たなるところである。あの動亂は全體が大きな群衆の活圖だつたのである。群衆において生じた妄信の例については、ル・ボンについてみよ。――

だが、かくの如き妄信は決して永續性をもたぬ。これは群衆の第一の特徴によつて豫想され得るところである。群衆の想像はたえず變化して、その崇拜の對象を交替せしめる。人物に對する評價の如きは、殊にさうである。この故に、群衆の信用ほどあてにならないものはない。些かにても彼等に疑を起させ、その自負心を損ふことがあると、彼等は直ちに刃を返して手向うに至るのである。これは、一つは彼等が抽象的思想のみに氣を奪はれ、具體的認識においては正確な判斷を有たない結果でもある。

四

(三)、極端性

群衆は極端に趨る。これは彼等の衝動性や暗示性とも關係がある。既に事物を冷靜に判斷すべき標準を缺いてゐる以上、彼等は適當な控へ目の評價をなすことができぬ。ル・ボン曰く「明確な區別の力なく、彼等は、物を全體としてみる。そして、その中間の様相に對しては盲目である。群衆の感情の血潮は、あらゆる感情が一旦發現されると、暗示と傳

播の過程によつて極めて急速に傳播するといふ事實によつて高められる。この事實の認知はまた著しくその力を増すものである。」彼等は僅かの賛成をも絶對化し、些かの疑惑をも氷炭相容れない反對に推し進める。彼等がかくの如く普通の思想、信仰、感情を快しとせず、その限界點にまで馳せ去らうとするのは、彼等の理知が痲痺してゐるところから生ずる。意識的思考が無意識的機構によつて決定せらるる場合、それは獨斷的なものとなる。だから、群集は誇張を喜ぶ。素朴なる眞理は眞理なることによつて反つて彼等の耳に入らない。彼等は、極言すると、正當な理よりは無理なる理を要求する。誤れる不合理にせよ、その徹底的なるものを愛するのである。

しかし、この他になほ考ふべきは、彼等が無責任となるが故に、誇張や極端に走ることである。彼等は、群集において、個人感を失ふ。それは一體として責任をもち、個人個人は全くこれを超越したものと考へる。この環境のうちにおいて、各人が自づと自由に放肆を擅にすることは、明らかである。彼等が極端に趨くことは止むを得ない。

茲に我等は群集の極端性について一層明證を與へる事實を見る。それは彼等が極端なる

要求をもつとともに、その心が自づから何でもなく極端化さうとする特有の癖をもつに至ることである。彼等は極端を欲するの餘り、これを極端ならざる事象にも發見し、それを喜ぶの風がある。彼等は進んで事實を極端性に歪曲する。コンウェイは、之について、「例へば、ほんの一寸した冗談が個人と群集とに對して如何に別様に作用するかをみよう。個人の前で話しては殆ど笑ひをも催さないことが、群集の前では嵐の如き笑ひを以て迎へられる。個人に對しては全く下らない平凡なことも、聴衆の前では稱讚を以て受け容れられる。」といひ、更に、一九一四年十月二日、アスキス卿がロンドン市のギルドホールで試みた演説を紹介し、その演説が極めて平凡なものなるにも拘らず、その際、盛なる喝采、笑ひをかましたことを擧げて、以て群集が如何に常人の心を離れた極端性をもつてゐるかといふことを明らかにした。かくの如きは、なほ多くの演説について實地に検査できることである。

彼等が極めて極端な性格を具有するが故に、それは自づから單純な性格を生ずる。ここに、ロッスを引用する。「群集の我は單純さを表はす。子供や蠻人のやうにそれは一つの判

斷に多くの要素や細事を包含させる。それは一つの時期において事物の一面のみしかみない。これは、他の様相が注意の中心に現はれた際には、全く反對に成るかも知れぬ。物事をその現實の複雑さのなかに考へることができないので、群衆は印象や偏見に依頼する。それが異質的な場合には、それが政治的又は立法的な集合であるならば、輝やける原理と抽象的原理に依頼する。」

五

(四)、自負性、排他性、殘忍性

群衆は個性を失つた人々の群であるからして、それは他からの刺戟にも容易に屈し易い。彼等は妄信的と成る。しかし、彼等は妄信的であるからといって、決して自己なるものを念頭におかないといふことはないのである。勿論、彼等は個人として眞に自己を知りこれを把持するのではないが、彼等は群衆としての自己に對してはかなりの評價と愛着をもつものである。彼等は自己を信じ、自己の信念に對しては、飽くまで批評を遮つてこれを固

守するものである。彼等は自己に關する凡てのことがらに絶對的權威を與へるのである。ここに立ち至る理由は、群衆そのものが病的なる自己満足の要求に基づくからである。(第一章参照) 彼等は自己の不謬を信ずる。またその思ふ所や欲する所が必ず成就し得ることを確信してゐる。これは暗示によつて與へられたものであり、そしてそれによつて益々強固となるものである。そして、それはそれが他の衝動によつて變化されない限りは鞏固に存続し、彼等の魂ともなるべきものである。密閉された小集會において忽ちにして群衆的自負心が生ずる。そして、その集會は、その際他の社會の存在を自己の力の確信の前に忘却した瞬間を有つ。眞に完成した群衆が、その小なるにも拘らず、頗る大きな自負心を抱くことは折々見受けられる。殊に、人種的や國民的な意圖のある群衆において、これが甚だしい。ヘブロー人は神の子である。和蘭商會は舊世界からやつてきた最良の會社である。愛蘭人は、和蘭人よりはずつと増しであると信じてゐる。獨逸人は文化の把持者として誇る。米國人は自己を自由の國家に屬するものとして誇る。

かくの如き自負心は、自己を讚美するものに絶大の好意を示す。此の故に、彼等は常に

自己を彼等の以て優秀なる標準と考へたものに合體せしめようと試みる。マルチンはいふ。「群衆は自己を誇る。自己を賞讃する。自惚れる。神話のやうな斷乎さを以て語る。自己を道徳的に優秀なものであると考へる。そして、その力ある限り、これを他人の上にするはうと欲する。如何に各の集團が群衆化したる際に自己を以て「人民」であると叫ぶに至るものであるのか。労働運動のアジテーターにとつて労働者の主張は悉く人類の主張であり、労働者は自己の獲得欲によつて人類及び正義の敵となつた支配階級の「無知な搾取的犠牲」である。」

強烈なる自己性を有するものが、他に對して強烈なる排他心を藏することは、いふを俟たぬ。自己を唯一の正義あるものと獨斷する以上は、他に對して斟酌することなきは當然である。彼等は憎惡の生物である。その他に對する憎惡の強烈なることは病的とも見るべく、マルチンはこれを「恐迫觀念」と同視してゐるほどである。彼は、更に、ここに所謂プロヂエクシヨン（投射）の過程が行はれてゐると論じてゐる。群衆は自ら他を憎惡し、しかも之を反對に對者に投射して彼が自分を憎むと考へるのである。投射は自己の憎惡の

理由を他に轉嫁する巧妙な方法であつて、此處に群衆の意地わるき排他性があらはに見えてゐる。之によつてみると、彼等の自負心は強大であるに拘らず、その根柢に多少の自己弱小に對する憂慮の存するのを看破せざるを得ない。群衆は強いものではなく、強く信ずるだけのものである。果斷なる個人が能く大群衆を破り得るのは、群衆にこの弱みあるが故である。

彼等に既にこの自負心あり、又た極端に趨かうとする傾向がある以上、彼等の行爲が極めて残忍であることは、諸家の認めるところである。殊に、彼等は力を信ずることを好み、強者に對しては隨從するが、弱者に對しては極めて苛酷である。此の傾向は、愛と寛大を以て金科玉條とする宗教における群衆において殊に著しく現はれる現象である。マルチンはいふ。「基督教は根本的には愛の宗教であるが、教會は全く群衆精神を脱却したことがない。教會の群衆は他のそれと同様に直ちに迫害を敢てする。歴史の各時期において、基督教徒が有力な群衆を組織するとともに、教會は最も嚴重な迫害を加へた。人民的宗教は殊に信者の永久的敵意の對象と成るべきある惡魔を要求する。」

群衆の自負性に加へて言ひたいことは、その保守性である。群衆が保守的であるといふのは、群衆が決して進歩又は革命の運動に現はれて來ないといふのではない。革命的群衆においても、その意向はあく迄他の意向を受け容れない特長を有してゐる。群衆はあらゆる場合に自己を力あるものと考へる。その結果、革命においても彼等は比較的保守的な水準に立つ。故に、實際において、彼等が非常に革命的な行爲に出たにしても、その根柢には必ずしも革命的情操が存してはゐない。この保守的氣持は、異端者に對する憎みにおいて現はれてゐる。背教者に對する憎みほど、彼等において強いものはない。これは對内的なる自己性の發現であつて、マルチンの敘述はよくこの點を明示する。『あらゆる群衆はその觀念を破棄しこれを破壊せんとするものに對して斧を用意してゐる。群衆のつよい黨與的な憎みにも勝つて甚だしいのは、背信者への憎みである。眞の信仰者たる群衆にとつては、異教徒よりも異端者がはるかに悪いのだ。』

今、これらの群衆の特徴を眺めて見る時、その本質は略ぼ明瞭と成る。此等の性質をもつた群衆の社會における發生は偶發的である。しかし、決して偶然であるとは斷定できぬ。

我等はこれを社會のなかにおいて考へ、その發生する所以を審らかにしなければならぬ。だが我等は先づ群衆の組織とその過程について述べる。群衆の淵源は、結局その對策と關聯するものだからである。

第三章 群集の組織

一

群集といへば我等は何等の組織なき烏合の集であると考へ易い。これは右に考察し來つた群集の性質によつて想像されるところである。實際群集は社會の如き組織をもつものではない。その構造は極めて須臾的であるとともに、不規律であり、何等秩序のみるべきものはない。しかし、これを以て群集に何等組織がないと見るのは速断である。群集は無組織的のやうではあるが、しかもなほ組織があつて、その内部には指導者を缺くことが出來ぬ。群集において指導者が演すべき役割の大なることは、多くの學者によつて察知されたところであるが、この點を特に強調したのは、フロイドである。彼は、群集の成立において、二つの帯を區別した。指導者への從屬の帯と同類相認めるの帯と。この二つが群集を結束

せしめる。そして、このなかでも指導者との帯が特に重大視せられてゐる。彼は、ル・ボ
ンが群集の指導者に十分注意してゐないことを難じてゐるほどである。フロイドの態度の
如きは、一つの例にすぎないが、彼がかくまで指導者の必要を痛論してゐることが不當で
ないと思はれるほど、群集においては指導者の演ずる役割が大である。群集は自我を喪失
した集團である。それは何の意志をも有たない。しかも、これはある意志をもつのである。
それは何によつて與へらるるか。これ即ち指導者の意志である。指導者は群集の精神をな
すものである。彼等は群集の無意識を變じて、ある運動に向はしめる導火線をなすもので
ある。その性質如何によつて群集は社會にとつて由々しい脅威となる以上、指導者と群集
との結合は十分明らかにならねばならぬ。指導者なくしては群集は成立しない。群集
の要素として指導者の如く重大なるものはない。指導者の性質如何によつて、群集の成員
も亦た獨特の色彩をおびる。指導者から見る群集は、群集組織の全相を明示するものであ
る。

組織の程度は、群集において低級である。これ一にその指導者との關係が有機的ならざ

るに基づくのである。両者は偶然の機會によつて繋がれる。最も適當なる指導者が必ずしも選ばれない。群衆においては不適當なる指導者が跋扈し易い。その故に、その組織は鞏固たり得ないのである。マクドウガルは組織の強度を階段的に示した際に、群衆には高い程度を與へてゐない。これは蓋し當然である。我等は時として指導者が群衆と完全に一致して驚くべき精力を發揮する場合を目睹するのである。マホメットの回教徒における運動の如きは、群衆的ではあるが極めて完全な統制を發揮する。我等はかくの如き場合、その結合を驚異して之に過大の價値を與へ易い。しかし、これは我等の誤解であつて、群衆の組織は實際は忽ちにして潰滅し易い性質をもつのである。指導者の群衆に對する勢力は、忽ちにして失はれる。かくの如き急變的事象は頻々として起ることである。しかも、彼等はたえず指導者を必要とする。彼等は服従を必要とする。唯だこの服従が永続的でないのが特長である。ル・ボンはいつた。「群衆は從屬的な集團である。彼等は主人なくしては何事もなし得ない」

大約、集團には統制者が必要である。之は社會についてみるも同様である。一定の目的

を以て結社せる集團にしても、色々の指導の必要なる原因を發見する。このことは、特に戰鬪に従事する集團において然りとする。これ、政黨の如きにおいて指導者の問題の緊急なる所以である。政黨における指導は、機械的に生ずる。多數を率ゐて干戈相見ゆべき集團において、指導者が不在ならば、徒らに荏苒機を失して悔を貽すのみである。それは先づ人數や場所の制限によつて指導者を生ずるに至る。鞏固な統制が鞏固な首領を要するとは定論である。これが一般の集團についてあてはまることであるならば、それが群衆において特に然るべきは明らかである。群衆が特に服従心理を有する原因としては、彼等の無意識的構成を考へれば十分である。無意識的なるものは妄信する。彼等が服従的なのは怪しむに足らぬ。古來英雄の發生をみる場合に、群衆がその周邊を成してゐないことは稀である。如何なる英雄も群衆の暈がなくては、英雄的色彩を帯び得ない。群衆は服従を捧げて一個の英雄の偶像を作るものである。ナポレオンにせよ、ビスマルクにせよ、彼等はある意味において群衆によつて英雄化せられたものである。群衆には一つの奇蹟を示せば即ち百の奇蹟を信ぜしめることができる。群衆において潜在せる崇拜感情の著しい例は歴

史上極めて多い。獨逸におけるラッザアルの一時喚起した人氣の波、佛におけるナポレオン三世の喚起した人氣、——此等は必ずしも永續しなかつたが、その盛なるや全く驚倒的なものがあつた。群衆が殊に指導者を必要とするのは、一つに彼等が闘争的なるにも依つてゐる。そして、このことは群衆の凡てが皆な何等かの不満を縁として勃發する所から考へて自然である。彼等は欲求を實現しようとして、その目的の到達のために戦ふ。——戰闘的組織は自づと群衆をして服従の効果を信するに至らしめる。理想の幼稚なことも亦た之に關係がある。そして、この現象は如何なる群衆についても同一である。宗教的な信仰の盛なる社會では群衆化が極めて容易であるが、然らざる場合でも群衆の指導者への需要は依然たるものがある。彼等は崇拜の對象を異にしても、崇拜を已めることができない。ミツヘルスの云つたところは當つてゐるといふべきである。『ザクセンの工場労働者は最近數年間に篤信の新教徒から社會民主黨員に變化した、かくの如き發展は、労働者に凡ての價値の換價を伴つたであらう。だが彼等が其の安穩な室内でルーテルの肖像を撤去したのは、畢竟之をベーベルの肖像と變更せんが爲めであつた。』社會主義と雖もその例外をな

さないのである。社會主義の群衆に至つては、反つて戰闘的な必要が熾烈である。その内部に狭いセクト的精神あるによつてみても、群衆的精神が明確であつて指導者崇拜の氣風の盛なることを知るべきである。社會主義の集會は極めて活氣がある。これはその言辭の革命的であつて人を眩惑するに留まらず、彼等の間にあつては首領への奉仕心が盛であつて、自づと集團全體が一つの纏まつた世界を眼前に躍如たらしむるが故である。現代における最も英雄的なる集會は、社會主義の其れをのぞいて他に見ることができぬ。往時、民族新興の際に現はれた國民的集會における壯觀は今や無い。我等は現代の政治運動の中心が社會主義に旋回し來つたことを知る。そして、群衆は此の新分野に今やその色彩を發揮しつつあるのである。

群衆において指導者の離つべからざることは明らかである。ところが指導者には典型がある。その分類によつて、各々の特質を分明ならしめなくては、能く指導者を論ずるを得ない。然らば我等は指導者を如何に區別すべきか。カアライルは、これを、僧侶、詩人、科學者等の範疇に區別した。しかし、かかる分類は茲に用ひることができない。我等はこ

れを二つの典型に區別する。一つは群衆の強制者であり、一つは群衆の代表者である。この二つは、同一人の生涯のなかにも交替的に現はれることがあるであらうが、茲には相對立する二つの永久的なる型として考へる。

三

一、強制者。群衆の指導者たるものは何れも公共生活の花形と成る。しかし、そのなかに特に光彩陸離たるものは、群衆強制者の生活であると謂はねばならぬ。之はコンウエイのクラウド・コンペレースの謂である。かくの如き指導者は容易に發見することを得る。蓋し、彼等は群衆に隨行せず、却つて自己の理想を掲げて、これによつて、群衆を驅使するものであつて、巖然頭角を現はすのを常とするからである。我等は近世においてはナポレオンの如きものをその例としてあげることが出来ようか。ナポレオンが如何に群衆を叱咤し、これを自己の意のままに動かしたかは、數多の挿話によつて傳へられてゐる。ある者は彼をも時代の兒であるとする。これは事實である。だが、時代の兒にして而かも時代

を顧慮せず、その上に放膽な活躍をなした點において、彼は群小英雄と其の選を異にする。人口に膾炙したアルプス山險の突破を思へ。彼は不可能であるといつた士卒を一喝して斥けた。自分に不可能の字はないと。何とその氣の傲れることか。しかも、この強制的な魅力は、つひに彼をして一流の群衆強制者たらしめ、蓋世の英雄を近世に生み出した原因を成したのではないか。彼が奧皇室の皇女を妃として請うたのは、史實によると常規を逸した行爲であつた。歐洲において傳統の古きを誇る皇室に、成上りの皇帝が婚を乞うたのである。彼は、傳統を無視し、人間を無視する。ここに、破綻が或ひは潜んでゐたかも知れない。しかし、兎に角この性格は比較的長く歐洲を彼の脚下に在らしめたものとみることが可能である。彼は嘗つて船に搭じて地中海を航行した。夜である。船上偶々學者がゐて、交々神の存在を論議してゐた。彼は之を傾聴してゐたが、突如として口を切つて、曰く、「諸子の論は尤もである。しかし、余は諸君にききたい。頭上を見よ。かの輝ける星斗はそも何人が造つたものであるか。」と。彼はかくして諸人を沈黙せしめたのである。彼の言は必ずしも論破し得ないものでない。しかも、彼は尋常の言を吐いて能く周圍に

畏敬の感を生ぜしめた。これ彼の性格に具はつた強制力の作用でなくて何であらうか。

ナポレオンの如きは近世の一代代表人物にすぎない。古代に溯れば、帝國の建設者にかくの如き人物は極めて多いのである。アレクサンダア、シーザア、シアルマーニユ、彼等は孰れもその事蹟が明らかではないが、と雖もナポレオンに等しいほどの強制的威力を發揮した事は明らかである。彼等は、自己の神性を信するものの如くに行動する。彼等に豫言者の風貌のあることは故なしとしない。かのマホメットに至つては、この兆候歴然たるものがある。彼が山に叫んでその歩みよることを命じたのは一場の滑稽に似てさうではない。勿論、彼は自ら山の方へ歩んで行つた。しかし、彼が山の如き無生物にまでかくの如き言辭を發するが如きは、彼の度胸の廣さを示すに足るであらう。強制者はまことに尋常凡介でない。彼等は民主的ならず粗野ではあるが、そこに反つて力を藏してゐる。マツヂニのいつたことは、能く強制者の本質を道破するものである。彼は、後に述べべき代表型との差をのべ、強制型を以て、「力強き支配的種族、自己の個性を征服者の如く現實の世界及び彼等自らの創造せる世界に刻印せしめ、その事業の内に表明せる生活を實現するものであ

る。第二の偉人は唯外界の幻像を反映する靜かな湖の如く、そして彼等の個性をいはばその上を通りかかる對象と一致するように努める。孰れも有力である。しかし、前者は我等の讚嘆を催さしめ、後者は我等の愛情を起させる。」

強制にとつて必要なのは豫言的力である。しかし、これは單に未來に起ることを豫知するといふ力でなく、自ら將來に起し得る力の認識である。これには自信を要するものであらう。自信に基づく群衆の無視、ここに彼等を眩惑させる催眠力が生ずる。何によつてかくの如き力が個人に發生するか。勿論、身體的な條件にも依る。しかし、その間多少の人工的技術の介在することは勿論であらう。優れたる強制者には自然にその才能が具はつてゐるが、多くの場合彼等もある計畫を立てる。コンウエイはかくの如き例の多きことを示してゐる。ある集會において、辯士がつひに反抗者を壓倒した。彼は最初矢の如き非難の聲のうちに演壇に立つた。初め彼は勇敢に群衆に對し、彼の見解と一致せる點のみを拾つて話しかけた。群衆が此れに喝采するのを待ち、徐ろに彼は群衆を支配していつたが、小半時の間には、彼は完全に主人であつた。彼はそこで群衆の反對する論點を絞へ出した。

しかし、絶えず一致點へ戻ること心がけた。最後にいたつて、初めて彼は自己の政策を陳述したのであるが、彼等は大いにこれに和し、つひに彼をして二時間の長廣舌を振はしめたのである。彼は光榮を以て飾られた。かくの如き人物においてその力量は強制力にある。この性質が第一に必要なのである。

雄辯は必ずしも強制者に必要でない。これは寧ろ代表者の條件である。強制者は雄辯家であるとしても、自らは他を動かさず、斷然石の如くに不動であることを必要とする。雄辯は危機を救ふが、その救ふ危機は小なる場合が多いのである。中央アメリカの國家の首府において、革命が勃發した時、革命軍は都市を包圍した。萬人は翌日には首府が降服して了ふことと豫期してゐた。しかし、丁度總督が病氣になつたか、又は遁走するかして、總督代理が事件を指導することになつた。とともに忽ちにして希望が生じてきた。戰士は蘇生し、市民は恐怖をすてた。夜のうちに塹壕に掘られ、土囊の胸墻は築かれた。凡ての人々は協同した。曉になつて戦が勃發したが、砲は忽ち沈黙した。戦は激烈であつた。五千人の内、二千を下らざる死傷者を生じた。しかし、首府は救はれ、反亂者は遁走した。

この結果は一人の人の力である。彼は雄辯はもたなかつたが、生れ乍らの指導者だつたのである。強制者となるには必ずしも雄辯を必要とせぬ。強制者は多く沈黙の人である。「戦争と平和」のなかのクツウゾフの如き人物にして、しかも偉大な強制者たるものがある。不言と強制との關係あることは、幾多の實例が之を示す。傳統の最も莊嚴なるところに沈黙がある。皇帝や國王の周圍に存する威嚴は、饒舌の産物ではなくて、無言のうむところである。日露戦役においても、總司令官たる大山大將は無言の人物であつたが、彼の存在は一軍の士氣を大いに安んぜしめたのであつた。彼もまた強制者の典型だつたのである。更に、強制者には比較的思想の創造者の多い事實を忘れてはならぬ。代表者は思想をもつてゐる。しかし、それは自己の物ではないのである。強制者にあつてはさうでない。彼等は前人未發の見解をもつといふのではないが、輿論の聲を必ずしも一々受け容れることをしない。彼にとつては征服が人生の意義である。彼は、寸時と雖も自己の見解を敢行しなくては休止の感を抱くが如く、車輪的に活動する。コンウェイ曰く、『本能は彼等をして各人に自己の見解を強ふるのである。彼等は其生活のつづく限り支配してゆかねばなら

ぬ。』輿論に従つて行動するが如きは彼にとつては意氣地のないことである。逆流を溯る鮭の如き生活を彼等は理想とする。彼等は自ら難礁をあさる。彼等は性來險を好むのである。勿論、彼等と雖も廣くみると輿論のなかに生きてゐる。しかし、彼等はこの故に輿論に従つてゐるものとは断定してはならぬ。彼等は自ら作つた輿論のなかに生きてゐるにすぎない。彼等が輿論を作るやそのなかに群集が指導せられ、ここに無数の代表者は生れ出るのである。強制者から代表者を見ると、その局は小である。彼等は山上の巨人の如く冷かに小指導者を俯瞰する。彼等にとつて此等は自己の定石を踏襲する小役者たるのみである。

我等は強制的指導者に華々しさを求めてはならぬ。此の點において、彼等は時として第二の指導者の下にみられることさへある。しかし、結局我等は兩者の相違を目撃するにいたる。強制者は極めて儼然たる權威を保留する。之によつて茲に彼等の權力が確立せられる。この專制的放膽は終に小英雄の企及し得ない所である。彼等の意志の強さは、驚嘆すべきほど永續する。聖ボウロ、コロンブスをみよ。ボウロが迫害の雨風を事ともせず、ローマに傳道した氣力は如何であるか。更にコロンブスが西印度發見の大望を固く守つて

動かす、反叛しようとする乗組員の憤激に遂に屈しなかつた意氣の如き、實に最上級であるといつていいのである。彼等の邁進するところ、之を遮る何の困難もない。世界は皆その脚下に震撼するのである。彼等の事業は山の如く動かない。宇宙の歩みの如く、孜孜として強き内在力を有する。神、人、宇宙の要素は渾然として彼の一個體に集つて協働せるが如くである。彼等はオリンパスの上のゼウスである。彼等は群神の上に嶄然と擡んでてゐる。群集にして若しかくの如き指導者によつて操縦されんか、茲に歴史的な運動が生ずる。一將功成り萬骨枯るの現象は茲に起るのであるが、事業そのものの光芒はこの時の如く輝くことは殆どない。かくの如き指導者が出る時は、即ち英雄的時代である。現在において、かくの如き英雄の出ることは稀であつて、群集は寧ろ代表者を欲する。これ群集勃興の時代の特色である。

固より、群集に對して眞の利益を與ふるが如き英雄は尠ない。群集は實際においてはかくの如き英雄によつて損失を蒙る。しかし、彼等は凡庸なる指導者のもとに淺薄なる運動をつづけて、倦怠を感じ、かくの如き英雄を要求することがある。群集が屢々指導者を放

棄する傾向も、一つはかくの如き英雄を有たないからであるとも言へる。

四

二、代表者。強制者の如く優れた指導者でなくて、しかも現代に最も多く見らるるころの指導者は、即ちこれである。彼はコンウェイのクラウド・エクスポーザに當るものである。彼等は才幹を有つてゐるが、前者の如き永續する意志に至つてはない。彼等は暴狂にして勇敢且つ豪膽なるを常とする。しかし、彼は群衆に對しては毫も批判的になることができない。多く、かくの如き典型の人物は第一の典型の人物の麾下に集まり、彼等のなした事業の一部を分擔するものである。ナポレオンの部下の將軍には、勇猛を以て鳴るものが多かつた。ムラーやネイはこれである。彼等は各地に戦功をあげた。しかも、彼等にはナポレオンの雄圖はなかつた。彼等は運動を自ら創るを得ない。これは前型の英雄の作るところである。彼等は、忽ちにして新しき運動を創成せしめる。代表的英雄は、これらの運動に參與しこれを完成せんがために働くものである。彼等は事業の創始において獨

創なきとともに、その精神において全然強制者とは別である。彼等は先づ自己の意志を殺す。彼等は努めて群衆の意向を窺ふ。彼等はこれを根柢として初めて活動を開始するのである。この故に、彼等に在つては豫言の力よりも寧ろ共感性が必要である。彼等は群衆の企圖を看破し、これを明確に把握せなければならぬ。彼等の眼光は遠くに達しないでも唯だ近くを能く透視することさへ出来ればいいのである。群衆は自己の感情と一致したものを愛する。彼等は輿論を排する。この故に、代表者が彼等の心情を看破し、これと同一の行動に出でんか、彼等が忽ちに膝下に歸服するのは確實である。時として、彼等はこの女性的方法によつて前の英雄以上の衆望を集めることがある。しかし、その器量の大小は論ずる迄もないのである。

既に彼等の特長が右の如くであるとしたならば、その性質が先づ繊細であつて敏感であることはいふを俟たぬ。彼等は物の動くのに忽ち感ずる程の敏感なる才幹を必要とする。彼は風速計の如く群衆の行動と感情を窺つて時を選び跳躍しなければならぬ。彼等のこの態度は虎猫が餌物を待つのに似てゐる。呼吸の大切なことはいふまでもない。彼等は人民

の聲を第一と考へる。政治家にはこの典型が多いものである。政治家は政略を貴ぶ。政略とは右の如き偵察術である。時を圖つて約變するも何等差支はない。英國のグラッドストーンはこの例をなす人物である。彼は、多少強制力を有つてゐるが、一般に世論に敏感であつて折々その政策を改變した。彼は先に論難した主張を後に至つて辯護した。又た先に辯護したことを後に至つて論難した。彼は政策の變改とともにこの矛盾を敢へてしたのである。勿論彼が自利のために意見を變改したものではないが、兎に角、彼が輿論に聽從したことは明かであつて、彼がこの理想の變改を試みたのは、彼が先の強制者とは異つた典型であることを證する。バチオットは彼を批評して、『彼はその前提を聽集から蒸氣の如くに吸収し、更に彼の結論をこれに向ひ洪水の如く注ぎ込む』と謂つたが、之は誠に彼の政治家的面目を表はすとともに、エクスポーザの典型一般を證示するものと見て味はふべきものがある。彼の敵としてはデイスレリが立つてゐて、彼と反對に、自己の意見を把持して下らず、熱情に驅らるることなく、平靜に自己の理想を追求したのは大いなる對照をなすのである。勿論、エクスポーザであるからといつて、無下に排撃すべきものではない。

政治において、エクスポーザこそ、反つて群衆指導者として適當なる役割を演ずることが多く、反つて強制者よりも有益なる場合をみることも間々あるのである。近時群衆の組織的と成ると共に、彼等は益々指導者の一般的典型たらうとする勢がある。

グラッドストーンについて英國の政治上代表的なるものはロイド・ジョージである。彼はグラッドストーンよりも單純であり、完全であると稱せられる。ロイド・ジョージは今なほ存命してゐてその聲價は定まらないが、ダ氏よりは遙かに劣つてゐると評されてゐる。私はここにその評價に關しない。彼は辯護士として生ひ立つたが、その時、既に彼はその相手をして妥協せしむる獨特の手腕家であることを認められたといふ。彼は巧みに怒れる人を操縦した。これ、彼の共感性に基づくものである。この敏感は彼をして公會の支配者たらしめた。彼は群衆の要望を捉へ、巧みにこれを表現する。彼が資本家を罵倒したのは彼がこの雰圍氣に包まれた故であつて、彼が飄然として彼等の代辯者と成つたのも亦た彼が彼等との提携の必要を看破したからに他ならぬ。彼は藏相として名聲を揚げたが、これも彼に偏見なく自己に來れるあらゆる問者に應分の盡力をなし、その希望を達せしめたか

らである。彼はかくて後に國內一致の氣勢を看破し、労働黨を屏息せしめた。かくの如き彼の國政を執つた間の行動をみるに、彼が如何に圓滑にエクスポーザの本質を發揮したかが判明する。

我國においては政黨政治がなほ端緒にあつて、完全なその運用は未だ遠いと謂はなければならぬ。群衆の勢力は未だ外國における程には有力でない、だから、未だ政治家にエクスポーザの典型は出ないといつて差支はない。しかし、我國には、各種の群衆を操縦する底の英雄が出ないのみであつて、小分派のエクスポーザは既に多く現はれてゐる。今日の政黨の内部において、コムペラの數は果して幾人あることであるか。星亨の如きは恐らくはこの類に屬するものだつたであらう。しかし、原敬の如きに至つては、つひに第一の典型ではなかつたらうか。彼は巧みに貴衆兩院を統御して政權を久しく保持した。これは威力ではなく、敏感の作せる業である。彼が時勢に逆行せるが如き言辭を弄したのは何もコムペラの性があるからではない。彼は、資本主義的集團の代言人として最も安全なる路を蹈んだものである。エクスポーザのなかにても特に著しいのは、カメレオンの

如く變色自在のものであるが、この型は尠ない。尾崎行雄、後藤新平の如きは蓋し乏しきなかの一例である。しかし、彼等が果してロイド・ジョージほどの自在なる活動を試み得るか否かは疑問である。我國においてエクスポーザたるものも極めて小なる型に限られてゐる。

代表型は、比較的群衆に對して柔順であるから、群衆によつて愛好せられる。しかし、代表型には理想的觀念がない。彼等は、ピットの如くに、餘りに群衆を眼中におく結果として、つひには群衆操縦に奔命して、徒らに傀儡師の如くに終るものがある。ピットは自己の行爲が下院に如何に反映するかのみを考へ、その作用については考ふことをしなかつた。かくの如くであつては、遂に徒らに修辭とヂエスチユアに囚はれて内容を顧みない辯士と同然である。つひには政治をして不誠實極まるものたらしめる虞がある。彼等にして徒らに目前のために政策を變更して憚らざるに至らんか、デマゴグが発生するのである。群衆自身にして本來節操がないものであるから、彼等の指導者としてはエクスポーザが最も適應してゐる。かくして、無節操が一般を支配するに至つたならば、その種々

の文化に及ぼすべき悪影響は痛心するに値するは必せりである。墮落したエクスポーザはコムペラアよりも遙かに有害である。

強制的指導者は、時として代辯的指導者によつて噎されることがある。しかし、代辯者は獨力にては何事をもなし得ない。首領に對して時として反幹部熱の起ることがある。しかし、首領がつひに失脚した以後如何に運動が趨くかといふに、多くは衰頹する。凡庸者は順境においては力があるが、逆境においては弱くなる。凡庸者は一時コムペラアに代つたやうに自負するが、彼等は忽ち自己の無力を暴露するに至るであらう。結局エクスポーザは代表を離れることが出来ぬ。デマゴグが群衆を捉へず、群衆が反つてデマゴグを捉へる。彼等は、敏感なるとともに、時代とともに變轉するの要に迫られ、唯だ時勢にひかるのみと成る。彼等は馬を水邊に導くことは出来るが、これをして終に飲ましめることは出来ぬ。その弱點はここに潜在する。

五

右の兩型は主にコンウェイ及びル・ボンの説くところであるが、コンウェイは更にクラウド・リブレゼンタチブといふ部類があるとなした。これは「個人的力ではなくて、寧ろ繪畫的な表象的首長」である。之に含まれる意味は、彼等が實力的な指導者でなく、單に首長たる空位を擁するだけであるといふことである。コンウェイは國王を例に擧げる。彼は群衆代辨者たることも、強制者たることもある。唯だ一般の場合において、そは彼等とは別であつて、彼等の權力獲得又は維持の爲めの便宜によつて擁立されるものである。かくの如き指導者は、その實在の如何を問はない場合が多く、死後反つてその效用のある場合もある。キリストにせよ、マルクスにせよ、皆な群衆の表象たり得る。これがかつぐものは即ち指導者であつて、彼等は之を擁立することによつて反つて運動を有効に促進する場合がある。かくの如くなるを以て、リブレゼンタチブは自ら起つことは少ない。彼等は他の擁立を待つてゐる。明治維新の時、幕府も長薩も共にリブレゼンタチブを立てた。か

くの如き擁立は異常時において盛に利用せられるものである。殊に代辨者はこの策を用ひる。アントニウスがブルタスに對した場合、彼はシイザアの血の染まつた衣服を示して彼を自己の味方たらしめた。かくの如き代理者は最も公平に公共の感情を發揮するものとされる。それが完全に公共感情と一致した言動をなすことが認められると、その價値が高められる。それは社會の儀表と成るのである。但し、かくの如き代理者は寧ろ一般の社會においてみられ得る群衆においては稀なものである。

大約、指導者の典型によつてその資格の異なるものなることは、右によつて明らかである。しかし、茲に一括してその資格について論述する必要がある。指導者は孰れも初めは群衆のなかにある。彼等は群衆のなかから輩出したものとみななければならぬ。ル・ボンは既に曰つてゐる。『指導者は被指導者の一人として出發する。彼は自らある觀念に魅惑せられその使徒と成る。かくて、彼にとつては其の心の外の凡ての物は消滅し、反對の意見は誤謬と見えるやうに成る。』指導者は、つひに群衆から卓越するにいたる。如何なる性質によつて彼等は群衆の上に擡んづるに至るのであるか。第一に我等は首領の智能上の優越を論

じなければならぬ。

首領は先づ廣義における智能の發達において優つてゐなければならぬ。第一は、意力の發達である。私は既に指導者の二つの典型において差をなすものが、意力の強弱であることとを論じたが、それは指導者の資格の第一を決定する。群衆は意力によつて動かされる。智能はこれに次いで初めて重要視せられる。しかし、智能は必ずしも十全なるを要しない。教育のあるものが必ずしも首領たるに適せぬ。政黨の如きにおいても、智能の士は第二流の地位に立ち、實際的黨略に長じたものが領袖と成る。これによつて、我等は群衆における智能者の地位を察するに難くない。多くの場合、智能は感情的群衆によつて評價されない。事物の知識よりは寧ろ時機の應變力が重要である。

六

よしんば群衆において多少の智能が必要であるとするも、それは決して博大な知識を要求するものでない。首領たらむとするものは、知識を求めて何の效はないのである。よく

よくのところ、淺くして廣い知識があれば足るのである。群衆において必要とせらるゝ智能は、要するに、技術の範圍を超えない。首領は當時の流行問題について漠然たる抽象的な知識を有つだけでよい。これは事物的知識ともいふべきもの、實際的知識とは即ちこれである。こゝは集會又は決議において必要な、討論のうちから不用のものを省き、反對を剪除するに至らしめる才能である。この術策は、彼等の暗示的手段を基礎として經驗的につくられたものであつて、彼等は之に習熟して適宜に實際を處理してゆくのである。そして、かくの如き場合に、辯論が大いに與つて力あることはいふを俟たぬ。辯論については、特に研究すべきものが多い。先にもいつた如く、これは強制的な指導者にとつて必ずしも不可缺でないが、その手段的效果は十分認めなければならぬ。辯舌が主として群衆形成の資格を與へることは、一般の認めるところである。本來辯舌は群衆を對象として發生し、その術の如きも一々の對象によつて左右せられてゐることが明らかである。我等は辯舌が如何に指導者を作るかを、街頭における集會に屢々發見する。街頭において忽ち群衆の形成される場合、この中心には辯舌者がある。未だよく人を知らない場合、言語ほどよくその

人格を示すものはない。言語は人を捉へる最良の手段である。此の故に、倏忽の間に、辯舌者は街頭に中心をつくる。辯舌の力はその極致においては恐るべきものであつて、今日、宗教運動の如きも一般に辯舌に長じた説教者でなくては人を吸收することができない。ピリー・サンデーの教化について、驚くべき事實がある。一九一九年一月二十四日のフィラデルフィアの新聞によると、彼は一日にして千四百四十五人を改心せしめた。彼の人氣の盛なるも一にその辯舌の巧みなのによることは勿論である。演説が如何に群衆吸引の力を有つてゐるかといふことは、種々の運動において演説會を中心においてゐる事實をみるも明らかである。演説の盛な國には群衆が盛である。孰れが原因であるかを知らないが、その事實であることは明らかである。

演説は偉大である。しかし、これよりも寧ろ意志の力が大である。これはル・ボンによつて威嚴の問題として考察されてゐる。威嚴とは抵抗すべからざる力である。この威嚴には、恐怖又は讚嘆の感情が加はつてゐる。この力の本質は何であるか判明しないが、要するに、人間の智能の力ではなくて、寧ろ全人格の力といふべきか。兎に角、この力は全く

我等を癡痺せしめるものであつて、この力に會うては、唯だ驚異するの他はない。それは磁石の吸引力と同様である。威嚴には、生得的のものと傳來的のものとがある。傳來的のものは、個人特有のものではなくて、それは祖先の傳統の力から發するものである。傳統的なる威嚴は、過去のものである。それは、地位、所有、稱號の産むところであつて、パスカルが裁判官に法服が必要であるといつたのは、この威嚴の性質を説明したものである。この場合、指導者は自己の本質以外のものから力を與へられる。だが、かくの如き場合は稀であつて、多く彼は自ら威嚴を産まなければならぬ。彼は凡ての稱號や權威を脱却してゐる。彼は何の依據するところを有つものでない。しかも、彼は、他人に自づから畏怖の念を生ぜしめる。彼の人に臨むや、猛獸に對する獸使ひの如くである。彼等はかくの如き力を有名とならない以前から既に所有してゐる。ナポレオンは既に少壯にして彼の權力の芽を有してゐた。彼の若かつた日、伊太利軍に使者として赴いた。時に軍營には老将達が盈ち盈ちてゐた。しかも、ナポレオンは一片の言辭を用ふることなく、彼等を壓服し去つた。オーヂュローは、「この小なる惡魔は彼等に恐怖を起さしめた。」と云つた。彼がエム

バを脱出してフランスに上陸した際も、彼の周圍に忽ち大軍の集まり來つたのをみて、ウーゼー將軍は驚嘆の聲を放つた。

かくの如き威嚴の祕密は解き難いものである。群衆は威嚴の囚人である。彼等は威嚴の墮ちざる限り、之に服従する。秀吉の如きも、ナポレオンの威嚴を有してゐたものであらう。彼は容貌人を威壓するに足らず、しかも、よく諸將を征服したのは何に基づくものであるか。彼の筆蹟の如きをみるも、拙劣なかに力があり、一種豪宕の趣を表はしてゐる。彼の如きは智能的に最も下俗であるが威嚴は有つてゐる。征韓の霸業を起したのも彼には相應しいことである。威嚴に比べると、辯舌はつひに空しいといはなければならぬ。

威嚴は表面に發現する力でないが、窮極において地を覆へす力である。リンカーンが嘗てゲツティスブルグに演説した。前辯士の滔々千萬言を費した後に立つて、彼の演説は精彩を缺くこと甚だしかつた。従つて、それほどの喝采を博しなかつた。しかも、彼の演説は實にかの有名なる民主主義的名言を含んでゐたものである。そして、日を経るに従ひ、彼の演説は喧傳せられた。彼の威力は竟に辯舌を壓したのである。演説は必ずしも威嚴を

生ぜしめないものである。近時露西亞の革命において我等は二人の人物の對照を見た。レーニンとトロツキイがそれである。レーニンとトロツキイは孰れも革命の人傑であるが、人物の上下においては自づから格段の差がある。露國で直接兩者の風貌に接した英國人が英國雜誌に送つた論稿に曰く、『ある集合においてトロツキイが現はれて滔々辯を揮つた。しかも、その後に、レーニンが出づるや、口を開くこと咄にして演説の聞くべきものがない。しかも、彼は完全に聽集を捉へ彼等に對する感銘は遙かにトロツキイを凌駕した。』と。かくの如き事實は屢々報道されてゐる。トロツキイの如き固より精悍にして有數の首領である。しかし、彼に較べてはレーニンが威嚴において勝つてゐると謂はねばならぬ。レーニンは風貌揚らず宛然ムジークの如くであつたといふが、眞率が反つて人心を吸収するものであらうか。トロツキイと雖も多少は強制者の性質を有してゐる。ブレスト條約締結後、水兵が軍事委員會の前に集つて將に叛亂せんとした時がある。トロツキイは急を聞きバルコンに出た。何人もこれを説服することが出来なかつたからである。彼は憤激しつゝ單身彼等を痛罵した。十分間の後、水兵は全く壓倒された。彼等は散々に罵られた擧句

喝采してトロツキイを送つた。群衆はその望を充たされなかつたが解散した。トロツキイにも威嚴のみるべきものがないではない。しかも、彼は多く辯力に基づいてゐる。レーニンに至つては、遙かに彼を凌駕してゐる。彼は辯力によらず、全身の力によつて打克つのである。レーニンが革命後特に神視せられるまでに民衆の崇拜を受けたのも蓋し當然といつていいのである。

今日なほ指導者の資格を作るものとして考慮さるべきものに財力がある。政黨についてみるに、従前は單に政黨員操縦の才があれば首領たることができた、今やかくの如き手腕の士は認められない。自ら資力を有たないまでもこれが融通の可能なる人士を除いては、首領たるを得ぬ。しかし、群衆は政黨とは異なつてゐる、かほどまで金錢に依つては左右されないのである。勿論、初めから多少金力によつて醸成せられた群衆においては、金錢が萬事を決濟するのは明らかである。しかし、かくの如き群衆はその力が微弱である。これは作られた群衆であつて、眞の群衆でない。眞の群衆は金力以外の力に屈服することが多い。金錢によつて生じた群衆は恐るゝに足らないのである。政治上の目的から金力によ

つて群衆を作る策を採るものがあるが、それは全く便宜的なるものに止まつてゐる。金力は威力よりも人をつなぐものでない。罷工暴動において金力の作用を重大視するものがあるが、これは反つて輕視していいのである。支那において生じた排外暴動において資金を云々するものが多いが、彼等を永續させるは、排外的な底心の爲めである。これを看取することがないと、我等は大いに判断を誤ることに成る。

指導者は機會によつて生ずる。偶然演壇に駆け上つて忽ち群衆を率ゆるに至るものがある。大聲なるが故に指導者となつたものもある。群衆は、自己の行動に適してゐると速断した指導者を直ちに承認する。この決定は本能的である。そして、戰時、革命時においては特にこの傾向がある。群衆は、指導者にして非常に偉大でない限りは、よくこれを誤認する。彼等は最も群衆的なる人物を欲し、然らざるものは排斥し去らうとする。戰時中において悠々拱手大策を行ふ大臣は緩漫であると罵倒される。そして沈着が愚鈍と断定せらるることさへある。指導者にしてかくの如く群衆に翻弄さるゝのみであるならば、彼等は最惡の指導者である。指導者はある程度まで群衆を改鑄しなければならぬ。單なる群衆の

口に過ぎないやうなものは、指導者として最も低級なものである。

七

我等は、ここに一言群衆の組織に對する新聞紙の力について述べなければならぬ。今日群衆の成立についてはプラットフォームの力が猶ほ盛である。抑もプラットフォームの起源は、英國にある。それは選挙權擴張の運動に用ひられて効果のあつたところから、一般に用ひらるるに至つたものであつて、これは今日なほ有力な機關である。しかし、これに勝つて有力な機關がある。それは新聞紙である。新聞が輿論なるものの中心を構成する事實は一般に關知されてゐて説明するまでもない。この機關は常に輿論を形成するばかりでなく群衆に對して間接的に指導をなす作用がある。新聞紙でも公正に時事を報道するだけを任務とするものは、論調が平靜であつて群衆を醸成することもない。しかし、今日の新聞紙は一般に群衆的な要素を含んでゐる。それは元來一黨一派の機關として、黨の綱領と首領を支持し宣傳するために存在する。勿論、新聞紙は文字の上にあるが故に、人の耳朵を打つこ

とが強くない觀を呈するが、その日々に繰返す宣傳は恐るべき威力を有する。仔細に新聞紙を検するに、重要とは見えない隅々に毒舌を逞しうした寸鐵的な記事を見る。此等は新聞において反つて重要視せらるるものであつて、この胸壁に隠れて、記者は演壇の上よりするより以上の威力を以て有力な攻撃を試みる。殊に、その讀まれる範圍の廣大なる點も、その威力に加ふるところがあるものである。新聞紙は公衆を作る機關であると考へられてゐるが、それは群衆たるべき素質を含んでゐるから、實際は群衆の孵卵場である。従前は知らず、今日では新聞は群衆に對する第一の刺戟者である。新聞紙は時として意識的に群衆を示唆することさへ稀でない。米國における黄色紙の如きは、その狹隘なる國家主義を以て米國人の無智輕薄な分子を煽動し、黒人に對してリンチを行はしめることを以て本職としてゐる。我國にてもかくの如き論調を有するものが少なくない。公正であると思える新聞紙でも、社會的には偏見にみちた記事を好んで登載する。

新聞の地位がかくの如くであるに伴つて、新聞記者に指導者の性質を有するものが現はれて來る。新聞の勢力が儼然たる一王國を構成するに従ひ、新聞記者は自己の力を感得す

る。一小記者と雖も新聞の名によつて横行する。彼等の氣が傲るのも當然ではないか。新聞の無名的性質は、記者の勢力を大ならしめる。殊に、新聞記者は一方實世間の種々の事項に通曉し、又た種々の機密にも與かるものなるが故に、指導的な行動には大いに適合してゐる。新聞記者が現代において占める地位、殊に指導の地位は輕視してはならぬ。輓近において新聞によつて爲される事業は漸次擴大しつゝある。その多くは、進取的であつて寧ろ時宜に叶つたものであるが、偶々かくの如きは、彼等の勢力の伸張を示すものである。彼等にしてその指導を誤らないならば、大いに社會に貢獻することが出来るであらう。彼等のうちには、群衆に投ずるものもある。佛國大革命に既にこの現象があつた。近時の露國革命においても、他國の記者にして留まつて、大いに其の宣傳に力をつくしたものが尠なくない。新を求めて奔走する彼等に、この傾向のあるのは自然である。唯だ祕密にかくれて自由に人を攻撃する習慣に導かれたならば、習ひが性となり、つひに下劣なる群衆指導をなすに了るであらう。

新聞紙においては屢々誇張主義が盛である。これは新聞の罪に歸すべきではないかもし

れないが、かくの如きは、群集に刺戟を與ふるものとみるべきである。誇大な廣告の如きは社會に法外なる氣分を醸す。その害は誇大なる記事にもゆづらない。新聞を以て社會の木鐸といふが、これは理想である。現實において、我等は、新聞の弊害の多い事實に對面する。新聞の論調と群集發生との有機的關係は確かに考察の價値のあるものである。

群集と指導者との交響樂——ここに種々の英雄的行爲の發揮がある。群集は指導者がなくては、無力である。彼等は自ら組織する力なく、此れを他に俟つものである。此の過程は群集研究において最も興味あるものであるが、それは次に説かう。今茲に組織の群集に對する効果を列記せんか、三つの主要なる目的が発見される。(一)、情緒にある程度の繼續性を與へること。(二)、之に知力を與へてその缺陷を補ふこと。(三)、それにその欲望充足の執行力を與へることである。無組織的群集は、破壊的であるにすぎぬ。これ暴衆である。それは猛獸の如く敵に手向ふ。しかし、その力は十分でなく、多少訓練ある社會は容易にこれを挫折せしめることができる。組織は單に群集をある目的に導くのみならず、その能率を増大せしめるものである。

第四章 群集の過程

一

群集成立の過程は、最もよく群集の性質やその構成を暴露するものである。個人が群集に参加するに至る動機は、無意識的欲求の存在にあるのは勿論である。この要求が潜在してゐるところに、ある外的な力が作用して示唆が起り、茲に群集が生ずるのである。個人が群集化するにいたる過程は、極めて無意識的であつて、自ら此れを知らない場合が多い。個人が群集化するのは全く彼が傳染病に罹ると同然である。彼は知らず知らずの裡に自己が熱にうなされて居ることを發見するに至る。コンウェイが群集化を以て、恰かもコレラが街に蔓延するのに似てゐるといつたのは當つてゐるといはねばならぬ。群集化の過程は急速であり又た不明でもある。我等は自ら理性的であると自信して居るが、なほこれに

推込まれ易い。此の過程を一般的に特記すると知的ではなくて感情的であるとでもいふべきか。群衆化の過程は恰かも街中を音楽隊が通過するや小兒がそれに誘はれ自づから列をなしてそのあとを尾けてゆくのに似てゐる。かくの如きは理智の判断によるものでない。一に彼等は突發的な情緒に動かされたのである。内にある漠然たる被誘惑的な感情がある以上、かくの如く牽きつけられてゆくのも當然である。今、この過程を檢査して、その間に群衆の特長を發見するに努めよう。

二

ロツスは、先づ、群衆過程の最初にはある接觸が必要であるといつた。蓋し、個人に作用する暗示は集團のなかにあつて最も強いからである。「増加された暗示の力は集密のなかにおける個人にとつて最も強い。特に、彼が自己の地位及び運動を支配できない場合にはさうである。」人口集密の感は、直接的なると間接的なるとを問はず、個人を壓制して自己の感を失はしめる。人口集密なるにおいては、特に個性が消滅し、群衆の生じ易いこと

250274

は、劇場において立見の席が最も騒がしいことによつても知られる。カイザアの「朝から夜中まで」を見ると、競馬の場に各觀覽席の騒擾を示してゐるが、下等の席は最も騒がしいのである。これは、人數が多いからである。この人口の密度によつて群衆發生の條件の異なることは、辯士の注意をひいたところであつて、大膽なる辯士ほど聽衆の多數であることを要求し、その數の尠ないときには、意氣銷沈するものさへある。兎に角、群衆の前には、雜集がなくてはならぬ。これによつて個人は自己を失ふに至る。それは、全體のなかに吸収せらるゝものか、又は全體によつて壓倒さるゝものなるかは判らないが、人數の中にあつて、自づと自己感を失ふに至るのは定まつてゐる。この状態は群衆過程の第一條件をなすものである。

集團においては、更に注意の集中が行はれなければならぬ。彼等の雜沓のなかから、ある注意、期待の感情が起らなくては、群衆は生じない。かくの如き注意の固定の生ずる場合は、群衆のクリチカル・モメントである。我等が假寐に入らうとする前に生ずる幻覺の如き期待の瞬間は、あらゆる群衆の先行現象である。當時座にあつたものは自覺しない

が、集會の場合、開會の宣せられた瞬間は、正にかくの如き緊張の刻である。座長が席に着き、何事かが始まらうとする。各人は皆肅然として傾聴して一語をも聞きのがすまいと身構へてゐる。かくの如き沈黙が長くつづく、忽ちこの氣分が破れるが、巧みにその持續してゐる間に辯士が登壇すると、彼は割るゝが如き喝采を受ける。かくの如く、ある事件を熱心に待ち設けてゐる人々は、容易に群衆化することができる。蓋し、緊張によつて各人は夢中となり、理解力の代りに暗示が優勢と成るからである。かくの如き瞬間は、戰爭の前に於て一般的に現はるところである。國交が危くなり、風雲が急を極める。號外の音に人心は統々としてゐる。かくの如き時、恐怖と期待のため人々の心に齊しく同一の心理状態が生ずる。かくの如き折こそ、容易に群衆の成立をみるのである。ロマン・ローランは、ヂアン・クリストフの中で、佛獨の戰雲急を告げるや、忽ち平素は冷淡であつた巴里のある家の住民が忽ち一致的に行動する場合を描寫した。初め、クリストフは彼等相互の隔絶と冷淡に驚いたが、一旦國家が危機に瀕するや、獨人なる彼は、一人孤立するに至つたのを見出した。彼等の期せずして一致する態度——こゝに群衆化の機がひそんで

ゐる。

勿論、同じく興奮したにせよ、萬人においてその度が等しいとはいへない。ある者は特に情緒的である。彼等は忽ち群衆化する。しかし、なほ無關心を守るものが多少は存する。しかも、此等も情緒的なる他の者によつて一掃せられ、つひに全部群衆化するものである。理論はもはや尊重されぬ。概念は生硬であつて到底群衆によつて理解され得ないからである。理論は感情の如く傳達され易くない。感情は人數の増加によつて益々強められる。かくて、相互作用の爲に、感情の淘汰が行はれ、最も單純にして情緒的なるもののみが残される。そして、感情の昂揚は、反對に益々理性を殺すにいたる。理論が群衆にないのではない。しかし、それが感情的なものに留まることは、後に説くであらう。兎に角、はじめにおいて、先づ感情的一體の生ずることが先決的である。

かくの如き状態が成立した時、こゝに指導者が現はれるのである。彼等も自らこの感情的一體感に動かされ居るものの如くであるが、この形勢を觀望して、自ら先頭に立つの野心を起して来る。右は群衆發生の豫件である。指導者がこゝに現はれて、始めて群衆を發

生せしめる。

三

ロツスは此の過程を三つに分つてゐる。

一、擴大。群衆は一旦生じた以上は、單なる傳播によつて全く共感なき人々にまで擴大する。渦が物を誘ひ込むが如く、群衆にはその周圍のものを自己のなかに吸引する作用がある。宗教的集團を冷評しつゝこれに従ふもの、何氣なく傍觀してゐて私刑に加はるもの、等は此の例である。キプリングの物語「オン・ザ・シチーウォール」に、オクスフォードからマドラスに歸來したある土人が書かれてある。彼は全く西國の教化を受け、ヒンヅーとモハメットとの狂信者の争を輕蔑して居る。しかも、間もなく彼は彼自ら何の關係もないモハメット教徒の肩をもち、争鬪の仲間入をなすのである。サイデイスは一八三一年のロシアのある植民地軍人の叛亂を記してゐる。ソコロフの戦ひつゝある際、一人の軍曹が廣場にあつて涕泣してゐた。故を問ふと、彼は、彼等が司令官を殺すのは自分の父を殺すや

うなものであると答へた。彼にソコロフを助けにゆくべき旨を諭すと、彼は直ちに去つて司令官の助に赴いた。やゝあつて私がソコロフを助けに行つたところが、彼の兵士はソコロフを棒で叩いてゐるではないか。何をするのだと詰つたところ、彼は、皆が彼を叩くの何故見ておれるかと答へた。右の二つの例は何等關心なきものが竟に群衆の渦に吸ひ込まるゝ場合を示したものであつて、かくの如き事實は他にも多かるべきである。

二、深刻化。同一の印象をうけた個人は、多くの者が同一の感を抱いてゐるのをみる時、自己の感情が強められることを感ずる。悲喜交々此れに與かる人の多ければ多いほど、大なるものである。劇の感興も人數に關係がある。如何に喜劇又は悲劇の上乗なるものも、若し觀客多からざる劇場で觀たならば、淺薄な印象しか與へないであらう。場内に人數の稀薄な場合には、相互作用が乏しくて感興が淺い。同一の映畫の如きも、常設館の容量如何によつて感興の異なることがある。原始民族が狩獵又は戰勝に伴つて行ふ舞踏の如きは、無意識的ながらかくの如き個人の印象を深刻化せしむる一つの方便であつた。これは所謂相互示唆の状態であつて、群衆過程の中心はここに在る。演說會において、我等は聽衆の

感化を受けることが多い。かくの如き示唆が高潮に達する時、それはつひに吾人の理念を凡て一に糾合し、他のものを抹殺するに至る。無責任の生ずる源泉はこゝにある。

三、傾向性。群衆はある一致を発見する時には長く之に支配せられ、次の瞬間に之が示唆された場合には容易にこれに屈服するものである。かくの如きは人間一般の性向として認めらるゝところ、偶々群衆においてそれが著しいものに他ならぬ。群衆にして一旦ある暗示によつて動いたならば、後は示唆のままとなるであらう。かくの如き過程にまで進めば、最早群衆は自動的に發展するものである。戦争において、最初、兵士は戦争に對して逃避的な態度を執る。しかも、一旦彼等が戦争の現實に觸れ、殊に勝利を得るが如きことあらんか、彼等は自動的に戦争を追求して止まないのである。ゲーリンクの「海戦」に出る水兵に、はじめ謀叛氣を有つてゐたが、敵艦が見えたと同時に、反つて闘士となつたものがある。一旦、ある示唆にかゝれば、後は轉落する石の如くである。彼は示唆を與へたものにも勝つた熱心さを以て運動を敢行する。かくの如き傾向性が生じた時、指導者が不注意な場合には、つひに思はぬ方向に擡はれてゆくことがある。既に群衆心の方向が一定

するや、彼等はその心を狹隘にするとともに、この傾向に近い意見は直ちに採用するのを辭しない。そして、この傾向は群衆運動の繼續期間が長ければ長いほど甚しいのである。佛蘭西革命はこれを證明する。はじめ、革命は平常的に進行したが、やがて恐怖時代に入ったつてそれは狂熱的となつた。貴族に對する反感はいやが上に高まり、殺戮は讚美せられ、領袖はたゞこの傾向に迎合せんことに努め、そのうちにつひに同志討をさへ演出し、大立物は相尋いで斃れた。革命の群衆は、日と共に益々革命の意義を没却し、多くの情操ある革命家を排除するに至つた。ロシア革命においても、クレンスキー内閣後、革命の勢はつひにその統御を脱し、過激派の執政を見るにいたつた事實がある。革命又は群衆の傾向性は、これによつてみれば、自然であるといはねばならぬ。かくの如き傾向は、他から強い反對力の現はれない限りは繼續するものであつて、群衆は正にかくの如き傾向の權化である。

四

右の如き過程を見るに、群衆にはその成立するに當つて多少の猶豫があるものである。レヴアイヴアルの壯觀は、最初の瞬間からあるものでない。俳優が觀客を魅するには劇の進行を待たなければならぬ。その間に、階段がある。一撃によるのではない。幾多の早き順序的な打撃によつて、軍隊は逃走する。あらゆる場合、群衆が個人に代るまでには、かなりの暗示を必要とする。彼等が自動的になり催眠にかかつたやうになるまでには、指導者の示唆が必要とされる。

群衆化の過程において使用さるゝ手段や方法は、群衆の性質を巧みに裏書するものである。群衆過程に撒き散らさるゝ群衆化の種子は大約一定してゐる。抑も初めに群衆的な雰囲気存在を必要とするとは説くまでもない。何か一般的に群衆の不滿の刺戟された時こそ、最もよく群衆を生ぜしめ易い。かくの如き機會のあることを發見するや、直ちに指導者は活動を始める。彼等は直ちに群衆の歡心を買ふべき口實を求める。群衆を作るには

先づ擴大を圖る必要があるが、かくの如く多くの人々を糾合して群衆を生ぜしむる問題は自づから決まつてゐる。従つて、指導者は群衆をつくるためには、先づ題目を選定する。群衆の性質が理論的でない以上、理論的な問題は群衆に適しない。理論的問題にしても、特に廣大なるものは時として群衆的な問題をかもすことがある。ダーキンの進化論やアインシュタインの相對性理論はこの例である。ダーキンの理論が今日なほ科學的以上の興味を以て論争の渦を惹起することが屢々であり、更にアインシュタインの理論も、一時は應用すべからざる方面にまで歡呼を以て迎へられたものである。かくの如き題目は、一般的な興味があるだけ、群衆に好餌を提供する。主な場合、群衆は、宗教や政治や經濟等の問題を縁として發生する。しかし、あらゆる瑣細な問題が群衆を惹起するものとは考へてならぬ。群衆は、明白且つ大綱的な問題に集中する性質がある。問題は、細部に關するものであつてはならない。それは漠然たる大問題たることを要する。クリステンセンは、『議會において最も賑かなのは、政治上の一般原則が論題に上程さるゝ日に限られる。』といつたが、議會も一般群衆の心理を表明するところから考へて當然のことと了解できる。かくの

如き心理は政黨の最もよく熟知してゐる所であつて、彼等の綱領として掲ぐるものは、最も一般的なる空漠たる言辭である。

更に、宣言の如きもこれと同一の事象を呈示する。抑も、宣言の如きは、一般に抽象的であるのを常とする。具體的内容について嚴正な批判を下した場合、殆ど政黨の宣言綱領にして完璧なものはないであらう。政黨が小問題を棄て、大問題に就かうと努めるのは、群衆を基調とした以上、當然のことである。政黨の指導者たるものは、問題を速かに捕捉しなければならぬ。彼等は常に新しい問題をとらへ以て大勢を左右する策を講ずる。護憲のごとき問題は、活動のためにかなり有利な題目であつた。それは憲政下における主要問題であることを一目瞭然たらしめたが故である。この旗幟のもとに屢々群衆運動が勃發したことは、その問題の群衆化的な力を證明する。しかも、この問題をとらへるもの多くが成功したことによつて、一種の萬能藥としてこれを利用せんとするものが多く現はれる。しかし、これが政黨唯一の題目であるわけではない。時を見るの明があるならば、能く剝那的に適當の群衆化の題目を發見することができる。支那における民衆運動には、好題目が

ある。指導者は民族的且つ經濟的に巧みに好問題を捉へる。蓋し、支那たる、國家として形式未だ整はず、弊政頓に重なるとともに、他方外國の壓迫による不満が生じ易く、かくて民衆には他の國家のそれよりも遙かに不安定の心情があるので、群衆勃發の可能性に富むものである。

指導者にしてある好題目を得たならば、彼等の活動は全く易々として進むのである。彼等はある題目に關して、群衆の直ちに受納し得るある形式をつくる。この形式によつて彼等は群衆の心を把握しようとする。ここにおいて、彼等の行動の手段を論じなければならぬ。これはル・ボンもまた説くところである。指導者の性格そのものが、これを決定するに當つて重大なる意義を有するのはいふまでもない。しかし、これについては前章に既に述べた如くである。私は再びこれをとかない。人格ではなくて、手段が、ここに問題なのである。手段は目的によつて決定される。群衆の過程を指導者の意圖と關係せしめて考へる時、我等はその目的が一に群衆に急速なる暗示を與ふるに在ると見なくてはならぬ。それには暗示の群衆化的効果を發揮させる必要がある。此れを簡單にいはんか、暗示は最も

斷定的に且つ繰返さるべきである。

一、斷定。群衆に指示される命題は、あくまで斷定的たることを要する。實證や理窟は無用である。通常我等が人に對する場合には條理を盡くして説かない限り對手を納得せしめ得ないものであるが、群衆においてかくの如き勞力を用ふるのは無用である。主張は簡明なるほど効果がある。宗教的書籍や法典の魅力的なのは、一にその單純なる斷定にあるのである。もし科學の如く理を細かにしたならば、果して能く幾人感激せしめ得るであらうか。宗教が警句に富んでゐるのは、自づからこれを群衆に宣布するには便宜である。「汝の敵を愛せよ」「即身成佛」云々の如くである。この心理は、政治家や商人等も夙に熟知してゐる。政治家の言辭は粗大であり雜駁である。しかも、事務的に知識のあるものよりも、大言壯語の方が群衆に人氣のあるのは何故であるか。黨人において安達謙藏の如きは、政黨生活の經歷古きにも拘らず、一永井よりも人氣がない。これ一に彼が壯大の言辭を弄せず、又たその機會のないのに基づくものである。彼は素より選舉に異常の興味をもち、その敏腕驚くべきものがあるが、世人はこれを認めつゝも、彼を潮の如き人氣を

以て迎へない。世人の態度は此れによつてトすべく、政治家の着眼點の那邊にあるかも一見直ちに知ることを得るであらう。商人に於ても彼等が自己の商品の廣告に於て、如何に斷定的態度に出るか、新聞紙を調べてみると明らかである。彼等は擧つて自己の商品を以て天下無比と呼號し、賣行第一と僭稱し、微小なる商品を以て誇大の廣告を敢へてする。そして、詳細な説明を加へた丁寧な廣告よりは、大ざつばに效能を列記した意匠斬新なるものが反つて賣行がよいと聞いては、彼等の着眼が結局的確であることを思はせる。斷定を愛する傾向の盛なことは、これによつて知ることが出来る。演說會に出入したものは、學術講演會以外においては、聽衆が説明を好まないことを直ちに看破するであらう。若し初心のもものが彼等の倦怠を知らないで演說を續行せんか、「簡單」の聲は期せずして起るであらう。もし説明を除いたならば何が残るのであるか。唯だ感情的な文句のみである。かくの如き感情的文句のみをきくためには特に演說會に來る必要がないと思はれる程である。しかも、演說會は一般にかくの如きものである。群衆は直截明確なる感情的斷定を欲するのである。客歲私の關係してゐた某學院において某教師が排斥されたことがある。その口

實に曰く、「某教師は英語の解釋に際して、斷定的なる答を與へない。唯だかうでせうといふのみである。かくの如き曖昧な教授法をなす教師は到底信頼はできぬ。」と。私自らはこの教師を能く知つてゐた。彼は學識において遜色のある人ではない。唯だ本來正直なる餘り、他の教師が折々誤魔化すべきところを正直に告白して、かうでせうといふのみである。しかも、學生はかくの如き正直さよりも虚偽にせよ大膽なる斷定を好む場合がある。以て偶々群集において斷定が第一にされる所以を明らかにすることができよう。群集は斷定的動物である。眞偽如何は問題とされないのである。

二、繰返。斷定は更に絶えず繰返されなければならぬ。有力な斷定も、一回だけでは効果を奏し難い。ナポレオンは、修辭學においてたゞ一つ重要な形式がある。それは繰返しであるといつた。群集心理を把握した彼の言として、これは傾聴に値する。繰返しは終に習慣をうみ、言辭に尤もらしさを與へる力がある。斷定において弱いものと雖も、繰返しが頻繁なるにおいては、有力なる眞實と解さるゝに至る事もある。繰返しの結果、我等は初めの間こそその主唱者を知つてゐるが、漸次これを忘却するとともに反感をも失ひ、知

らず知らず、此れを信ずるに至る。この心理は同じく種々の人々によつて利用される。とりわけその効果の著しいものは、廣告である。我等はある賣藥が有效であるといふ廣告をみて、此れを大して顧慮もせず、寧ろその眞價を疑ふことが多いであらう。しかも、ある日藥店に赴き何か藥を買はうとする場合、我等は平常みなれた賣藥の名を指してこれを買ふことが多い。菓子類についても同様である。だから、廣告主は成るだけ屢々同一の商品の廣告を繰返すことに努めてゐる。又た群集吸引の一方法である。

右の二つの手段を以て或る題目を宣傳せんか、我等は立ちどころに群集を獲得することができる。斷定にして始終繰返されんか、ここに群集心の一致的發生を見るにいたる。ここにおいて、群集過程の擴大が生じ、深刻化及び傾向化が促進される。

群集製造の要諦は、右の二つに歸するといつてもいゝのである。あらゆる群集に直接關係する要素は、右の原理に基づいて案排される。しかし、ここに特記しなければならぬのは、題目が單に斷定され繰返さるゝに止らず、それが本來群集に適するやうに作られること、此れである。勿論、群集はある時ある處において一定の吸引的な題目を知る。しか

し、私はこれをいふのではない。この題目が群集に對してはある人工を加へて提示されることを指すである。人工とは何であるか。それは、一言でいへば、信仰化である。群集の性質は、信仰的なものであるが、それはその性質に起因する。彼等は無意識的であつて、理論を欲しない。自己の要求に相應しこれを巧みに満足せしめるものには、無批判的に屈服する傾向がある。信仰的心情に最も適したものが、群集の要求に合致する。觀念が群集の嗜好に適するため経過すべき變化は、ル・ボンも夙に述べてゐるところであつて、これは殊に高級なる哲學的理論について認められる。彼はいふ、「いかに大きな又は眞の思想であるにせよ、それが群集の知的標準に達し、これに感化を及ぼす時にいたつては、全く高級と偉大の性質を失ふものである。」と。群集の思考における觀念は論理的ではなく信仰的である。群集の下級の思考は高級の思考におけると同じく、觀念の結合において存立する。しかし、觀念の間には、眞の類似又は繼續がない。彼等の思考はエスキモーのそれに似てゐる。彼等は、經驗によつて、氷が透明であつて口中に溶けることを知り、透明なる硝子も亦たこの性質を有すると考へるのである。」

「彼等の思考の特長は、唯表面的に關聯した不同の事物を結合するにあるのみである。又た特殊な場合を直ちに一般化するにあるのみである。群集を示唆せんとするものによつて提供されるのは、かくの如き議論である。論理的な議論の連鎖は全く群集にとつては不可解である。この故に、彼等は思考せず、又は誤つた思考をなすといつても妨げはない。ある演説の缺點をみると、何故それが群集に感化を及ぼしたかが奇怪に思はるゝものがある。だが、これは元々群集を説得するために作られたものであつて、哲學者のよむべきものでない。群集に近く立つ雄辯家は、群集を誘惑するに足る幻影を作ること長じてゐる。彼がこの目的を達すれば即ち成功である。」二十卷の論説も群集に對しては數言の文句に若干かないのである。』論理なきところに論理をつけ、連絡なきものを連絡させる。これ即ち信仰の手段である。信仰は對者の要求を巧みに蔽ふべき統一の意義を作ればよいのである。しかも、かくの如き統一の意義こそは群集の求めて已まないものであつて、論理は問題にはならぬ。問題は、なるだけ圓滿に希望を將來に約束する形式において思想を構成するに在る。群集には、明確なる表象でなくても、あるまとまつた幻像を與へ得れば十分である。

指導者はここに所謂象徴化に努める。これは、断定や繰返し他に重要な手段である。此の手段は、繰返し、又は断定とは異り、稍々複雑であつて技巧的なるものである。故に少しく詳細にこれを論じなければならぬ。

五

群集が幻像によつて動かされ易いものであることは明らかであるが、かくの如き信仰を形成するには如何なる手段を用ふべきであるか。ある技巧を用ふる時、言語や形式は神秘的な力を賦與される。ル・ボン曰く、「言語の力はその幻像と関係がある。そして、これは意その眞義とは全然別物である。定義の不完全なる語が反つて最も力がある。例へば、デモクラシーとか、社會主義とか、平等とか自由とかの如き語がこれである。此等はその義が漠然としてゐて、如何に浩瀚な書冊と雖もこれを明らかにすることができない。しかも、眞の魔力はかくの如き難しい言葉に與へられる。それは恰かも凡ての問題の解決たるかの如く考へられるのである。それは種々の無意識の要求と希望を綜合してゐる。」かくの如

き廣大な意義を附せられた言葉は、時代から時代に種々の意義を與へられる。言語はあらゆる幻像を喚起し得る呪物の如くである。ル・ボンは、かくの如き言葉の例として自由、祖國等の語を検討した。實際、かくの如き偉大な言葉にいたつては、その意義が特に不明瞭であつて、時代とともに變遷も亦た甚だしいのである。指導者は、一定の時所において群集がかくの如き言葉に如何なる意味を要求するかを考へ、これを宣傳することに依つて有力な群集を創り出すものである。まことに言語はこれにある信仰的な力を貸したならば、如何なる忌むべき企圖を遂行するためにも利用され得るであらう。ル・ボンはテエヌの言葉を引用した。「自由と友愛の語によつて、ヂャコバン黨はゲホメイの専制にも劣らない専制を現出し、宗教裁判にも劣らない裁判所を現出せしめたものである。」此等の言葉の皮相が麗しいならば一層その効果は大である。

象徴的な言葉は、その代表型を標語に見出す。標語とは簡明なるとともに多様の意義を含んだ言葉又は文章であつて、かくの如き形式は最もよく象徴的たるものである。かくの如き言葉の發見又は創造は、指導者に在る。そして、如何なる群集でもかくの如き標語を

缺くものは稀であるといはねばならぬ。かくの如きは、高級なる組織社會においても、重要な役割を演ずるものであるが、就中群衆においてはさうである。標語は、ある場合理想を成すものであるが、群衆においてはさうでない場合が多い。「祖國の爲めに」、「フオー・フアザラント」、「プウル・ラ・フランス」、「英國は各員の義務遂行を期待す。——これ等は、理想的標語である。かくの如き標語は、社會的に鞏固な基礎を有つてゐて、やがて一種の社會意識の表現と成る。適宜に構成された標語が忽ち象徴的に意義を附せらるゝに至る事は、世界戦の例によつて知ることが出来る。世界戦の起るや、各國はそれぞれ自己を肯定するに足る理由を見出さうと鋭意努力した。孰れも自國が他國に依つて挑戦されたものであると主張した。殊に、正義と人道を高唱したのは、聯合國側であつた。彼等は獨逸を目して人道の敵、平和の破壊者となし、「フン」といふ頗る野蠻な言葉を以て罵倒した。これは我等が日露戦役に「露助」などと呼んだのにも勝るものである。しかも、この呼稱は異常な敵愾心に驅られた人民から直ちに共鳴を得たものである。人民は自己だけが正義と人道のために戦つてゐるものと思惟した。實際においては、正義と人道のために立つた

國が果してあつたらうか。彼等の正義人道はそれぞれ自己の狭い心の規準によつて觀念されたものにすぎない。此の事實はコンウエイの如きが率直に是認した所である。「二つの群が相戦ふや、異なつた思想は互ひに相扞格する。しかし、かくの如き理想が原因となつて戦が起るものでない。それは獨立した群の存在によつて惹起されたものである。戦争の埒場のだがで試練されつつある理想は戦争の原因ではない。たとひ、それが一方の勝利に貢獻することがあるとするも、現在我等は獨逸と正義のために戦つてゐるのでない。それは獨逸が歐洲の均衡を覆へさうとしてゐるからである。英國もまたた嘗てかくの如き時代を経過した。今や英國はかくの如き觀念をすてたが、若き獨逸は自らの力を信じ、又た無經驗の生む無智によつて、世界の肯じない支配を成就しようとした。これが大戰の原因である。戦争が一旦起るや、それは兩交戦國の各々に反應して、彼等の群衆結合を鞏固にし、内部的な敵對を滅殺し、かくして、相對抗せる集團は謂はゞその旗印をなす種々の理想をうむにいたる。」彼はなほ獨逸のみを責める傾向を有つてゐるが、理想なるものが何等最初から戦争を導いたものでなくて、それが率る戦争の勃發以後に群衆心に投ぜられた好餌

又は興奮劑であることは、右によつて明らかである。理想はつひに群衆に宗教的情熱を與へるものである。如何に簡單な標語が民衆を左右する力を有つものであるかは、大戰の間の經驗を顧ることによつて納得される。

群衆は不安定な心理の上に立つてゐる。しかし、彼等は一旦行動に出づるや、一定の合理化を要求する。合理化の爲めには、理想の樹立又は標語の構成ほど有力なるものはない。彼等はある標語が巧みに自己の行爲を合理化すると見ると、直ちにこれに吸引される。そして、自己の合理性を信するにいたるのである。群衆が合理化を認める傾向は、彼等の本然ではなくて、單に自己の非合理性を蔽はうとするにあるのである。我等は彼等があくまで非合理的であることを忘れてはならぬ。彼等は單に名目を欲するのみである。——この心理は指導者の着目するところであつて、ここにおいてか、群衆的な標語の構成において正義が頻々と使用せられるのである。凡ゆる群衆は、正義の名のもとに立つものである。しかし、これは勿論一つのからくり過ぎない。彼等は正義を知らない。唯だこれによつて動かされるに止まる。かくの如き名目から群衆を見たならば、我等はここに矛盾極まりの

ない不合理の跋扈を見るのである。宗教的方法や象徴化はその尤なるものである。全くかくの如き幻想によつて如何に多くの群衆が自滅の道に急いだものであらうか。ル・ボンは浩歎した。『文明の發祥以來群衆は常に幻像の感化を受けた。彼等は他の誰よりもかくの如き人々（即ち指導者。——著者）に對して、寺院や像や祭壇を築き上げた。過去における宗教的幻像にせよ、現代の哲學的社會的幻像にせよ、此等の恐るべき力は常に文明の先頭に立つてゐる。この名の故に、カルデアやエジプトの寺院が築かれ、中世の伽藍が成り、佛國革命は起り、凡てかくの如き力の印象を受けない思想はない。これは時として排撃されることもあるが、新しきものが常に後から生じて來る。』ル・ボンは餘りに悲觀にすぎてゐる。しかし、我等はこれが歴史の重大なる一面であることを否定してはならぬ。群衆においては、かくの如き過程が大半を占める。そして、これは社會の自然的な横溢ではなくて、寧ろその恐るべき氾濫であることは明らかである。群衆の多くが、その發端において既に目的を失ふことは、かくの如き原因によるものである。勿論群衆そのものの性質にもよるが群衆の過程そのものが此の弱點を基礎として發展するものであることを忘れてはならぬ。

我等は、かくの如き群衆の研究によつて、世上に横行する理想について、ある内觀を與へられる。それは表面的な名目と實際との不一致である。我等がある時代を特定の名を以て呼ぶことがある。時代精神の如きがこれである。しかし、その時代が眞にその精神を表明してゐるものとは限らない。名目を以て現實を論じてはならぬ。これは重大なる誤謬の根源である。政黨における旗幟の如きもこれに類する。旗幟は旗幟のみであつて、その實體は絶えず變化する。保守黨、進歩黨の如き對立はある。しかし、これも名目上に留まつてゐて、保守黨にして反つて進歩的なることもあり、進歩黨にして反つて反動的なこともある。これはクリステンゼンの論述したところである。『保守黨と銘を打つた政黨でも猶且つかなり進歩的であり、所謂進歩黨なるものも比較的保守的な態度を持つる場合がある。政黨の氣質と其の名稱とは必ずしも一致するものではない。我等は進歩黨のなかに眞正の意味における反動黨をも入れて考へねばならぬ。我等は特に敵愾心のために往々保守黨を指して反動的と稱することがあるが、これは當を得てゐない。蓋し兩者の間には根本的な相違がある。即ち反動黨は進歩黨と同じく現在の事情に不満を抱き、之を改善しようとする

るが、唯だ彼等はまた善惡是非の試験を経ない新しい事情を創成するよりも、却つて從來試験を経來つた事情を復興するのが進歩を期する最善の方法であると考へる點において、進歩黨と相容れないのである。』近時我國において、米國に對してその正義人道を看板とするのを貶す傾向が盛である。しかし、こは我國政客の頭腦が政治の事實を知るの明なきの致すところであつて、政治の現實において、かくの如きは今日寧ろ必然的に見られる一つの現象をなしてゐる。政治がかくの如きからくりによつて妨げられてゐるのが現状である。政治の過程は實際かくの如き障壁によつて正路から隔離されてゐるものである。近世の國家學者マキアヴェリの政治學は君主が如何に政治すべきかの權道を説いたものであつて、このなかには君主を繞る政治家の表裏が委細にわたつて暴露されてゐる。我等は群衆の研究においても之と同一なる暴露を大いに必要とする。この意味において我等は群衆をマキアヴェリの眼を以て分析しなければならぬのである。

七

今右に述べた過程を、最近我國に現はれた米暴動と震災の暴衆について説明しよう。米暴動への序曲は先づ米價の暴騰による不安によつて開かれた。米が我が國民にとつて生活の必需品であつて、その價格の奔騰が彼等に或る不安を與へたことは甚大であつた。政府の政策も此れを緩和することが出来なかつたので、不安は益々濃厚と成つた。かくの如き空氣は、群集を必然的に刺發するものである。民衆は何故かくの如く米價が奔騰するかを疑つて来る。彼等は之に對して表面的な抗議を試みる。抗議してなほ且つその目的を達し得なくとも、なほ暫時民衆は沈黙する。抗議の他には直接行動しか有り得ない。しかし、この方法は人民の直ちに執り得ないものである。こゝにおいて心理的不安が生ずる。意識的な抗議は無意識のなかにかくれて、變形し潜在するに至る。凡てかくの如き無意識的な不満が濃厚となるや、それは導火線の點火を待つダイナマイトの如きものである。機會が來たならば、その爆發を見るのは必せりである。米價暴騰の恐慌は夏以前からのこと

であつたが、八月に入つては益々甚しく成つてきた。こゝにおいて、民衆の心理は表面は秩序的であるが、内面においては亂に向ふの兆があつた。彼等は密かにその指導者の出て來ることを願つてゐた。この時機を看破するは、惘眠なる指導者である。彼等は民衆の要求に最も適當した題目を選び、運動の先頭に立つのである。米暴動の時にあつては、別に題目の選擇は必要でない。それは自づと與へられてゐる、群集の接觸は、自づから準備されてゐた。民衆は各自の要求を確認する十分な機會をもつた。そして、又た彼等はこの要求が全國に一般的であることを知つた。こゝに所謂注意の集中と心理の逼迫感とがある。終に、この充たされない不満の爆發は、富山線魚津の漁夫の妻が米價の値下を米屋に迫るに及んで、第一の烽火を擧げた。そして、一度、この報が傳はるや期せずして各地に暴動が蜂起した。こゝに擴大の現象が生じたのである。かくして、群集は益々傳播して、更に次の過程の深刻化を表現した。如何に暴動が各地に勃發すると共に狂暴化するに至つたことであるか。つひに政府は新聞の記事掲載を禁止するにいたつたのである。暴動の範圍が大であればあるほど、その熱狂はいよいよ強度となる。傾向化の生ずることの極めて早か

つたことも亦、記録の示すところである。誠にこの暴動は我國において近時無比の廣表にわたり、大正における典型的なる群衆現象たるものである。

更に、なほ一例として、近事の關東大震災火災を例にとると、同大震災火災において、群衆的事變として認められるは、鮮人襲來の恐怖に基づく兇暴と、主義者に對する殺害的迫害である。大震災火災時の騷擾は全く群衆の典型的ものであつたといふも不可はない。今群衆過程の發展をみるに、先づその前提なるべき人々の不安は震災の如き異常時に直ちに惹起すべきことはいふを俟ぬ。天變地異は原始人に對して強い恐怖と畏怖の念を生ぜしめた。彼等には天變地異の科學的原因が不明瞭であつたため、之によつて群衆的な混亂に驅られたことは怪しむに足らない。之に比べると文明人は天變地異に對する了解がある。彼等は冷靜なる科學的知識がある。従つて、彼等は原始人よりも、天變地異によつて狼狽せしめられることが尠ない筈である。しかし、彼等と雖も、なほ原始人の如くこれによつて心理に波瀾を生ぜしめられることは非認し難い。天變地異は不測のうちに來る。この偶發性によつて我等は先づ動搖させられるものであるが、更になほ我等は之に對して神祕的な恐

怖を保有してゐる。天變地異の甚しくなるとともに、益々これは其の度を加へて來る。東京の震災は遺憾なく現代人の此の傾向の潜在を明らかにした。震災が起ると、一兩日の中に既に民衆は自己を喪失した。彼等は全く群衆化の兆候を示した。彼等は地震を中心として各々の同一の安危を感じた。この感は人々の間に忽ちのうちに心的接觸を生ぜしめた。ここにおいて、忽ち指導者が現はれる。彼等は民衆の密かに感じ始めてゐたところの漠然たる恐怖に明確な形式を與へたものである。それは朝鮮人の襲來と社會主義者の騷動の噂である。震災當時、私は北陸の某都市に滞在してゐたが、震災が起ると、忽ちにして朝鮮人が市中に放火しつゝありとの情報が新聞に現はれた。避難客の逃げて來た話をきいても、孰れも朝鮮人の暴動を云々した。或者は朝鮮人が放火の最中警備隊に依つて殺されたといひ、詳細にその様子を物語つた。私自身も、この噂が事實において正確なるのみならず、その計畫がなり大きなものではなかつたかと考へた。しかも、震災後にいたつて、確實的な情報に依つて私はこの噂が全然誤つてゐたことを知つたのである。

私自身が微かといへ、かくの如き虚報を信用するにいたつたのは何故であるか。私も

亦ある程度までこの虚報を信じた群集であつたと謂ひ得るのである。若し遠隔の地に在つた私にして既にさうであるとしたならば、混亂裡にあつた東京市民がこの虚報によつて強烈な群集に化するにいたつたのは、蓋し當然である。今にいたるも、なほ虚報の源は不明である。後にいたつて、ある新聞紙は、その情報が横濱地方に起つたものであつて、偶々地震に驚いた朝鮮人の土工が工事から逃げ出したのを見て、近隣の者が彼等が殺戮掠奪を演ずるにいたつたものと誤認したのが喧傳されたのであると報じた。凡そ群集の源を適確に明らかにするのは、頗る困難である。これは尋常の事故についても目撃者の一々の觀察が各々異つてゐて一致してゐないことによつても承知し得る。かくの如き例を以てみると、震火災における大群集において、その發端を明らかにするのは全く困難である。何は兎もあれ、鮮人襲來の噂が現實的に有力となつたのは、既に民衆において彼等に對する十分な信頼のなかつたことを證する。朝鮮併合以來、屢々朝鮮に獨立的運動及び陰謀が起つた。内國人はこれによつて彼等の陰謀性を印銘せしめられ、密かに恐れてゐたものである。その不安が、偶々地震の恐怖と相合して終に收拾すべからざる群集的な輕舉妄動を演ずるに

いたらしめたものではないだらうか。震災とともに、民警自衛團が組織された。かくの如き團體の出現は、かゝる非常時において必然的なものであつたが、そのなかには幾分鮮人に對する恐怖の念も混つてゐたと考へられる。彼等はその組織されるときに、刀劍を携へて通行人を誰何し鮮人を迫害するに至つた。勿論、單に自衛のためのものも多かつた。しかし、その多くは、鮮人に對する脅迫殺害に興味をもつて行人を咎め、種々の質問を試み、朝鮮人であると思れば、直ちに毆打し又は死傷にいたらしめた。イロハをいはしめ、教育勅語を誦せしめるのが、その方法であつた。迫害が益々激しく成つた結果は、つひに政府自ら朝鮮人を保護しなければならぬやうに成つた。朝鮮人で邦人の家に匿れたものは擧げて算へることができなかつた。

鮮人の迫害は更に社會主義者への迫害へと發展した。鮮人に對する恐怖は彼等が市中の混亂に乗じて陰謀を策したといふ想念に基づいたものであるが、社會主義者も此れに加擔したと見、又は彼等が別種の陰謀を弄するものではないかといふ考が生じた。社會主義者に長髪を蓄へるものが多かつたので、長髪を有するものは自衛團によつて誰何せられ、鮮

人と同様の危害を蒙つた。殊に、ここに驚くべきことは、秩序を維持すべき當局までもこの感化をうけ、世人を驚倒せしめたこと、これである。その著しい例は、大杉殺害事件及び龜井戸における主義者暴殺の事件である。大杉事件は、その内容において不明の點がある。大杉を殺害したものは、甘粕某である。彼が之を自己の意志によつて行つたものか否かは判明しない。しかし、兎に角、彼が一般の群集と同様に根據なき主義者叛亂の妄想を抱いてゐたのは事實であらう。彼は、職権を以て大杉夫妻を憲兵隊署に連行し、表面此れを保護するが如くに装ひ、彼等を多數の部下と共に殺害した。しかし、大杉の親戚の少年をも同時に殺したといふにいたつては、血迷つたのも甚しいといふべきである。大杉等が主義者であるとしても此れを殺害するのは不可である。しかるに、少年までを犠牲にしたのである。我等が狂瀾せる雰囲気を出してこの事件を顧る時、ただ群集化の勢の如何に盲目的に激烈であるかといふ實證を示されるのである。更に、これに比すべきは、龜井戸署を中心として行はれた事件である。龜井戸附近の労働者のうち、かねてその主義者の行動によつて警察に嫌惡せらるゝものがあつた。震災が起ると、龜井戸署は彼等を拘禁した。

そして以後つひに解放されることがなかつた。その妻子達がこれを疑ひ、署に赴き陳情し懇願するに及んで、僅かにその死體のあるところを指示された。ここにおいて、彼等の虐殺されたことが判明するに至り、一時喧しい問題となつたが、警察は彼等の反抗を口實として自己の行爲を正當化するに努め、つひに有耶無耶の裡に事は終つたものである。この行爲も亦た甘粕某の其れと同時に、當局に關するものであるから、特に注意されなければならぬ。官憲と雖も、通常の人間であるといへば即ち止む。彼等の公安維持の任務から考へたならば、かくの如き群集的行爲は全く言語道斷である。また以て如何に群集化の傾向が強烈であつたかを窺ふに足るのである。

凡そ此等の事件の發展を見るに、最初は僅少なる示唆があるのみであつた。鮮人襲來及び主義者蜂起の流言が、つひにこの大渦を生ぜしめたのである。此等の標語が如何に人心に投じたものであるか。震災の群集はこの標語によつて形成せられた。そして、その危険は、やがて事態の鎮靜するまで繼續した。我等は震災の記録を読む時、義勇的行爲にも際會するが、これを以て凡てを蔽ふことはできぬ。自警團の働きを以て感謝に値するとなし

た人もある。しかし、彼等が一方重大なる錯誤に陥いつたことは明らかであつて、この點を外にし徒らに讚美論を弄するのはとるべきでない。ある避難客は語つて、曰く、「民警團があつて人々を誰何するので、反つて危険です。彼等は武器を持つてゐるのですからね。間違つてやられたらそれ切りですよ。民警さへなけりや少しは安全に歩けるのですが。」と。一方これを喋々と推稱するものがあるに對し、私はこの言に眞理があると考へる。若し無批判的に自警團の殊勳を云々する人があるとしたならば、恐らく彼自らその一員として活動せる結果、自己辯護に墮したものでなければならぬ。

今この二つの群集運動を見るに、群集過程は歴然掌を指すが如くに現はれてゐる。その擴大、深刻化、傾向化の律調はそれぞれ多少の差異はあつても、孰れにも示現されてゐる。更にこの過程を中心として、指導者の活動及びその活動の手段が、如何に行はれたかを考慮することも出来る。斷言及び繰返しの方法の如きは勿論指導者の使用したところである。その他標語の象徴化や宗教化についても考ふべき點が多い。群集は既に自己の心に向いた題目には甚大の關心を示し、更に宣傳宜しき場合には直ちにその關心と係はりある題目に

惹きつられる。指導者は、荒唐無稽な事實を巧みに論理的に装ひ、民衆の恐怖心に成形を與へる。——この例は、特に震災において顯著なことであつた。米騒動の群集化にはある論理あるが、震災時のそれは全く群集的にして無論理である。

群集の過程は、指導者と群集とが渾一化して生み出す一大奏樂である。今、兩者のうち孰れが重要なかをここに決定することは不可能であるが、指導者の役割の重大なことは明らかである。指導者がなければ群集は成立しないといつてもよい。標語や象徴化は、皆これ群集指導者を俟つて初めて有効に作用するものである。群集の過程は常に指導者を要素とし、あらゆる手段、方法の如きも、兩者の間において發生するもののみである。

八

この他群集の過程については瑣末の點においてなほ述ぶべきことがある。我等は多くの著者によつて與へられた群集成立に關する方法や注意を知る。群集における演説の範圍の限界等も問題たることを失はぬ。これに對して身振りを勧めるものがあり。更に、直接的

方法に對し、間接的方法をとくものがある。これは群集に演説するに當つて、直接的に斷定しないで、間接的にその心を懐柔する方法である。屢々引用されるが、アントニウスがシーザアの屍衣を携へて試みた演説の如きは、其の妙極致にいたるものがある。彼は自分が必ずしもブルタスに反對しないことを繰返した後に、徐ろに民衆の心を自己にひきつけゆく。——「おゝ諸君よ。若し自分がかりにも諸君を煽動して憤激せしめ、反抗の念を起さしめるやうであると、これ取りも直さずブルタスを傷つけ、カシヤスを傷つくることとなるが、彼の人達は諸君の御存知の通り、公明正大の人々である。自分は彼の人々を傷つくることを欲しない。自分はあのやうな公明正大な人々を傷くるよりは、寧ろ世に亡き者を傷つけ、自分を傷つけ、諸君を傷つけた方が當然と思ふ。併しながら、此處にシーザアの捺印を経た一葉の書面がある。即ち彼の遺言狀である。」茲に至つて、彼は猛然としてブルタスに鋭鋒を向けるにいたるのである。

これは演説における間接的方法の例をなすものであるが、他方においてまた物品提示の效果を示すものとも考へられる。血痕のあるシーザアの衣服はよくアントニウスに反對の

人々までを自己に左袒せしめた。群集は自己が捉へられることを意識するのを欲せず、若しかくの如き態度を以て迫つてくるものがあつたならば、これを反撥して斥けるであらう。彼等は靜かに捉へられることを欲する。従つて、敢然たる高壓の手を用ひるのは、尋常の人の能くするところではない。茲において、群集の指導者は強制者と代表者に分れる。群集を使役するには、強靱な鞭か、柔らかな眞綿が必要である。

更に群集の興奮を絶頂に達せしめ、又は此れを維持せんが爲めに、音楽の用ひられて效果のあることは、普く認められるところである。コンウェイ曰く、「音楽は群集を糾合せしめ、これにある原始的形體と共通の感情を賦與する最も容易なる動力である。音楽隊のあとを歩む人々は既にその完全なる一員と成つてゐるのである。彼等は同一體の感を有ち、その音楽の作用する限り、動いて行く。かくの如くであるから、軍樂隊が軍隊の補助的機關として有效なのである。キツプリングの言つたやうに、音楽は記憶を再生し、聯合を促進する。それは人々の心を他のいかなる訴にも勝つて開き且つ結ぶものである。……賢明にして共感的な樂長は、軍隊を意氣沮喪から救ひ、その傷めるを鼓舞し、忍ぶべからざる

困厄の際に元氣を恢復せしめるものである。」音楽の効果は、軍隊の如き最も群集精神の必要なる團體において重要視せられる。都會もまた此の應用に努めてゐる。ある宗教家は「音楽がなくてレヴァイヴァルはない。」といつた。「讚美歌は説教者の勸告の準備をなす。實業家が教會に来るや、彼等は、世俗の瑣事に憑かれてゐて、説教者の教訓を毫も聞きとることが出来ない。全くこの憂を忘れさせるものは、讚美歌である。半時間の讚美歌は、集會を一體に結合して了ふ。——集會における讚美歌の合唱は、レヴァイヴァルにおいて最も價値のあるものである。」

ル・ボンが民族を重視する學者であつて、群集の如きも民族によつてその發現の態様が異なると述べてゐる。彼のかくの如き見解は、その群集の特性を説く場合に現はれてゐた。彼は殘忍性について各民族の群集が特異の様相を呈するものであることを述べてゐる。ラテン民族は特にその度が甚しく、アングロ・サクソン民族においては、その度が低いとなすが如き類である。此の立場を以て見んか、群集の過程のごときも、民族によつてその成立に相違がないであらうか。私は、多少の程度ならば、これを認め得ると考へる。しかし、

各民族のうちにおいて、群集化的誘因の存在が同一である點から見ても、大體その過程の同様なべきことを主張したい。原始的生活を送る未開民においては、その差が大であらう。彼等は特に孤立的である。しかし、彼等においてもその軌道は大體において同一であるのみで、みるべきである。私は唯だ文明人においてはこの過程が益々巧緻に赴く傾向があるのみであるとする。一般的にいへば、社會が資本主義的と成るとともに、群集も亦、その感化によつて、比較的商人的となるものではないであらうか。即ち豪宕なる指導者を要求しないやうに成るのではないか。しかし、この一般的傾向を除いて、各民族において一般的過程の例外的な事象が存するものであるとは、支持され難い。

群集の問題

第五章 群集の淵源

群集は社會的形式を藉つて發現する現象なるにも拘らず、その目的は反つて社會の秩序を動搖せしめる傾向がある。群集は人間の單なる社會本能の發現であると計りみる事ができぬ。群集は、その由來をさぐるに、個人において群集化せざるべからざるある必然性があつて發生したものの如くである。かくの如き現象の成立するには如何なる原因が存するものであるか。ル・ボンはその著書においてこれの答解を試みはした。彼は、併し寧ろ群集が如何にしてその新しき特長を帶ぶるに至るかを論じてゐるのである。彼の答解のなほ群集そのものの發生する所以に觸れてゐないことは、左の文句によつて明らかである。「種々の原因が群集に特有な特長の出現を決定する。第一は、群集を形成する個人が單

に數的な考慮からして打ち克ち難い力の感情を得て、そのために個人だけの場合には彼が抑制してゐるであらうところの本能に彼が支配されて了ふことである。彼等は無名的であり、結局は無責任であるが故に、個人を統御する責任感は一層容易に消滅するであらう。』

『第二の原因は、傳播である。これは又、群集において個人の特長の現はれるのを妨げてその傾向をも妨げる。傳播は直ちに生ずるが説明するに困難なことである。それは催眠的狀態の現象に近いものであるとせねばならぬ。群集においては、あらゆる感情と行爲は傳染的である。そして、個人は直ちにその私的興味を集合的興味に獻けて了ふのである。これは社會の本性に反した傾向である。そして、これは人間が群集化しない限り不可能なことである。』

『第三の原因、これは最も重大であるが、これは群集の個人に對し時として個人のそれと全く反對の特長を決定するのである。私は暗示にかゝる性質を指してゐるのである。これは前にのべた傳播と効果を等しくする。』

ル・ボンの與へた説明は、群集的特長の成立を説いてゐる點において謬りはない。しかし、これを以て群集の成立する所以を説くことができるであらうか。群集のなかの個人と然らざる場合の個人との相違を生ずる所以については、右の如き條件が必要とされる。しかし、これは彼等が主として群集といふ集合體において變化を蒙ると説くのみであつて、これを以てしてはまだ群集の淵源を十分観察することができぬ。此等の條件は群集と成つた個人の新特長、即ち群集の結果を説くが、彼等が如何にして群集的行爲に出づるに至るかといふことに至つては、即ち其原因に至つては終に明らかでないのである。

多くの學者は群集の成立以後に主點をおいてゐる。彼等は群集以前の狀態を考慮しない。この故に群集なるものの社會的起源が不分明にされるのである。我等は群集が社會的現象である以上これをその平面において眺めねばならぬ。群集前の社會とは即ち群集前の個人のことである。我等は個人の社會的生活の一般を吟味しなければならぬ。之は個人が精神的に異常を呈した場合にも、その直接的にみえる原因を穿鑿せずして、彼の身體的構造の本來を分明するのが徹底的であるのと同然である。ル・ボンにして既にその出發點を十分

適當に決定してゐないのである。抑も我等が社會的生活を營みつゝ、何故に群衆といふ永續性のない反社會性をおびた結合を現出するのであるか。私は思ふ。それは社會が個人に課した條件の反射作用によるものであると。社會はその存在するために必ずしも成員の意欲をそのまま承認するものでない。社會は一の規約である。それは、或ものを禁遏せざるを得ぬ。これ社會統制の本來の職分である。種々の規範は、この統制の目的の爲めに存する。此の統制はしかし吾人に或苦痛を與へる。それは我等の棄て得ざる強き欲求をも抑遏するからである。ここにある不滿の情が生ずる。私は、かくのごとくして抑へられたる欲望が社會に潜在して、其れが自爆して自己の充足を圖るにいたり、ここに群衆の現象が出發すると考へる。社會にはかくの如き氣が抑へられたるまゝに漂つてゐて、之が存するために、個人は、その力に押されてある變則的な結合を作り、その間接的な實現を圖らうとするのである。私はこの淵源を究めないでは、群衆の本質そのものの理解が皮相的に了るものであると見る。

群衆が抑遏された感情を基として生成することは、重要である。しかし、この感情に着

目することは今まで學者の閑却してゐたところである。何故かといふと、かくの如き感情は決して表面に暴露したものでない。それは我々の心の底に蠢動してゐる。それは我等の意識の十分届かないものである。コンウェイ曰く、「これは、科學が漸く道を探し出した漠たる領域である。しかし、漠とはしてゐるが依然として眞實な此の領域において、あらゆる群衆の現象はつくり出されるのである。ここに群衆を支配する力がひそんでゐる。そこにそれは生について漠たる意識をもつ。そして、この未知の土地が天才的探險家によつて啓明されたならば、群衆生活及び其の他多くの事物の祕密がいつか暴露されることがあるかもしれない。」全く、コンウェイのいつたやうに、この未だ學問的に検討されないところに、群衆の本質を開く鍵鑰がひそめられてゐるのである。

群衆の根源をなすものは、その心理にある。しかも、この方面については、例へばルボンの如きにおいてさへ、僅かに暗示しか與へられてゐないのである。群衆の發生する根源を明らかにしたものは、誰であるか。我等はこれを近時にいたつて初めて出現した精神分析の功績に歸しなければならぬ。實に、群衆心理における新生面は此れによつて開かれた

といつてもいゝのである。何故ならば、その心理分析によつて社會人が群集人化する所以、即ち、必然性が明らかにされたからである。彼等は、群集化の原義が人間の抑壓された欲望にあるとし、これを暴露することに努めた。その中心は無意識なるものの内容を闡明することに關してゐるのである。無意識とは何ぞや、又これによつて如何なる説明が群集に與へられるものであるか。

無意識なる文字が群集論に現はれたことだけから言へば、既にル・ボンの著作を示すことができる。彼は、群集が無意識であることをその特長であるとさへみだ。彼が無意識を注意した言葉と見るべきものをあげると、『これについて一定の概念を得るためには、先づ近世心理學によつてつくられた眞理、即ち無意識的現象が單に有機的生活のみでなく、智力の發動においても有力な役割を演ずることを想起しなければならぬ。心の意識的生活はこの無意識的生活に比べてみると意義が小である。最も犀利な分析者、最も鋭敏な觀察者さへ彼の行爲を決定する少數の無意識的目的を發見することはできぬ。我等の意識的行爲は主として遺傳によつて心の裡に創られた無意識的な下層の成果である。此の下層は時

代から時代へと傳へられた無數の共通の特長から成る。これは種族の精神をなすものである。我等の行爲の表面的原因のうしろに疑ひなく我等の保證しない私かな原因が横たはつてゐる。これらの私かな原因のうしろには更に我等自身の無視してゐる更に私かな原因がある。我等の最初の行爲の大部分は我等の氣のつかないかくれた原因の結果である。』

彼は明らかに『無意識なる下層』の存在を認めてゐる。そして、ここに我等の行爲の私かな原因がかくされてゐることを説いてゐる。彼は群集が個人の集合でありながら、頗る個人とはことなつた性質を示すことを論じ、『群集を形づくる個人が如何に孤立した個人と異なるかといふことは證明することが容易である。しかし、此の相違の原因を發見することは困難である』といつてゐるが、彼は敢へてその困難を屈服しようとして、無意識なる現象に解決の鍵を求めたわけである。彼の着眼は決して凡てであるとはいへぬ。

しかし、彼は之を無意識であると論定しながら其れ以上に進んではゐない。反つて、無意識の説明にいたつては、彼は當然見るべきものを見逃し、又は説明すべきものをすて、他を見てゐる。無意識なるものは何であるか。彼はこれを以て種族の精神と看做してゐる。

るのである。このことは、更に、彼のつゞけていふところによつて明らかにされる。「種族の精神を形づくる無意識的要素については、種族に屬する個人は相互に類似してゐる。一方、彼等の性格の意識的な要素については、彼等は相互に異つてゐる。」種族の精神なるものは其自身何をも説明せぬ。これは新たな問題の提出に他ならない。ル・ボンは要するに群衆論を提出はしたが、此れを十分解明したものは許し難いのである。これは彼を責めんがための言ではない。彼としては、他の何等暗示もなき時代に兎も角無意識に着目しただけでも一つの貢献である。

我等が群衆を知るに不可欠な無意識について何等摸索することのできなかつたのは、我等の心理を研究する學問においてすら、この方面が今迄等閑にされてゐたからである。心理學もその最初においては必ずしも無意識的方面を認めてゐなかつたものでない。だが、自づから其れはその研究の範圍を意識の方面のみに限界して了つた。心理學は意識研究の學と定義されるやうになつたのである。群衆論がこの心理學の傾向によつて如何に不利を蒙つたかといふことは察するに難らぬ。然るに、最近にいたつて新しい傾向が生じてきた

のである。それは、心理學の對象を單に意識のみに限らないで、更に意識外の現象をも取扱はうとする傾向である。タンスレイは、その心理學の冒頭において新しい學の研究内容について最も適當な要領を與へてゐる。彼はその理論において、意識よりも寧ろ無意識の方が重要であると認めてゐるのである。「半意識的な又は無意識的な心的過程の觀念は、多くのものにとつて習熟されてゐないが、極めて重大である。」「新心理學は人間の心を高く發達した有機體であつてその所有者の必要にびつたりと適當したものと考へる。しかし、それは時として急速なる變化に際しては適應性を完全には發揮し得ない。其の最も根本的な活動は非理性的であつて、大部分無意識的な活動である。意識的理論の力は後におくれで發達したものである。その役割は小さい。最も進歩した人間においても、それは本能や情緒欲望等の建築の上にかく作られた表面にしか過ぎない。多くの場合理性的活動の表面的な重要さは、幻想的である。それは深く根ざした本能と欲望の行動の外被にしかすぎぬ。』

私はかくの如く見て了ふのを一つの僻論であると考へる。私は意識的力を特別に輕視し

ない。しかし、これまでの一般の心理學において此の方面の意義が全く望まられなかつたことから考へて、この立場の更新には賛成を禁じ得ない。我等の生活にはなほ意識的構成として理解することのできない部分が多いからである。我等の群集起源に對する解明もここからして始まらねばならぬ。かくして初めて群集と社會との關係も明白にされるのである。我等の心の組織とその勢力から群集と無意識の關係へ。我等はこの線に従うて説明を加へなければならぬ。

二

我等の心の組織において、先づ考慮すべきは本能である。これはマクドガルの所謂『ある種に共通なる遺傳的なある傾向』である。此れは人間のあらゆる活動を驅使する力である。此等の力は更にコンプレクスを作る。それは複合して心的要素の網をつくり以て我等の心を形づくるにいたる。『コンプレクスは複合せる心的要素の組織である。その何れでも刺戟されると直ちに全體のコンプレクスが喚起される』仕組になつてゐる。自然的本能と

關聯せる此等のコンプレクスはポテンシアルな力を包蔵してゐる。例へば性のコンプレクスの如くである。それは尤も大いなるそして強き勢力的力をもつ。『大いなる自然的コンプレクスに生具した心理的力に對しては、リビドなる語を用ひるのが便宜である。』かくの如き心的勢力の存在は精神分析一般によつて認められてゐる。此のリビドは如何なる作用をなすものであるか。その活動の状態は、タンスレイが比較してゐる如く、水の活動の如くである。『本來地位のポテンシアルな勢力をもつてゐる水は、河床に沿うて動く。……其の流が障碍で妨げられた時には、水は堤をこえて新しい源を作る。この堤さへなくば動的な力として活動すべき力は、ここでポテンシアルなものとし止まる。そして、たえず後の方から水を受用する。此の堤を破ることができないと、終に水は流れて了ふ。土地の構造に従つて水は或ひは他の現在の流れをとるか又は新しい行路を自ら作るか、でなければ廣くのびて比較的沈滞する。最後の場合、力は消滅したのではない。唯だ一時的に無力となつたのみである。』

リビドの作用もこれに類する。それは、水の行程に従ふが如くコネーチブな流に従つて

動くものである。しかし、もしこれが妨げらるゝや、リビドは、そこに止まりながら益々強き力を支給されてくる。しかもなほ障壁を除去し得ずとせんか、リビドは隣の流れに入るか、又は自ら流をつくるより他はない。この流れも不可能に了つた場合が想像される。此の場合には我等の特考へねばならぬところである。リビドは常に充足に向つて動く。しかし此の充足を得ればそこに平衡がある。しかし、此の平衡は一時的である。力は更に糾合せられその發出を求めるのである。かくて力の緊張とその發出との間には一つの律調がある。此の律調にむらのない場合、心理状態は健全であるとされる。

かくの如きリビドのうち、フロイドは「性」を重要視し、アドラーは「自己」又は「權力意志」を重要視してゐる。此等は孰れも我等のコンプレクスの中で重大なものであるが、これを以て全般の理論をとくのは偏倚的であり、又た餘り必要なこととは思はれぬ。我等はかうしたリビドが重要であることを認めつゝも、ここでは此れを論ずるの要がないと信ずる。我等は凡てのリビド、心的な力——といふものをその特性如何を問はないで一般的に論じてすむのである。

右の力が種々の作用を営むべきことは明らかである。殊に、その餘剰とか、又は抑壓されたものが、餘剰の場合にはサブリメーションの現象が生じてくるが其れは此處で説かぬ。問題とすべきは、この抑壓の場合である。此の抑壓の生ずる原因は、種々あるであらう。力其れ自身の内在的原因に基づく場合もあるかも知れない。併し、結局我等にとつて最も問題となり又た抑壓の大きな原因をなすものは外的障壁である。此の障壁は、自己によつて與へられるやうにみえるが、實は社會の理性に依るといはねばならぬ。社會はその存続の必要上、リビドの發動に對して多くの指揮及び命令を行ふ。社會が價值的であるといふのは茲にある。これはリビドが完全にそして公正に作用し得るのを目的とする。しかし、然らずして、リビドの抑壓さるゝが如き事情も生ずるのである。抑壓された欲望は、無意識のなかに沈降しそこに潜在する。この退却(リグレッション)は、リビドが現實に對して適應することのできなかつた失敗を示すものである。此の退却は、あるひはコンプレクス相互の闘争に基づくものとみてもいい。ニイチエは心を以て本能の統監部にたとへた。この統監部は時として結合することがある。しかし、時としてそれは相互の間に軋轢を生じ

得ないでもない。かうなると、その中の孰れか一つが屈服しなければならぬといふ結果を見る。抑壓はここに生ずる。この見解も抑壓の説明として妨げはない。兎に角、抑壓されたる本能が無意識なるものの内容をなすものであることは同然である。しかも、此の過程はフロイドによつて初めて正當に注目せられ、又た闡明せられた。

タンスレイ曰く、『抑壓の規制は、他の心の内容から邪魔なコンプレクスだけを切り離して、それが意識に上る事のないやうにするにある。此の抑壓の過程は其れ自身多くの場合無意識である。——コンプレクスの心的要素は全く忘却される。——しかし、忘却は時としてこれを全く心から放逐しようとする努力を惹起することがある。抑壓されたコンプレクスは破壊はされぬ。その生命あることは後に分ることである。それは直接意識の内へ出ることは許されぬ。その發現は間接的であり、象徴的であり、屢々不思議にも歪められてゐる。』と。又たマルチン曰く、『心理學で用ひられる無意識といふ語は心的活動の缺如を意味してゐるのではない』と。無意識も又た一つの活動である。そは沮まれたる力として絶えず何れの方向にかその充足を圖つてゐるのである。

かくの如く抑壓されたリビドの發現は様々の様式をとる。夢とか其他——。此等を、我等は、社會的に考へて、正常的なものと異常的なものとの二つに區別できる。その區別は何處に立てられるのであるか。正常な場合とは、抑壓されたリビドが適當なる通路を経て發現して了ふことである。結局それが社會の眼からみて何等障碍なき場合である。此れに對して異常な場合とはそれが個人の單獨な勝手な方法によつて行はれた場合である。我等は、日常の生活において如何に多くかくの如き抑壓せられた欲望の發現を夢や其他において試みてゐることであらうか。その多くは正常的と看做さるべきものである。勿論この區別ははつきりとさせるわけにはゆかないが。

此等のリビドの發現の方法のうち、マルチンは『相互に相互的要求において時々妥協を行ふ方法』なるものの存することを擧げてゐる。『抑壓の力はその際ゆるめられる。社會觀念の意義における無意識の變化に依つて、かうした變化は勿論相互的であり無意識でなくてはならぬ。妥協のメカニズムは神経病と同様な目的に仕へるために形成されるだらう。神経病におけると同様に、思想と行動は、ある目的の爲めにはその一部分としての役目を

なすかもしれないが、強制的と成り象徴的となり、定型的となり、多少全體としての社會の要求と相拮するであらう。多くの無意識の特長はここに出現し、それは神經病のそれとある點において同一であらう。これこそ群衆において發現することである。云々。』

マルチンは此の故に『群衆心とは、むしろ、夢、幻惑、及び種々の自動的な行爲と共に分類すべきものである。』と述べてゐる。そして、彼の群衆の解釋に試みたところは最もその本質を闡明するに適してゐる。彼はいふ。群衆の支配的觀念は、反省又は暗示の結果ではなく、コンプレクスなるものの結果である。それは常に無意識において抑遏されたあるものと關聯してゐる。それは社會によつて抑遏されたあるリビドが、間接にその目的を充足せんとする妄動である。それが社會的な形式をとるのもその一つの幻惑にすぎぬ。群衆は似而非社會的である。『もしも社會組織が實現し得べき善の成就の手段とみるべきであるならば、我等の群衆と呼ぶ行爲は、直接社會の成長でなくて、あらゆる心的内容が社會的意義をもつといふ意味において社會的なるのみである。それは寧ろかくれたる力の結果である。この力は單に一種の社會的集合によつて解放されるのみである。』

制度的な不正、其他の抑壓によつて蓄積したリビドは、抑制せられたまゝに充足の機を俟つ。群衆はその最も大仕掛であり、また効果のある發現である。彼等の實現せんとする欲求は社會からは病的なるものとして拒斥される。それは社會的に如何にして發現するか。それは何等かの手段を以てその欲求の實現が社會の要求と拮するなきものたらしめなければならぬ。群衆はこの條件を適當に充たすものである。彼等の欲求が社會的に承認を得ることは不可能である。その觀念において社會的承認を得る形式を藉るためには、彼等が一つの社會を形成することが必要である。自己の周圍に一つの社會をつくれれば、乃ち彼等の觀念はこのなかにおいて社會的承認あるものの如くに考へられる。同時に多くの人々によつてある思想が把持されることは、結局その思想的に承認を得たるが如き形式を與へるのである。勿論群衆の作り出すこの氣休め的な社會環境は要するに虚偽である。従つてそれは社會の形式をとり乍らこれを寧ろ破壊するところの力と成る。群衆の成立がかくの如き機制に基づいてゐるとすると、それが病的な要求満足の手段であるといふ斷案は必ずしも誤りとはいひ難い。此れは、マルチンによつて證明されてゐるところである。

「我等の原始的本能の抑制を要求するのは社會である。だから、無意識は自己の原始的要求を實現せんがために社會を藉ることが有り得る。ここに個人には全く反社會的に自己の内に沈潜して了ふデメンチア・ブレコリスの如き心的異常性がある。群集において原始的自我はその望みを社會の一部分の承認を得ることによつて達成する。直接の社會的環境は凡て無意識的要求と同一の方向に吸引される。同一の無意識的本能は群集の各員を動かす。恰かも直ちに無言の協同が出来上つて、各員は、他において同一の事を認めるといふ條件の上で自己の恣な行爲を營むことができる。我等の通常の社會意識は、もし意識的な場合には殘虐の發揮に反對するであらう。——我等の隣人のみならず、自己自身も。だから、本能は此の際假裝しなければならぬ。」

群集を社會といへば確かにそれは社會である。しかし、それは社會を作り乍ら他の社會に隔絶する。それは、社會のなかに別天地をつくるものである。群集は社會のうちに隔絶を作るものとみるべきである。既に一定の人々が群集の障壁を作つて以て外の社會と隔絶し、内において全く萬人共通の欲求の方向を満足せしむるに足る環境を作ることは、誠に

我等の納得し得る所である。——かくの如き工夫は勿論十分意識されて行はるゝものではない。全く自然にある條件によつて刺發されるのである。而して、この際如何なる組織が生ずるかには既に説いたところであるが、我等は、群集化のために常に右の如き條件を完成するに役立つ種々の畫策の講ぜらるゝことを見るのである。密閉された部屋、閉塞された山間において特に群集が発生し易いとされるのも一にかういふ場所において群集が他の社會から遊離して一つの單位たるかの如くにみえることが容易だからである。包圍された都市における群集現象を考究せばかくの如き事實は無數に供給せらるゝであらう。ある化學者が教室に學生を集め、化學の實驗をなすといつて、あるフラスコの蓋をあけ、ここにある氣體が入つてゐるが、その句を感じるかと聞いたところ、つひに一人答へ二人答へ、悉くその句をかいだと告白した。しかし實際教師はその中へ何をも入れなかつたのである。これは彼等が事實ならざる環境を作り、又は認めて自づと一つの社會をつくつたものである。かくの如き虚偽の環境は群集にとつてはなくてはならぬものである。レヴァイヴァル其他の場合において如何に群集が容易に虚偽の環境を作り易いかといふことはここに説くを

要しない。思慮的な集會が群衆化し難いといふことが屢々説かれるが、その理由は一に個人
の思慮が明晰なため彼等の四圍に虚偽の環境の生ずることを全く斥けて了ふからである。

三

群衆は社會によつて統制される個人において、何等かの機會に生ずる抑制が爆發したもので
であると見ることが出来る。個人の無意識は個人に種々の心理を生ぜしめるものである
が、これと同じく群衆においてはこの無意識が集合的に發現してそこに群衆現象を生ぜし
める。個人的に無意識の發現する場合にせよ、然らずして集合的に發現する場合にせよ、
この根柢をなすべき無意識の内容にいたつては大差ある譯はない。孰れにおいても、社會
の監視又は抑壓が重大なる役割を演じてゐるのである。

唯だその抑制の内容については、私は二つの種類を認める。そして、この分類は社會の
本來の性質に基づいて生ずるものである。一つは正常的な抑制であり、一つは不正常的な
抑制である。この區別は社會の統制が、社會的である他に、然らざる要素を含むところか

ら自然と起るのである。社會が社會人のために存在すべきことは一つの公理である。しか
し、この公理が實際實現されてゐるとは見てはならぬ。現實の社會を検討するに、社會は
反社會的な統制を敢へて行つてゐる場合多きを見る。それは政治上においても經濟上にお
いても目撃される。社會統制においてその方向は統制者の階級的又は身分的地位によつて
決定さるゝ場合が頗る多い。かくの如き事實は、極めて時代遅れの頑迷者に非ざる限りは
當然認容することであらう。既に統制においてこの二つの要素が加味せらるゝとせんか、
それが個人に對して及ぼす結果の抑制においても亦、これに相當する二つの種類の生じ得
べきことは明らかである。私は社會的意味において抑壓された統制を正常的と考へ、然ら
ざるものを不正常的と考へたいのである。これを現今の社會について考へてみるに、我等
の内心にある原始的欲望、殺人其他の欲望、決闘を行はうとする欲望などは、本來抑壓さ
るゝが寧ろ當然のものである。故に、これらの統制は正常的とみねばならぬ。これに反し
て、例へば選舉權の限定とか經濟的資源の缺乏によつて不平等の結果をうるに至るべき社
會的統制の發生があるとせんか、これらは社會的統制に非ず、その統制は階級的立場に出

づるものなるが故に、不正常なる統制であると考へねばならぬ。

統制の内容に關する右の如き區別は、群集への對策を考へるに當つて必要となる。多くの學者は、この點を看過してゐる。そのため、對策を講ずるに至つて、彼等は我等に不満を與へざるを得ぬ。群集現象の發生において無意識的作用の重大なることに着目し、最もよく之を説いたマルチンの如きも、此の點には考へ及ばないものがある。「文明人にあつて、社會關係は個人に重大なる要求を課する。原始的本能、放逸なエロチズム、錯行への傾向、及び反社會的な欲求は、常に抑へられ、抗拒せられ、支配されて社會的に有益な目的へと變更される。我等の内にある野蠻人は「抑制」される。その欲望は不斷に抑壓されてゐる爲めに、我等は終に意識的な努力なくしてそれを統制するやうになるのである。我等は單にこの嘯み附くが如き欲望に着目しなくなるだけである。我等は我等の生れつきの欲望を犠牲に供することによつて、社會の普通の成員と成ることが出来る。しかし、我等の内の原始性は容易に死滅しないのである。」彼は統制は悉く社會的なものであると考へてゐる。彼は社會的統制の不正によつて生ぜしめられた抑制の存することを不問に付し

てゐる。我等は原始的欲望が抑制さるゝ場合多きことを否定はしないが、この他に社會的欲望自身さへ抑制さるゝ場合のあることも認めねばならぬ。社會統制の作用によつて原始的欲望が抑壓されてゐるといふ場合のみは一般的であるが、他の場合は階級的である。此の理を闡明しておくことは後の説明のためにも必要である。

抑制なるもの即ち無意識が群集の淵源をなすものなることは既に明らかになつた。かくの如き内心の要求的空氣がないならば、如何なるチャンスが來たにしても群集の成立することはない筈である。群集は人間の社會生活と表裏をなしてゐる。それは文明の凋廢せざる限りは存続するとみねばならぬ。文明が實に群集をうむものであるといへるから。抑制の解放は種々の方法によつて行はるゝものであつて、日常の個人的表現においては幾多の種類がある。夢や白日夢、さては機智の如き皆その例としてあらはれる。勿論抑制されたリビドは決してこのまゝの形式をとるといふことはない。結局それは假裝する。その假想は多くの場合現實を根柢とした一つのフィクションであつて、その意味で危険性をもたぬともいへる。しかし、決してさうとは限らない。それは、時として異常的と成るのである。

ただ群衆においては、それが集團形式を執つて社會に迫りくるが故に、危険性があると認めざるを得ぬ。もし群衆が夢の如きものなりとせば、これを以て社會的危険性があるとはいひ切れぬ。私は抑制に對する報償としては群衆が夢に似るが、これとは大分趣を異にするものと考へる。私は此の點において、マルチンの意見に反對する。同氏は夢と群衆を同一にみようとしてゐる。そして夢を以て不正常のものともみてゐるやうである。……

報償それ自身は絶對的に非難すべきものでない。問題と成るのはそれが群衆において異常的な形式に發現することである。個人的の場合、リビドは固定してつひに社會との戦を演ずることになる。ここにおいて神経病の症状が起るのである。群衆は、此の本能に對立する社會を自らの内に埋没させて了ふのである。即ち、これは神経病の一變型である。自己の創造にかゝはる社會によつて自由が與へられる結果、彼の本能はもはや抑制を免れるのである。群衆の成生する基礎はここに明らかにされた。群衆はこの他いろいろの要素をもつ。それはこれを率ゐるで以て私の目的を達成せんとする指導者によつて色々の色彩を與へられる。そのため群衆は一定の目的をもつものの如くに考へらるゝことがあるが、さう

ではない。群衆は指導者の指示に従ひ何處へでも動いてゆくことのできるほど單なる報償の動物である。群衆は唯自己の抑制された本能に何等かの形式で充足の機を與へればよいのである。

四

以上説き來つたところによつて我等の概念を更に明らかにする地位に到達する。通常群衆の定義としては、心的傳播に基づく一致を示す人民の集團といふ解釋が多く使用せられた。此の解釋は我等を納得せしむるかの如き觀があるが、果してさうであらうか。心的傳播を第一とし、そこに一致が生ずるものと見るのは、逆なのではないか。一致があるが故に、心的傳播があるのではないか。理論とか類似心情者の結束に基づくものではない一致は、模倣や心的傳播に基づくと解釋するのが便宜である。しかし、模倣や心的傳播が然かく容易に生ずるのは更に本能とみるべきものであるが、余はその根柢に抑制されたリビドがあると見る。暗示や被暗示性が群衆において問題たりうるとしても、それはなほ最後の事實

ではない。フロイドの群集論への貢献は要するに長き間群集心理に君臨してゐた「暗示」の支配を拂ひのけた點にあるのである。

タルドの「模倣」、マクドガルの「情緒の原始的な感應」、ル・ボンにしても、個人の相互暗示と指導者の威嚴をあげてゐる。しかし、これらは群集成立の過程に表はるゝ要素かもしれぬが、群集の眞の原因ではないのである。更に深く掘ることが必要である。フロイドの功はこの一點を指示したところに存するとみねばならぬ。

しかし、我等は彼の教ふところを悉く受け容るべきか。私は彼の群集論への貢献を大であると思ふが、俄かに右の如く考へる事は出来ないのである。何故であるか。その抑々第一は、彼において、群集なる觀念が極めて廣大に使用されてゐることである。彼はその著『群集心理と自我の分析』において、群集論をル・ボンの説に準據して述べてゐるが、その定義は社會と殆ど同一である。彼は群集と個人との問題でなく、社會と個人の問題を論じてゐるのである。煩はしい群集の概念である。彼はあるところではル・ボンと同じ意味に群集を解しつゝも、後にいたつて『群集といふ言葉には非常にちがつた多數の組成物

が混和されてゐるから、これを區別するを要する。シゲールやル・ボン其他は須臾的なある利益によつて急速に結合された種々の個人から成る短命な性質の集團を眼目として説いてゐる。これは革命的な集團、特に佛蘭西大革命の集團の特長が彼等の敘述に影射してゐるのに基づいてゐる。此れと反對の見解は、社會の制度に具現された人類生活の基本をなす固定的な集團又は團體を眼目としたものである。前者の後者に對する關係は表波の底波に對するそれと同じものである。』といひ、前者を以て自然的本原的な群集であり後者を以て人工的な群集であるとしてゐる。従つて彼の群集は一般に群集以外と考へられてゐる社會にも互るのである。

更に、我等は彼の理論の内容についてもそのまゝ之を認容することができぬ。彼の説明の巧みであることは反つて私をしてこれを採用するに躊躇せしめるのである。

彼もリビドから説き出すことには變りない。彼のいふ所によると、リビドとは我等が普通愛といふ言葉に含めてゐるすべての事項に關係した本能的勢力の總量である。我等が愛で現はしてゐるものの核心は、性的結合を目的とした性的愛である。しかし、我等は此れ

を自愛と他愛に區別することはせぬ。そのわけはすべて此等の傾向が同一の本能の活動の表現だからである。兩性の關係においてこの本能は性的結合に向つて進むものであるが、他の事情ではその目的へ途中で、阻止されて、この本來の性質を全く失ひはせぬが、別のものとなる。接近欲、自己犠牲がこれである。これによつてみるに、リビドはプラトエロスの同一である。だが、彼はかくの如く廣義に考へつゝも、これが性的本能であることを斷言する。彼はこのリビドによつて群集を説明する。彼はいふ。「扱て、我等はこの愛の關係へ又は、もつと中性的な表現を用ひると情緒的な紐帶もまた群集心の本質をなすといふ假定を試してみる。一般の權威がかうした關係を少しも言明してゐないことを記憶しよう。これに相當するものは實に暗示といふ被布のかけにかくされてある。我等の假定は先づ二つの偶發的な思考によつて支持される。一つ、群集はある種の力で結合されてゐるといふこと、これは世界の萬物を支持してゐるエロス以外のいかなる力の作用に歸することができようか、二つ、個人が群集の中で自己の特性を放棄し他の成員の暗示に身を任せて了ふのは、彼が彼等と對抗しないで、調和したい要求を感じるからである。——結

局、彼は彼等のためにするといふ印象を與へるのである。』彼は試索的にリビド理論を群集に適用して以てその正確さを檢證しようとするのである。

彼は群集心理の主なる現象は個人が集團において自由を缺いてゐることであると論定する。此れを如何にして説明するかといふことが問題である。彼はこれに對して、愛の關係、又は情緒的紐帶の存在を前提とする。だが、この紐帶は決して單一のものでない。其れは更に二つに分れてゐる。指導者への紐帶と群の成員への紐帶が此れである。かうした紐帶の成立しない間群集は發生することができない。人間には自己中心主義が盛である。此の自己に對する愛は、極めて執拗であり、絶えず他に對する敵意を生ずる。何が基因と成つてかうした敏感性を生ずるかは不明だが兎に角これは儼存する。二人の間の友情とか親子の關係にさへ、なほその破片が認められるほどである。併し、群集においてはその抑制は消滅する。個人は互ひに同等のものであるかのやうに敵意を挟むやうな事はない。これは一つにリビドの紐帶によつて成就されるのである。利益の共同のみを以てしてはまだ十分でない。共同の際に成員が利益といふ點からみて不必要と思はれるまでこの關係を鞏固す

るところをみると、利益よりもリビドの重要であることが證明される。愛は世界をつなぐとさへいはれてゐる。群集において自我的愛が制限されてゐるのは、群集組織の本質が成員の間の新しいリビドの紐帯に存してゐるといふ斷乎たる證明をなす。次に群集におけるこの紐帯の性質如何の問題が提出される。

「神經病の分析研究において、我等は、從來なほ直接的に性的目的を追求するリビドとその対象とを繋ぐ紐帯を主として研究してきた。群集においてはかうした性的目的は問題にならぬ。問題となるのは、なほその勢力こそは減じないが本來の目的から歪曲されたりビドである。我等は既に普通の性的な対象賦與において本能的な性的目的から逸脱した現象を目撃した。我等はこれを戀愛状態の一樣相であり自我をある程度まで制御するものであると敘述した。我等は茲において戀愛状態の此の現象をもつと精査して、群集に存在する紐帯に移用することのできる諸條件をそのなかに發見しなければならぬ。併し、我等はまた、性的生活において我等の知悉するこの種の対象賦與が、他の人々との情緒的紐帯の唯一の態様であるか、或ひはこれに類した機構を考慮しなければならぬかといふことを

明らかにする必要がある。勿論、我等は人格同視といふ情緒的紐帯の他の機構の存していることを精神分析によつて知るのである。」

五

右はフロイドが群集のリビド的關係を検討しようとする際に提示してゐる大體の態度であるが、彼は戀愛關係と人格同視の二つの分析的關係を群集に移入してこの紐帯の本質を明らかにしようとするのである。戀愛關係と人格同視は群集の紐帯を形成する重要な二重の紐帯である。

「戀愛關係」とは何であるか。彼がここでいふ戀愛關係は多少特殊の意義を含んでゐる。直接的な性の満足の與へらるゝ場合は極めて單純であつて、これは普通の本能的戀愛である。しかし、性的關係は常にかくの如きものでない。更に欲望の消滅してゐる時も、將來この欲望の再生を打算して、性的対象を「戀愛する」といふ現象が生ずる。この性的關係は、他の要素によつて一層複雑化される。一旦小兒において性的対象が決定されると、無

限の性的欲望の大半は抑壓せられ、これは他の性的關係を根本的に一變して了ふ。性的關係は極めて殉情的なものに變化する。勿論、官能的傾向も全然消滅するものでなく、少年時代にいたつてそれは再び擡頭し來り、青年時代においては兩者の綜合的調整が問題と成る。この階級における性的關係にも最も注意すべきものである。此の關係のなかで、フロイドは、性的過重評價の現象に注意を促がす。これは愛の對象がある程度まで批評からの自由を享樂するといふ事實である。愛の對象者の特長は然らざるものよりも高く評價せられる説である。此の説において注意すべきは、理想化の過程である。對象は自我と同視せられ、その結果我等の自愛的本能が多量に對象へ移渡される。對象は自我の理想の代用をさへする。この状態が充進すると、性的満足は殆ど全部斥けられ、自我は益々謙遜にして柔和となり對象は益々崇高にして貴重となり、終に對象は自我の愛を全部吸収して了ふのである。對象が自我を消盡したともみることが出来る。卑屈な愛の制限、自己冒瀆は戀愛關係のあらゆる場合の特長である。本來自我の理想は自我に對し監督的役割を演ずるものであるが、自我が愛の對象に感蕩して了ふと、その作用は停止される。批評は沈黙する。

愛の對象をなし又は求める凡ての事は、正當となる。良心は對象のためになされた外面を審くことはできない。愛の盲目的な場合には、没自省は充進して犯罪に接近するにいたるのである。對象が自我の理想の地位を奪ふにいたる此の現象は、群衆における指導者に對する性的關係を明らかにする點において大いに注意すべきものといはねばならぬ。

催眠状態は、これを去る僅かに一步である。兩者の一致點は自づから明白であらう。孰れも同一の謙卑な服従、同一の批評の缺如、同一の順位、同一の個性の没却。催眠状態においては催眠術者が自我の理想の地位を奪ふのである。此の關係は戀愛状態におけるよりも一層明白に現はれてゐる。催眠状態は愛的關係に立つあるものへ絶對的に獻身することであつて、唯だ直接的な性的傾向が除外されてゐるだけである。フロイドは催眠状態を以て群衆の組織にくらべるのは不適當であるといつた。何故かといふと、寧ろそれは群衆の組織と同一であるといつた方がいゝからである。群衆の種々の複雑な組織のうち、それは唯一の要素——即ち個人の指導者に對する行動を抽出してゐるからである。

しかし、右の紐帶のみを以て群衆は成立せぬ。群衆には更に他の要素がある。此の説明

は、「人格同視」のなすところである。此れは精神分析において他人との情緒的紐帯の最初の表現であると知られてゐる。それはエデバスの心型を組織する一つの基礎と成る。小兒の成長をみるに、その心型は父への人格同視と母への倚慕とが結合して生ずるものであつて、此の場合人格同視は敵意的反對を意味する。しかし、本來それは兩面的であつて、他人を除去しようとする希望へ導くとともに、純情の表現に轉向することもある。我等の斷言しうることは「人格同視」が個人の自我をその根本とした自我にならつて改鑄しようとする努力するといふ事だけである。即ち、少女がその母と同じやうな苦痛の徴候——例へば咳き込み——を發展させる場合、それは母にとつて代らうとする敵對的な希望を意味し、彼の父に對する對象愛を表明する。しかし、此のしるしは、他方また愛好される人物の特長を倣つたものである場合がある。此の際我等は人格同視が對象選擇なくして現はれ、對象選擇が人格同視に歸したものと見なければならぬ。しかし、徴候の同視は更に第三の形式を有つてゐる。それは特に頻發し又た重要なものであつて此の場合人格同視は同視される人格との對象關係を全く超越してゐるのである。例へば、都會にゐる少女が私かに愛して

ゐる人から手紙をうけとつて神經的な發作を呈示する際、此の事情を知つてゐるある友人が心的傳染によつて同一の發作を起す場合がそれである。此の發動は同一の境遇に身をおきたいといふ希望又は可能に基づいてゐる。これは勿論同情から出た徴候でない。反對に、同情は人格同視の結果として生ずるに留まる。一つの我はある一點で他の我と大きな類似を認める。此の點が基礎と成り人格同視が發生する。これは病理的狀態の影響によつて他の我の徴候を呈示するものである。徴候による人格同視はかくして抑遏されなければならぬ二つの自我の間の結合點をなすに至つたのである。以上の三つの形式について斷案を下すと、第一に、人格同視は對象をもつ情緒的紐帯の原始的形式である。第二にそれは對象を自我に投影することによつて性的な對象的紐帯の代りをなすものである。第三に、それは性的本能の對象でないある他人との共通の性質が新たに認識された場合に發生することがある。此の共通の性質が重要であれば、それだけ人格同視も成功する。やがてそれは別の新しい紐帯の起源を現はすものである。そして、群衆の成員の間に存する相互的な紐帯——指導者とのそれでない——は實にかくの如き人格同視に類するものでそる。それは

ある特別な共通の情緒的紐帯を基礎としたものである。フロイドは此の共通の性質こそ指導者との紐帯の本質をなすものであると述べてゐる。かくの如き結帯の成立する結果として我等は人格同視から共感に進むことができる。即ち我等は他の精神生活に對しある態度をとる根柢となる機構を理解することができるのである。更に、またこの結果として、我等は自己の同視した心に對する攻撃的態度を制限し進んで彼等を幫助することにもなるのである。古代の部族の紐帯においては、共通の本質を認識せしむる徴候として共同食事を指示することができる。

以上の種々の紐帯を考へてくると、興味のあることは、その目的を抑壓された性的傾向こそ、人間間に永續的な紐帯を成立せしめるといふことである。官能的愛は満足の間際に消滅する。その永續せんがためにはそれが殉情的な要素を混入することが必要である。右の如き考察に基づいてフロイドは群衆の組織を次の方式、「同一の對象を自我の理想の代用としその結果自我において相互を同視するにいたつた一定數の個人である。」によつて示すのである。

彼は「人格同視」と「戀愛關係」其の他の二種の紐帯によつて群衆の組織を説明しようとする。兩紐帯は、如何に群衆のなかに現はれるか。彼は兩紐帯の實際的な共存については軍隊と教會を例にして次の如く述べてゐる。

「自我の對象との合一と自我の理想に對する代用は、我等の研究の出發點とした二つの大きな人工的群衆、即ち軍隊と教會において興味ある例を發見する。兵卒は彼の上官即ち軍隊の指導者を理想とする。一方、彼は同僚を自己と同一化し此の自我の結合によつて互助及び所有の分配の義務を負擔するのである。此れが所謂僚友である。しかし、もし彼が將軍と自己とを同一化しようとするならばそれは滑稽化するのである。……………」

「加特力教會において事情は異なる。凡ての基督教徒は基督を彼の理想として愛し、他の凡ての基督教徒と同一化の紐帯によつて結合されてゐると感ずる。しかし、教會の要求するところは之れに止まらない。彼はまた自己を基督と同一化し、他の教徒を基督の愛し給ふやうに愛しなければならぬ。二つの點において、教會は、群衆の組成によつて與へらるる性的關係が補充されなければならぬと要求する。對象選擇のある際、同一化が此れに添

加されなければならぬ。そして、同一化のある際には対象愛が此れに加はらねばならぬ。尤も此の添加は群衆の構造を明らかに超越してゐる。善良な基督教徒たり得ても、自己を基督の地位におき、彼のやうな人類に對する全擁的な愛を抱くことは困難である。弱い人間が救主の偉大な魂と博大な愛をもつことができるかと考へる必要はないのである。併し、群衆におけるリビドのひろがりがこの程度にまで發展する所に恐らく基督教の自づから高い倫理的標準に達してゐると主張する根據があるだらう。」

教會における性的紐帯は軍隊におけるそれよりもより複雑な状態を現出する。しかし、孰れも戀愛關係と同一化の二つの紐帯を根幹としてゐる點において同様である。群衆の成立する過程は二つである。戀愛又は催眠の状態に現はれたところの自我の理想を対象によつて代用する關係、即ち個人が自己の理想を指導者といふ対象によつて代置して生み出したところの有機的な紐帯、これが最も重要な連繫をなすものであるが、此の他になほ次の過程が添加される。それは他の個人との「人格同視」である。これは本來彼等がある対象に對して同一の關係を有してゐるところから可能とされたものであると見なければならぬ。

従つて前の紐帯が群衆の組成において根本的なものになる。個人と指導者との紐帯が生じ、それが起因となつて個人同志の間に、「人格同視」が生じ、個人相互の結合が生ずるのである。

フロイドの説くところは、群衆よりも社會を対象としてゐる點が多いやうに思はれる。この點を問はないで彼の説明を群衆のみに局限して考へてみる。彼の説明の構造は、リビドに基づいて二つの關係、「戀愛關係」と「人格同視」に據つてゐる。そして、その説明は極めて手に入つたものである。私は、その説明の巧妙なのに感嘆する。それは何故であるか。彼のこの説明によつて群衆において目撃さるゝ種々の特長、個人の無力、個性の没却、個人の順從などが十分理解せらるゝからである。此の實際的契合によつてリビド的な紐帯が群衆の中心をなすといふ假定は完全に肯認されることになる。しかし、余は強ち彼の考ふる如く、右の二つの關係を設定せずして、なほ群衆を十分説明し得ると考へる。人格同視と戀愛状態が平行しなければ群衆は生じないものであるか。恐らく實際にあつてはかくの如き二つの關係の合致をみるものとは断定出来ぬ。此等の關係は抑制された欲望（リ

ビド)を根柢とする。此れあるが故に此の關係がある。自分は、抑制なるものをフロイドが、重要視せず、寧ろ此の關係上の關係を説くに努めてゐるのをみる。私の考へるところでは、基礎的な抑制そのものにおいて既に説明は與へられてゐる。私は抑制そのものを伏在的原因と成し、その止むべからざる力——社會環境に溢れ出でんとする要求が自己欲望再實現の方法として群集に訴へることを確實なる事實として強調したい。フロイドはかくの如き力の横溢を其れ程考へてゐない。此の力の作動については、フロイドを基礎としたマルチンにおいて寧ろ勝れたものあることを發見する。彼は抑制なるものを實に社會的視界において、社會的意義において考量してゐない。フロイドには個人的心理の説明が大部分を占めてゐる。彼の二つの關係の説明の如きも抑制なるものとの交渉がかなり弱く考へられてゐる。殊に群集の反社會性ある所以などは、彼の説くところのみによつては不十分なではあるまいか。かく顧ると、彼の理論において抑制の社會的意義は閉却されてゐると云はねばならぬ。貢獻は認めるに躊躇しないが、マルチンの説くところにおいて寧ろ彼の抑制論の眞の發展があると考へる。他の意味する二つの關係は群集心の成立の過程に

おける一齣たるのみ。群集の淵源においては、抑制そのものを明らかにしておくことが重要である。そして、此の闡明によつて、我等は群集の對策を論ずるに當つて、最も重要な匡救の處置を指示することが出来る。